

令和4年度
WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）
コンソーシアム構築支援事業
研究報告書 第2年次



令和5年3月
奈良県教育委員会
事業拠点校 奈良県立国際高等学校

令和4年度 WWLコンソーシアム構築支援事業 研究報告書 目次

はじめに

教育長挨拶	1
学校長挨拶	2

1 事業概要

1.1 構想計画書	3
1.2 実施計画書	4
1.3 事業完了報告書	9

2 管理機関の取組

2.1 ALネットワーク運営委員会	26
2.2 ALネットワーク担当者会議	27
2.3 高校生国際会議実行委員会	27
2.4 ALネットワーク運営指導委員会	29

3 拠点校の取組

3.1 拠点校の取組概要	31
3.2 カリキュラム開発	
3.2.1 概要	34
3.2.2 グローバル探究I	
a 全体計画	35
b 地域探究の成果と課題	38
c 情報年間計画	40
3.2.3 グローバル探究II	
a 全体計画	42
b 6つのゼミの説明	43
c ゼミの取組	44
d グローバル探究校内発表会	59
e スタディツアーの成果と課題	62
f 文部科学省委託事業	77
3.2.4 グローバル探究III	
a 全体計画	79
b 6つのゼミ研究テーマ一覧	80
c ゼミの取組の成果と課題	81
d 高校生国際会議	90
e 論文作成	93
3.2.5 グローバル探究の評価	94
3.2.6 世界の言語I	
a 全体計画(シラバス)	96
b 3学期の課題研究	97
c 手話講座	97
d 韓国文化体験	97
3.2.7 世界の言語II	
a 全体計画	99
b 言語ごとの学び合い授業	100
3.2.8 世界の言語III	101

3.2.9	Immersion Science	103
3.2.10	英語	
	a カリキュラム全体	104
	b EAP I	105
	c EAP II	108
3.3	授業外の学び	
3.3.1	イングリッシュイマージョン	110
3.3.2	国際教養大学イングリッシュビレッジ	113
3.3.3	立命館アジア太平洋大学 (APU)異文化理解研修	115
3.3.4	大阪公立大学との連携	117
3.3.5	ESD旭山動物園研修	118
3.3.6	地域とのかかわり	
	a 登美ヶ丘わいわいフェスタ2022	124
	b 生駒みらいラボ	127
	c 登美ヶ丘マミーズ保育園	128
	d 韓国文化体験	129
	e 登美ヶ丘東小学校 英語教室	130
	f 登美ヶ丘南公民館でのイベント	131
	g 秋風のコンサート	132
	h ならism (奈良商工会議所青年部との連携)	133
3.3.7	図書館の取り組み	
	a 大阪大学ビブリオバトル	134
	b 多言語、特設コーナーなど	136
3.3.8	GCCの取組	137
3.3.9	生徒会の取組	141
3.4	成果の発表	
3.4.1	プレゼン甲子園	142
3.4.2	高校生フォーラム	143
3.4.3	甲南大学リサーチフェスタ	144
3.4.4	京都大学との架け橋	145
3.4.5	奈良県高等学校英語弁論大会 (ESS)	146
3.4.6	韓国語スピーチコンテスト	147
3.4.7	Let's 防災での発表	148
3.5	国際交流	
3.5.1	長期留学	
	a 長期留学生リスト・生徒の現況感想	149
	b 帰国生の講演 (1年生へ)	151
3.5.2	留学生の受け入れ	152
3.5.3	オンライン国際交流	
	a 概要	154
	b ニュージーランド	156
	c ドイツ	159
	d メキシコ学院 ひまわり学院	162
	e 嘉義高校	163
	f サン・テレーズ	164
	g 忠清南道 (K-POP高校)	165
	h 今後の計画	166
3.5.4	国際理解講座	
	a タイ文化講座	167
	b 2学期の講座	169
3.6	連携の広がり	
3.6.1	概要	171

3.6.2	延世大学（オンライン交流・協定締結）	172
3.6.3	国際教養大学	173
3.6.4	大阪公立大学	
	a 吉田先生講演会	174
	b 大学招待授業	175
3.6.5	畿央大学 福島先生	176
3.6.6	東京都市大学 佐藤先生	
	a 職員研修	177
	b 1年生へのプログラム導入	178
3.6.7	名古屋国際中学校・高等学校	179
3.6.8	同志社女子大学	181
3.6.9	コロラド州立大学	182
3.6.10	ACCU タイ教職員招へいプログラム	183
3.6.11	株式会社アイエスエイ グローバル講演会	185

4 成果と課題

4.1	コンソーシアムの成果と課題	186
4.2	拠点校の取組の成果と課題	
	4.2.1 成果と課題	187
	4.2.2 生徒・保護者アンケート結果	189
4.3	6つの力の検証に向けて（学校法人河合塾 山口大輔）	197
4.4	カリキュラムアドバイザーより（大阪公立大学 吉田敦彦）	208

資料

	教育課程表	210
--	-------	-----

令和4年度WWLコンソーシアム構築支援事業研究報告書に寄せて

奈良県教育委員会 教育長 吉田 育弘

奈良県立国際高等学校が令和3年度文部科学省指定事業のWWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業拠点校に採択されました。県立奈良高等学校、県立畝高等学校、県立青翔高等学校、県立法隆寺国際高等学校、県立高取国際高等学校、奈良女子大学附属中等教育学校及び奈良学園登美ヶ丘高等学校を県内事業連携校とし、本日まで2年間の取組を進めてまいりました。本事業に一方ならぬご尽力をいただいております皆様に、心から感謝申し上げます。

奈良県立国際高等学校は奈良県の「県立高等学校適正化実施計画」により令和2年4月に開校した学校であり、本年度、第1学年から第3学年まですべての学年がそろいました。国際高等学校はMissionを「多様な人々との積極的なコミュニケーションを通して、グローバルな視点でものごとを捉え、国際社会の平和と発展に貢献する資質・能力を育成する」として掲げ、「探究力」、「創造力」、「協働力」、「寛容さ」、「挑戦力」、「キャリアデザイン力」の6つの力の育成に取り組んでおります。開校当初から「グローバル探究」、「世界の言語」などの学校設定科目を開講し、グローバルな視点で持続可能な社会を目指す探究活動や多様な言語や文化に触れる機会をもつことで、「真の国際人」を目指す教育を実践しております。これらの学びをとおして、グローバルマインドをもつ「真の国際人」として世界に羽ばたいていくことでしょう。次年度の令和5年度には国際中学校が開校し、ますます活気あふれる学校となることが期待されております。

今年度は、WWLコンソーシアム構築支援事業の一環として、県として初の高校生国際会議を開催しました。拠点校である国際高等学校が中心となり、県内事業連携校と協力のもと、県内外及び海外の高校生が参加し、成功裏に収めることができました。WWLコンソーシアム構築支援事業で培った取組やその成果を他の高等学校等と共有して横の繋がりを深め、また、大学等の高等教育機関や事業協力機関等との縦の繋がりを一層強力なものとしていくことを期待しております。

2年間の取組を終え、大学の単位先取り制度の構築や本事業終了後の自走可能な事業展開など、取り組むべき課題は山積しておりますが、奈良県教育委員会としましては、本県のグローバル人材育成の一助となりますよう、取組を進めてまいりたいと考えておりますので、最終年度も御支援、御協力を賜りますようお願い申し上げます。

持続可能な社会に向けて

奈良県立国際高等学校長 中尾 雪路

変化がますます激しくなるこれからの時代を生きる子どもたちには、社会の変化に受け身で対処するのではなく、主体的に向き合って関わり合い、その過程を通して、自らの可能性を最大限に発揮し、自ら人生を創出することが求められます。

このような時代の要請を受け、県教育委員会が県立高等学校適正化実施計画を策定し、「新たな価値を創造する場」として、県立国際高等学校が令和2年4月に開校いたしました。県立国際高等学校は、「多様な人々と積極的なコミュニケーションを通して、グローバルな視点でものごとを捉え、国際社会の平和と発展に貢献する資質・能力を育成する」ことを Mission としています。

開校した令和2年4月は、新型コロナウイルス感染症が拡大しはじめた時期でした。新しい学びのはじまりに胸をはずませて入学した一期生は、開校式の2日後から在宅学習となりました。それ以降、教育活動が制限される中ではありますが、Missionの実現のため、教職員、保護者、生徒一丸となって新しい学校づくりに取り組み、この3月1日には1期生が学び舎を巣立っていきました。

この3年間、新型コロナウイルスは、私たちの生命や生活のみならず、社会、経済、行動・意識・価値観にまで影響を及ぼしています。私たち一人一人、そして社会全体が、未知の課題、答えのない課題にどう立ち向かうかが問われています。このような時代にこそ必要なのは、まさしく「新たな価値を創造できる力」です。持続可能な社会の実現に向けて、身近な出来事から解決すべき課題を見だし、知識を活用し、多様な立場の仲間と協働しながら、最適解を生み出すことのできる力です。様々な試練があってもそれを克服し、解決に向かう力も必要となります。国際高等学校では、Missionを実現するため、生徒たちが6つの力を身に付けることを学校の大きな目標としています。6つの力とは、主に知に関する分野の「探究力」「創造力」、心に関する分野の「協働力」「寛容さ」、行動の部分にあたる「挑戦力」「キャリアデザイン力」です。国際高等学校では、「グローバル探究」を中心とした授業はもちろんのこと、学校行事などすべての教育活動を通じて、これらの力を育み、国際社会の平和と発展に貢献することのできる人材を育成していきたいと考えています。

開校3年目である本年度、WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業のカリキュラム開発拠点校2年目を迎えました。次年度は最終年度を迎えます。「最古の国際都市奈良から発信 ～持続可能な社会に向けて～」をメインテーマとし、「探究力」「創造力」「協働力」「寛容さ」「挑戦力」「キャリアデザイン力」の6つの力を身に付けたグローバル人材の育成を目指して、事業の拠点としての役割をより一層果たしてまいります。

奈良県に学ぶ高校生がこの事業を機につながり、持続可能な社会の担い手として協働することができるようなコンソーシアムの構築に、事業連携校や事業協同実施機関とともに取り組んでまいります。この事業に携わっていただく皆様におかれましては、今後ご支援、ご指導を賜りますようお願いいたします。

期間	ふりがな	ならけんきょういくいんかい	都道府県番号
令和3年度	管理機関	奈良県教育委員会	29
～	ふりがな	ならけんりつこくさいこうとうがっこう	奈良県
令和5年度	事業拠点校	奈良県立国際高等学校	

**令和4年度WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業
構想計画書（概要）**

構想名（30字程度以内）

最古の国際都市奈良から発信 ～持続可能な社会に向けて～

構想概要（400字以内）*テーマ設定したグローバルな社会課題について必ず記載すること

拠点校である県立国際高等学校でSDGs等の地球規模の課題解決に向けて探究的な活動を行う先進的なカリキュラムの研究・開発を行う。また、奈良県教育委員会が中心となり、拠点校、県内の国公私立高等学校、海外の高等学校や国内外の大学・企業・国際機関等が協働して、奈良の地から東アジア、そして世界へと視野を広げたイノベティブなグローバル人材を育成するためのAL(アドバンスラーニング)ネットワークを構築する。様々な事業連携機関や留学生等の多様な背景や考え方、価値観を持つ人々との協働を通して、既存の仕組みを客観的に見つめ直し、最古の国際都市である奈良から持続可能な社会に向けて、新たな価値を提唱していく。

研究開発・実施体制

		機関名・学校名・情報						代表者・校長名	
管理機関		奈良県教育委員会						吉田 育弘	
事業拠点校		奈良県立国際高等学校 (公立)						中尾 雪路	550
		学科・コース名	1年	2年	3年	計	学校規模		
	対象:	国際科	190	190	170	550	550		
					0	0			
対象外:				0					
事業共同実施校	①	()						0	0
		学科・コース名	1年	2年	3年	計	学校規模		
	対象:				0	0			
					0				
対象外:				0					
事業協働機関 (国内外の大学、企業、国際機関等)	①	国連世界観光機関(UNWTO)駐日事務所							
	②	公立大学法人国際教養大学							
	③	株式会社アイエスエイ							
	④	学校法人河合塾							
事業連携校 (国内外の高等学校等)	①	奈良県立奈良高等学校					(公立)	前田 景子	
	②	奈良県立畝傍高等学校					(公立)	大石 健一	
	③	奈良県立青翔高等学校					(公立)	河合 知子	
	④	奈良県立法隆寺国際高等学校					(公立)	上田 精也	
	⑤	奈良県立高取国際高等学校					(公立)	渡部 憲一	
	⑥	国立大学法人奈良女子大学附属中等教育学校					(国立)	吉田 隆	
	⑦	奈良学園登美ヶ丘高等学校					(私立)	安井 孝至	
	⑧	Aquinas College (Australia)					(私立)	Peter Hurley	
	⑨	Gymnasium Ernestinum Rinteln (Germany)					(私立)	Reinhold Lüthen	

(別紙様式1)

令和4年 1月28日

事業実施計画書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住所 奈良県奈良市登大路町30番地
管理機関名 奈良県教育委員会
代表者名 教育次長 前田 景子

1 事業の実施期間

契約締結日 ～ 令和5年3月31日

2 事業拠点校名

学校名 奈良県立国際高等学校
学校長名 中尾 雪路

3 構想名

最古の国際都市奈良から発信 ～持続可能な社会に向けて～

4 構想の概要

拠点校である県立国際高等学校でSDGs等の地球規模の課題解決に向けて探究的な活動を行う先進的なカリキュラムの研究・開発を行う。また、奈良県教育委員会が中心となり、拠点校、県内の国公立高等学校、海外の高等学校や国内外の大学・企業・国際機関等が協働して、奈良の地から東アジア、そして世界へと視野を広げたイノベティブなグローバル人材を育成するためのAL(アドバンスラーニング)ネットワークを構築する。

様々な事業連携機関や留学生等の多様な背景や考え方、価値観を持つ人々との協働を通して、既存の仕組みを客観的に見つめ直し、最古の国際都市である奈良から持続可能な社会に向けて、新たな価値を提唱していく。

5 令和4年度の構想計画(本事業における教育課程の特例の活用:有)

(1) ALネットワークの形成

① 運営委員会の開催

ネットワーク運営委員会を組織し、年2回の会議をオンラインで開催

第1回 令和4年度のALネットワークの運営方針と予定を決定(6月)

第2回 令和4年度の研究総括(2月)

② 事務局会議(ALネットワーク担当者会議)の開催

奈良県教育委員会事務局教育政策推進課内に事務局を設置し、拠点校や関係機関との情報共有及び高校生国際会議開催のためのALネットワーク担当者会議を月1回オンラインまたは対面で開催

③ 海外大学・国内トップ大学進学、海外留学を促進する取組の実施

・海外留学説明会の開催(4月～5月)

・海外大学・国内トップ大学進学セミナーの開催(5月、7月、12月)

- ・中国清華大学でのワークショップ開催（8月） ※引率旅費県費負担
- ・国際教養大学教授を招聘し出前講座を開催（秋頃） ※県費負担
- ・韓国延世大学とのオンライン交流（1月頃）
- ・グローバルフェアの開催（3月）
- ④ カリキュラム・アドバイザーの配置
 契約日以降に配置したカリキュラム・アドバイザーが月2日程度事務局で勤務し、以下の業務にあたる。
 - ・カリキュラム研究開発計画に関する指導（5月）
 - ・カリキュラム内容についての指導・助言（通年）
 - ・教員向けワークショップの運営指導（8月）
 - ・連携校との探究プラットフォームフォーラム企画案の指導（10月）
 - ・探究プラットフォームフォーラムでの指導助言（2月）
 - ・1年間の研究総括と次年度の研究開発計画の指導助言（3月）
- ⑤ 高校生国際会議の開催
 国際会議は、令和4年7月にオンライン、対面のハイブリッド型で実施を予定
 - ・共催となる国連世界観光機関駐日事務所との協議（4月～）
 - ・ALネットワーク担当者会議及び高校生による高校生国際会議実行委員会を開催（月2回程度）し、拠点校及び連携校の高校生が国際会議を運営する。
- ⑥ 県内大学等が開催するサマースクール等への参加
 - ・連携校の生徒が海外の大学生等とともに学ぶ機会を創出できるよう関係機関と調整
- ⑦ 探究プラットフォームフォーラムの開催
 - ・連携校で「探究プラットフォーム」を構築（6月）
 - ・教員向けワークショップを開催（8月）
 - ・各校の探究活動の成果を発表・共有し、課題点等を協議するフォーラムを開催（2月）
- ⑧ 大学教育の先取り履修の実施に向けた計画
 - ・アドバンストプレイスメントシステムの構築の前段階として、県内外の大学主催の講座に高校生が参加できる仕組みを大学側と検討・調整（6月～）
 - ・大阪府立大学との教育連携協定締結により、高校生が大阪府立大学の講義への参加を試行実施し、大学での単位先取りにつなげる。

(2) 研究開発・実践

- ① 拠点校でWWL推進委員会を開催（5月、9月、1月）
 委員長：校長
 委員：教頭 教務部長 国際教育部長 進路指導部長 文化図書部長 学年主任
- ② 学校設定科目「グローバル探究」の開発・実践
 身近にある問題から探究のプロセスを繰り返す中で、自分自身の課題を設定し、フィールドワークやシンガポールでのスタディツアーなどで探究を深めながら、最終学年では、高校生国際会議の開催、日本語と英語での論文作成を目指す。
 - ア 「グローバル探究Ⅰ」（1年次3単位 必修） ※情報Ⅰ（2単位）を代替
 - ・情報Ⅰのテキストを用いた学習（通年 1単位）
 - ・ボルネオ島・旭山動物園をつないだオンライン授業（6月）
 - ・滋賀大学「高校生のためのデータサイエンス入門」をeラーニングで視聴（9月）
 - ・少人数ゼミによる探究活動・フィールドワーク（2学期以降）
 - ・各分野の専門家によるワークショップの開催（2学期以降）
 - ・校内発表会（1月）
 - イ 「グローバル探究Ⅱ」（2年次3単位 必修） ※異文化理解（2単位）を代替
 - ・少人数ゼミによる探究活動・フィールドワーク（通年）
 - ・シンガポールスタディツアー（10月）※昨年度は国内で実施

- ・外国人講師（6名）の英語によるグローバル課題研究の指導（5月～）
- ・海外の高校生・大学生との英語による課題研究オンライン交流（11月以降）
- ・ガー・レイノルズ名誉校長によるプレゼンテーション講座（10月）
- ウ 「グローバル探究Ⅲ」（3年次3単位 必修）
 - ・少人数ゼミによる探究活動・フィールドワーク（通年）
 - ・外国人講師（6名）の英語によるグローバル課題研究の指導（5月～）
 - ・高校生国際会議の運営及び課題研究発表（7月）
 - ・課題研究についての日本語及び英語での論文作成（9月～）
- エ 教員向けワークショップの実施
- ③ 学校設定科目「世界の言語」の開発・実践

複数の言語を学ぶことで、言語間の共通点や相違点に気付き、言語そのものへの理解が深まるだけでなく、世界の多様性への意識を育むことができる。このため、5言語すべてを学ぶカリキュラムを奈良教育大学吉村雅仁教授の指導で開発・実践する。研究成果については JACTFL（日本外国語教育推進機構）や EDILIC（Éducation et Diversité Linguistique et Culturelle）で共同発表。
- ア 世界の言語Ⅰ（1年次2単位 必修）

各言語の特性を理解するために、中国語、韓国語、スペイン語、フランス語、ドイツ語の5言語すべてについて、聞き、話す言語活動を中心に行う。
- イ 世界の言語Ⅱ（2年次2単位 必修）

1年で履修した言語の中から1つの言語を選択し、聞く、話す、読む、書く言語活動を行う。
- ウ 世界の言語Ⅲ（3年次2単位 選択）

2年で履修した第2外国語を継続して選択し、基礎的な文法及び語彙を学びながら日常的なテーマでコミュニケーションができる力を養成する。
- ④ 課題研究を効果的に進めるための取組
 - ア ホールスクールアプローチの構築
 - ・ユネスコスクールへの登録申請・加盟申請チャレンジ期間（令和3年12月～令和5年1月）におけるESDの推進
 - イ カリキュラム・マップの作成
 - ・全教職員による「グローバル探究」を中心に据えた教科横断的な学びの推進
 - ウ 英語によるコミュニケーション力向上のための取組
 - ・総合英語Ⅰでのネイティブ教員によるプレゼンテーション指導（通年）
 - ・ネイティブ教員及びガー・レイノルズ名誉校長による「サマーセミナー」の実施（8月）
 - ・専門科目「ディベート・ディスカッションⅠ・Ⅱ」における指導（2年次2単位、3年次2単位）
 - ・専門科目「エッセイライティング」における論文指導（3年次2単位）
 - ・国際教養大学イングリッシュビレッジの開催（年4回）
 - エ 外国人講師、ネイティブ教員の配置
 - ・6人の外国人講師を配置し、「グローバル探究Ⅱ」及び「グローバル探究Ⅲ」の6つの研究分野で英語によるグローバル課題研究をコーディネートする。（5月～2月）
 - ・5カ国語のネイティブ教員を配置し、「世界の言語Ⅰ」で月1回、「世界の言語Ⅱ」及び「世界の言語Ⅲ」のすべての授業で日本人講師とともにチームティーチングを行う。（県費負担）
 - オ 校外機関との連携
 - ・地域、企業及びNPOとの連携を推進する。
 - カ 国内大学及び旭山動物園での探究活動ワークショップ、立命館アジア太平洋大学

での異文化理解研修開催（最大30名 旅費補助一人50000円）

- ⑤ 国際交流を進めるための取組
 海外の連携校拡大を推進（通年）
 連携協定締結事務のため、渡航（11月、1月の2回）

- ア 「世界の言語」言語圏にある学校との交流
- ・フランス サン・テレーズ高等学校（フランス語）
 - ・メキシコの高等学校（スペイン語）
 - ・台湾 嘉義高級中学（中国語）
 - ・韓国 慶州女子高等学校（韓国語）

- イ 英語圏にある学校との交流
- ・シンガポール ウッドランドセカンダリースクール
 - ・オーストラリア ロビナハイスクール（予定）

(3) 事業の成果検証・評価

- ① カリキュラムの成果検証
 事業拠点校で、1年次、2年次、3年次の4月に、学校法人河合塾のアセスメントテスト「学びみらいPASS」を実施し、リテラシー・コンピテンシーを客観的に把握することで、研究の成果や課題を確認するとともに、生徒自らが客観的に伸びを認識する機会とする。アセスメントテスト受験後は、河合塾主催で教員及び生徒向けの講習会も実施し、カリキュラムの成果について分析を行う。
- ② 運営指導委員会による評価
 WWL コンソーシアム構築支援事業運営指導委員会を開催し（2月）、専門的な見地から指導・助言、評価を受ける。

(4) 成果の公表・普及

- ① 奈良県教育委員会事務局教育政策推進課の Web ページにおいて事業の取組を広く公開する。
- ② 事業拠点校の Web ページ（日本語・英語）において、拠点校における取組を広く公開する。
- ③ 探究プラットフォームフォーラムを外部へ公開する。
- ④ 事業拠点校で、研究授業・研究協議を実施する。

<添付資料> ・令和4年度教育課程表

6 事業実施体制

課題項目	実施場所	事業担当責任者
(1)AL ネットワークの形成 ①運営委員会の開催 ②事務局会議（AL ネットワーク担当者会議）の開催 ③海外大学進学等の促進 ④カリキュラム・アドバイザーの配置 ⑤高校生国際会議の開催 ⑥県内大学サマースクール等への参加 ⑦探究プラットフォームフォーラムの開催 ⑧大学教育の先取り履修に向けた計画	教育政策推進課 等	森田純司（管理機関）
(2)研究開発・実践 ①WWL 推進委員会の開催	県立国際高校 等	中尾雪路（拠点校）

②「グローバル探究」の開発・実践 ③「世界の言語」の開発・実践 ④課題研究を効果的に進めるための取組 ⑤国際交流を進めるための取組		
(3) 事業の成果検証・評価 ①カリキュラムの成果検証 ②運営指導委員会による評価	県立国際高校 教育政策推進課	①中尾雪路（拠点校） ②森田純司（管理機関）
(4) 成果の公表・普及 ①県教育委員会 Web ページ ②拠点校 Web ページ ③探究プラットフォームフォーラムの 成果を公開 ④拠点校の公開授業	県立国際高校 教育政策推進課	①森田純司（管理機関） ②中尾雪路（拠点校） ③森田純司（管理機関） ④中尾雪路（拠点校）
(5) 報告書の作成	教育政策推進課	森田純司（管理機関）

7 課題項目別実施期間

業務項目	実施期間（ 契約日 ～ 令和5年3月31日）											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
(1)AL ネットワーク の形成												→
(2)研究開発・実践												→
(3) 事業の成果検証 ・評価			○			○			○			
(4) 成果の公表・普 及												→
(5) 報告書の作成												○

8 再委託先の有無 無

9 所要経費
別添のとおり

【担当者】

担当課	奈良県教育委員会事務局 教育政策推進課	TEL	0742 27-9830
氏名	森田 純司	FAX	0742 27-2985
職名	指導主事	E-mail	morita-junji@office.pref.nara.lg.jp

(別紙様式3)

令和5年3月31日

事業完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住所	奈良県奈良市登大路町30番地
管理機関名	奈良県教育委員会
代表者名	教育次長 春田 晋司

令和4年度WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業に係る事業完了報告書を、下記により提出します。

記

- 1 事業の実施期間
令和4年4月7日（契約締結日）～ 令和5年3月31日
- 2 事業拠点校名
学校名 奈良県立国際高等学校
学校長名 中尾 雪路
- 3 構想名
最古の国際都市奈良から発信 ～持続可能な社会に向けて～

4 構想の概要
 拠点校である県立国際高等学校でSDGs等の地球規模の課題解決に向けて探究的な活動を行う先進的なカリキュラムの研究・開発を行う。また、奈良県教育委員会が中心となり、拠点校、県内の国公立高等学校、海外の高等学校や国内外の大学・企業・国際機関等が協働して、奈良の地から東アジア、そして世界へと視野を広げたイノベーティブなグローバル人材を育成するためのAL（アドバンスラーニング）ネットワークを構築する。
 様々な事業連携機関や留学生等の多様な背景や考え方、価値観を持つ人々との協働を通して、既存の仕組みを客観的に見つめ直し、最古の国際都市である奈良から持続可能な社会に向けて、新たな価値を提唱していく。

5 教育課程の特例の活用の有無
有

6 管理機関の取組・支援実績
(1) 実施日程

業務項目	実施期間（令和4年4月7日～令和5年3月31日）												
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
①運営委員会の開催			第1回									第2回	

運営指導委員会の開催												運営指導委員会
② AL ネットワーク担当者会議の開催	第1回		第2回	(以降、Google Workspace for Education の Classroom を活用し、随時、情報共有)								
③ 海外留学を促進する取組の実施	留学説明会	セミナー		セミナー	留学キャラバン隊					セミナー		
④ カリキュラムアドバイザーの配置	雇用開始	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	年間20日勤務
⑤ 高校生国際会議の開催				高校生国際会議								
生徒実行委員会の開催		第1回	第2回	第3～6回						第7回		
⑥ 県内大学等が開催するサマースクール等への参加	(感染対策のためサマースクールは中止)											
⑦ 探究プラットフォームフォーラムの開催										学習指導研究会 近畿地区 研究協議会		学習研究発表会
⑧ 大学教育の先取り履修の実施に向けた計画	(拠点校を中心に連携大学を新規開拓) (大阪公立大学及び同志社女子大学担当者と協議等)											

(2) 実績の説明

【実施体制の整備】

a 拠点校を中心として組織的に研究開発・実践に取り組む体制の整備状況について

カリキュラムアドバイザーを早期に雇用し、事業拠点校において教員及び生徒の指導を担当するとともに、事業連携校へも派遣を促した。同時に、外部講師の謝金及び旅費を確保し、事業連携校からの派遣依頼も呼びかけた。拠点校の県立国際高等学校では、充実した探究活動となるよう、生徒に対してもご指導いただいた。

b 関係機関の間で十分な情報共有体制を整備した状況について

AL ネットワーク運営委員会は、事業拠点校、事業連携校及び事業協働機関の代表者によって構成されているが、より円滑に事業を運営するために、事業拠点校及び事業連携校からAL ネットワーク担当者を選出していただき、AL ネットワーク担当者会議を開催した。実際に生徒を指導する立場にある教員がこの会議に参加することで、拠点校及び他の連携校で行われている取組について情報共有し、それぞれの学校での取組促進につなげた。

また、事業連携校同士がスムーズに情報共有を行えるよう、Google Workspace for Education を活用して「AL ネットワーク担当者 Classroom」を作成し、適宜、高校生国際会議生徒実行委員会の進捗状況等の情報共有を行った。

c 構想内容の水準を維持するため、管理機関の長、拠点高等学校の校長が果たした役割について

管理機関の長は、AL ネットワーク運営委員会を運営し、事業の進捗を管理した。また、事業推進のための人的支援及び財政的支援を確保した。

拠点校校長は、拠点校教員を指導し、校内体制の整備に努めた。年度当初に校務分掌を再編成し、新たにESD部を立ち上げ、事業に組織的に取り組む体制を構築した。本県における取組の構想水準を維持するために、事業連携校及び事業協働機関と密に連絡を取り、必要な場合には拠点校で打ち合わせする機会を設け、また、事業協働機関を訪問し、進捗状況などを報告するとともに、助言を求めた。さらに、AL ネットワーク拡大のため、国内の高等学

校・大学を訪問し、新規連携協定の開拓に奔走した。海外の高等学校や教育機関とも積極的に連絡を取り、海外の事業連携校のネットワークも広がりつつある。

d 運営指導委員会の開催実績や検証をするための組織について

運営委員会は6月に開催し、第2回運営委員会は2月に開催した。外部委員から構成する運営指導委員会は、2月にリモートにより開催し、高校生国際会議の成果や事業の進捗状況報告の後、運営指導委員から指導助言をいただいた。

e 拠点校の卒業生の進路と成長の過程を追跡する仕組みの構築について

拠点校である国際高等学校は、開校3年目の学校であり、今年度初めて卒業生が出ることになる。入学当初から海外への留学及び進学希望をもつ生徒や探究活動に高い興味関心を示す生徒が多いことから、今後、奈良県教育委員会としても、国際高等学校の卒業生の進路を追跡調査し、その動向やそれぞれの活躍について、学校と連携を図りながら、調査していきたい。

f アジア架け橋プロジェクトの留学生の支援体制について

本年度、奈良県にはアジア高校生架け橋プロジェクトを利用して、10名の留学生が来日している。管理機関においては、受け入れ校と連絡を取り、留学生の状況を把握している。それぞれの受け入れ校では、留学生担当の教員を配置し、県教育委員会及びAFS関係者と連絡を取り合いながら、留学生の日本での生活をサポートしている。

【財政的支援】

a 管理機関が自己負担額として計上した経費について

拠点校の国際高等学校における中心的な授業として、学校設定科目「グローバル探究」と「世界の言語」の授業が行われている。「世界の言語」では、第二外国語として第1学年より中国語・韓国語・スペイン語・フランス語・ドイツ語の5つの言語を学んでいる。これらの授業においては、従来の授業のように担当教員がそれぞれの言語を教授するだけでなく、ネイティブ教員が授業をサポートしているが、それらの人件費及び通勤に係る旅費を県費で負担している。

また、中国清華大学との交流については、県の知事公室国際課と連携をとりながら、交流の計画を進めている。生徒派遣に係る引率教員の旅費を教育委員会が、帯同職員及び通訳の旅費を国際課が予算計上した。

さらに、国際高等学校には開校当初より、計画的に洋書を購入する予算を確保している。予算は年間60万円であるが、継続し、国際高等学校の充実した洋書設置を支援している。

b 管理機関による人的又は財政的な支援や教職員育成の研修やセミナーについて

県内の高等学校を対象とした探究に係る学習指導研究会及び学習研究発表会を実施し、各校における取組の普及を行っている。

また、拠点校において、県内の全ての公立小学校、中学校・義務教育学校及び高等学校の教員を対象に研究授業等を実施し、指導助言を行い、取組の充実を図っている。今年度は、令和4年度近畿地区英語・国際関係科等設置高等学校長会秋季研究協議会を拠点校の国際高等学校において開催し、実践発表及び公開授業を行い、取組の成果を共有した。

c 国の委託が終了した後に継続的に事業を実施するための計画

上述の「世界の言語」ネイティブ教員の人件費及び旅費は、WWLコンソーシアム構築支援事業終了後も継続して予算化する予定である。また、中国清華大学との交流に係る引率教員等の旅費及び洋書購入費用についても、事業終了後も県費からの支出となる予定である。

本年度第1回開催となった高校生国際会議についても、事業終了後も継続実施できるように取組を進めてまいりたい。

【AL ネットワークの形成】

a AL ネットワーク運営組織の実績について

管理機関、事業拠点校、事業連携校及び事業協働機関が同じ方向に向かい事業の目標を達成できるよう、第1回AL ネットワーク運営委員会を6月に開催し、事業運営の方向性について確認した。拠点校及び連携校から学校長が出席し、事業協働機関からは各機関の代表が出席した。連携校学校長からは同事業への協力を約束し、事業協働機関からは、それぞれが得意とする分野での連携や協力を確認した。

b AL ネットワーク運営組織による新たな共同事業の開発について

第2回AL ネットワーク運営委員会を2月に開催し、本年度の事業内容を振り返り、運営指導委員会からの指導助言も参考にして、事業協働機関から次年度に向けたさらなる連携協力を提案いただき、事業拡張を進めている。

c プログラム修了生の国内外の大学進学や海外留学促進について

事業協働機関である株式会社アイエスエイからは、海外留学に向けた情報提供や希望をもつ生徒のカウンセリングを継続的にしていただいている。教育連携協定を結んでいただいている大阪公立大学や同志社女子大学に関しては、高校生が大学への授業参加や大学教員の国際高等学校への出前授業などが実現している。県教育委員会としては、これらの連携を高大連携や単位先取り制度の構築へとつなげていきたい。

d カリキュラムを開発する人材の配置状況について

カリキュラムアドバイザーは、年間20日のペースで国際高等学校に勤務していただいた。国際高等学校教員と前年度までの取組について振り返りを行った上で、探究活動の意義やキャリア形成について、生徒に講演していただいた。また、「個人探究週間」や異学年が学び合う「たてにつながる探究交流会」を提案いただくなど、カリキュラム開発を推進いただいた。

カリキュラムアドバイザーが学校に勤務することで、「グローバル探究」授業担当者（国際高等学校では全教員が担当者である）は、授業について相談しやすい環境にあり、任意の相談を随時受けて、助言をいただいた。

e 高校生国際会議等の実施について

奈良県初の高校生国際会議を7月29日に実施した。県内4校、県外3校、海外から2校、合わせて約500名の生徒が参加し、6つのテーマに分かれてSDGs等の地球規模の課題について議論を交わし、意見をまとめ、全体に向けて提言を行った。

高校生国際会議では、AL ネットワーク校から集った生徒約40名による生徒実行委員会が企画・運営を行った。生徒実行委員会では、学校の枠を越えて生徒同士が積極的に意見を交わし、回を重ねるごとに共通理解を深めていった。

f 事業成果の社会普及や成果報告会などの実施について

本事業における事業成果は、拠点校のホームページで公開するとともに、県教育委員会のホームページでも紹介する。県内の各広報メディアにも掲載し、各報道機関にも報道資料として提供し広く県民にも周知する予定である。

g 関係機関との協定文書等について

「公立大学法人国際教養大学、奈良県立国際高等学校及び奈良県教育委員会の教育連携に関する協定」

「大阪府立大学、奈良県立国際高等学校及び奈良県教育委員会の教育連携に関する協定」

「同志社女子大学及び奈良県立国際高等学校の教育連携に関する協定」

7 研究開発の実績

(1) 実施日程

業務項目	実施期間 (令和4年4月7日 ~ 令和5年3月31日)											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
①推進委員会の実施		第1回				第2回				第3回		
②学校設定科目「グローバル探究」の開発・実践	職員研修	職員研修		公開授業				公開授業				公開授業
グローバル探究Ⅰ		探究交流会	ボルネオ島オンライン授業	探究交流会	プログラミング講座(希望者)				探究の成果発表会		大阪公立大学オンデマンド講座	探究交流会
グローバル探究Ⅱ		探究交流会	ゼミ活動開始	探究交流会 高校生国際会議			中間報告会 スタディツアー	タイ教職員招へいプログラム		報告会		探究交流会
グローバル探究Ⅲ		探究交流会		探究交流会 高校生国際会議		論文作成開始					論文完成	
校外発表会参加					全国プレゼン甲子園	食のSDGサクシオンプラングランプリ	京都大学への架け橋		高校生フォーラム 甲南大学リサーチフェスタ		WWL連携校課題研究発表会 SDGsクエスト未来甲子園関西エリア大会	長崎東高校 WWL 探究発表会 京都大学ポスターセッション
③学校設定科目「世界の言語」の開発・実践								公開授業				
世界の言語Ⅰ	オリエンテーション 言語①	言語①	言語②	言語③		言語③	言語④ 言語④	言語⑤ 言語⑤	振り返り言語選択講演会	課題研究 特別講義	特別講義 手話講座	オリエンテーション
世界の言語Ⅱ	各言語	各言語	各言語	各言語		各言語	各言語	各言語	各言語		多言語学び合い交流会	
世界の言語Ⅲ	各言語	各言語	各言語	各言語		各言語	各言語	各言語	各言語			
校外スピーチコンテスト							中国語スピーチコンテスト	韓国語スピーチコンテスト 英語スピーチコンテスト	英語ディベート大会 留学生スピーチコンテスト			スペイン語スピーチコンテスト
④課題研究を効果的に進めるための取組		畿央大学出張講義 東京都市大学出張講義		いこま未来Lab 畿央大学出張講義 コロラド州立大学出張講義	イングリッシュイマージョン プログラミング講座 ESD 研修			異文化理解研修 (APU)	国際教養大学出張講座	大阪公立大学訪問研修	なら ism 同志社女子大学訪問講座	イングリッシュビレッジ (AIU)

⑤国際交流を進めるための取組		中国・日本メキシコ学院とのオンライン交流	フランスとのオンライン交流			ひまわり日本学院とのオンライン交流	国際サロン ニュージ ーランド とのオン ライン交 流	ニュージ ーランド とのオン ライン交 流	韓国文化 体験 フランス ・中国と のオンラ イン交流		サンテレ ーズ高校 (フラン ス)との 姉妹校提 携締結 延世大学 訪問 ひまわり 日本学院 とのオン ライン交 流 ドイツと のオンラ イン交流
----------------	--	----------------------	---------------	--	--	-------------------	--	-----------------------------------	--	--	--

(2) 実績の説明

a 設定したテーマについて

本事業では、「最古の国際都市奈良から発信～持続可能な社会に向けて～」を大テーマとし、その中に以下の6つのカテゴリーを設定した。拠点校における学校設定科目「グローバル探究」では、学年全体を6つのゼミに分けて探究活動を行っており、今年度実施した高校生国際会議においても、これら6つのテーマに基づき、国内外の高校生と議論を行った。

- 1 みんなでつくる笑顔のコミュニティ（防災、まちづくり、福祉、医療、経済、教育）
- 2 いのちの輝きを未来に伝える（生物多様性、保全、共生、環境問題）
- 3 蒼い地球を未来につなぐ（気候変動、地球温暖化、エネルギー）
- 4 先人の知恵を未来へ届ける（伝統文化継承、世界遺産、地域遺産）
- 5 グローバルが生み出す力（国際理解、国際協力、多文化共生）
- 6 みんなちがうからみんなで支え合う（平和、人権、インクルーシブ、多様性）

b イノベーティブなグローバル人材育成に資する体系的かつ先進的なカリキュラム研究開発を、国内外の大学、企業、国際機関等との協働により行ったことについて

本事業では、イノベーティブなグローバル人材に必要な資質能力を「探究力」「創造力」「協働力」「寛容さ」「行動力」「キャリアデザイン力」という6つの力に定めている。

6つの力の検証は、学校法人河合塾と連携して作業を進めてきた。本年6月には、河合塾学びみらいPASSの実施後に、河合塾山口氏を講師として教員研修を行った。また、「キャリアデザイン力」を高めるため、大阪公立大学吉田教授を講師に招き、講演会を実施した。昨年度連携協定を締結した大阪公立大学には、様々な面でカリキュラム研究開発に協力をいただいている。特に、「グローバル探究I」の情報分野では、プログラミング講座やデータサイエンス講座を実施いただいたほか、プログラミングの授業においては、大阪公立大学の院生にTA（ティーチングアシスタント）をお願いした。1月には、大学のゼミに国際高校の生徒が訪問し、課題研究について、大学生の前で発表する機会を得た。「世界の言語」のカリキュラム開発には、奈良教育大学吉村教授の全面的な支援を受けている。また、立命館アジア太平洋大学において、生徒14名が大学の留学生と異文化理解研修を行った。また昨年度連携協定を締結した同志社女子大学にも2月に生徒が出向き、授業を受けた。3月には、大学進学に向けた新たな協定を締結した。本年度は新たに国際教養大学の出張講義や対面でのイングリッシュビレッジ（大学開催）も実施することができた。

c 設定したテーマと関連し、外国語や文理両方の複数の教科を融合した内容を、外国語を用いながら探究活動を行う「グローバル探究」等の教科・科目を設定した状況。また、その実施にあたって外国人講師等を活用した実績について

拠点校には、学校設定教科「国際教養」を新たに設定した。教科設置の目的は、「異なる言語・文化、世界の歴史や自然科学について幅広く学ぶことで、国際人として必要な教養を身に付けるとともに、様々な探究活動等を通して、強い探究心と主体性をもって、国際社会で新たな価値を創造していく自立した態度を養う。」こととしており、この学校設定教科「国際教養」に複数の教科を融合した内容について英語で探究活動を行う学校設定科目「グローバル探究」や英語以外の外国語やその文化について幅広く学ぶ「世界の言語」を設定し、両科目において、外国人講師を活用している。

ア グローバル探究

(7) グローバル探究Ⅰ（1年次3単位）※情報Ⅰ（2単位）を代替

年度前半は、ワークショップやフィールドワークをとおしてESDの感覚を身につけた。年度後半は、探究のプロセスを学習し、地域の魅力及び課題について情報収集を行い、発表しあった。

(4) グローバル探究Ⅱ（2年次3単位）

世界の様々な問題に係る情報収集や3年生との探究交流会などを行い、ゼミ担当教員と面談をしながら6つのテーマを基に、探究テーマを決定した。ゼミ内報告会などを経て、3月には、1年生との探究交流会を実施し、発表及びディスカッションを行った。

(5) グローバル探究Ⅲ（3年次3単位）

探究のテーマを深め、7月に実施した高校生国際会議において発表・協議し、宣言文により、行動方針を共有した。それぞれのテーマに基づき論文を作成し、他者と意見交換するなど探究を深めた。

(参考) 「グローバル探究Ⅰ」スケジュール

【対象】 1年生
【時間】 火曜1限、金曜5限
<p>【目的】</p> <p>1学期</p> <ul style="list-style-type: none"> ・グローバル探究や本校で身につけて欲しい能力について学習する。 ・自分と世界のつながりを認識しESDの感覚を身に付ける。 ・様々な活動を通して探究プロセスを学ぶ。 <p>2学期</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域の魅力、課題を探究する中でSDGsを自分ごと化する。 ・探究活動を行う中で主体性を養う。 ・発表、協働の場を設け、生徒間、生徒教員間の交流を深める。 <p>3学期</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2学期の活動を振り返り、これまででできたこと、できなかったこと等を把握する。 ・グローバル探究Ⅱでの活動を円滑にするため、探究の手法について学習する。 ・自らの興味関心をもとに2年生以降の探究活動の展望をする。
<p>【計画】</p> <p>1学期</p> <p>1, 機器の設定 Google Classroom、School Takt、Classiの設定。</p> <p>2, 国際高校の6つの力、ミッションについて</p>

国際高校における6つの力、ミッションを確認し、セルフチェックシートを用いて現在の自分の認知を図る。

- 3, 正しい情報収集の仕方について
ジャパンナレッジを用いて正しい情報の収集方法について学ぶ。
- 4, 校外学習準備
5月に実施する校外学習の事前準備を行う。近鉄奈良駅付近でのフィールドワークのテーマは、「世界と日本のつながりを探す」。当日はどこで何を目的に探索するのかグループ毎に決定する。
- 5, 校外学習 テーマ：世界と日本のつながりを探す フィールドワーク
- 6, 校外学習のまとめ、発表
- 7, グローバル探究が目指すことと国際高校の生徒に身に付けてほしい意識（ESD）について
ホセムヒカ、セバンスズキのスピーチを聞いて30年後について考える。
- 8, 世界の持続可能性を阻害する問題とは（ボルネオ島の現状）
- 9, 熱帯雨林分断ワークショップ
ボルネオ保全トラストジャパンと日本水族館動物園協会の協力園と共同開発中のボードゲームをアレンジした高校生版を使用。
- 10, ロールプレイ（様々なステークホルダーの視点から物事を見る）
- 11, パーム油について専門家から話しを聞く（情報Iと教科横断、ボルネオ保全トラストジャパン 青木崇史事務局長によるオンライン授業）
- 12, 6月以降に取り扱っている諸問題に対して自分たちができることを考え、解決方法をクラス内で共有
保全専門家に話を聞く（旭山動物園、ボルネオ保全トラストジャパンによるオンライン授業）。

夏休み

7月に考えた問題の解決方法の実践

2学期

- 1, 夏休みの実践、探究についてまとめ、発表
- 2, 日本の課題について（SDGsワーク）本ワークについては、3.6.6 東京都市大学 佐藤先生 b 1年生へのプログラム導入を参照されたい。
- 3, SDGs新聞ワーク（朝日新聞社「ペタッとSDGs」）
<https://www.asahi.com/corporate/sdgs/13208860>. (2023/2/24)
- 4, 地域の魅力発見
魅力を探る際、「文化」「環境」「経済」の3領域の切り口からウェビングマップを用いて情報の可視化を行う。そして自分の内発的動機付けに従って魅力を発見する。

- 5, 地域の魅力をクラス内で共有
- 6, 地域の魅力の持続可能性を阻害しているもの→課題
- 7, 地域の課題について調査
インターネット、文献、インタビュー等を通じて情報収集を行う。
- 8, 課題をまとめる、発表準備
- 9, 学年内で発表
発表は2段階設定：1) 座談会形式 2) 講演形式
1) 座談会形式ではクラスの枠組みを取り払い学年内の生徒で交流
2) 上記をもとにアンケートを取り、選抜者を決定し、体育館で学年全員に向けて発表。発表会には奈良商工会議所青年部寺西壮平理事を招き、講評していただく。
- 10, 課題の整理、解決策を考える
- 11, 解決策の考察
自分が考えた解決策にはどんな社会的意義があるのか、また、解決するために自分たちができることを探る。
- 12, 2学期の地域探究まとめ
2学期の探究活動について文章化する。

冬休み

探究コンテストへの応募に向けて文章、データの整理

3学期

- 1, 2学期の探究プロセスを振り返る
自分が行ってきた探究活動を振り返り、文章化することで活動を可視化、整理する。
- 2, 探究の手法について学ぶ
今後探究活動及び学生生活を送る上で重要となるスキルについて学習する。例) クリティカルシンキング等
- 3, グローバル探究Ⅱに向けての準備
ゼミ分けに際して自分の興味関心を深堀し、志望動機を作成する。

(参考) 「グローバル探究Ⅱ」スケジュール

【対象】 2年生

【時間】 月曜7限、木曜6・7限

【目的】

1学期

- ゼミのテーマに関する世界のさまざまな問題に目を向ける
- ゼミのテーマに関する幅広い情報の収集。
- 探究テーマを見つける。
- 持続可能な社会を作る生き方と自分の将来（進路）をつなげる

夏休み

- 探究テーマを深める

2学期・3学期

- 探究テーマに沿って持続可能性を阻害する問題について、その原因を探りながら、より良い未来を作る方法を考え、高校生にできることから実践する
- 自分たちの学びを他者に伝えるとともに、仲間の活動から学びを得る

【計画】

1学期

- 新聞ワーク
 - ・ 新聞を読み、それぞれが新聞から気になる記事を見つけ、深掘りする。
 - ・ ニュースについて、その背景について、興味を持った理由などをグループで共有、意見交換。
- たてにつながる探究交流会（7月4日）
 - ・ 各ゼミの3年代表生徒の発表を聞く。
 - ・ 3年生と発表に関するテーマでディスカッションをする。
- 探究テーマの決定
 - ・ ゼミ担当教員と面談をしながら、探究テーマを決定する。
 - ・ ファミリーにわかれて活動スタート。

夏休み

- ゼミによって、ミーティング、調査、研修など実施

2学期

- 探究ゼミごとにファミリー活動
- ゼミ内中間報告（10月中旬）
 - ・ 自分達の探究テーマや問題解決に向けての課題をゼミ内で発表（日本語）。
 - ・ 12月実施のWWL全国高校生フォーラム参加者を決定。
- スタディツアー（10月25日～28日）
 - ・ 各ゼミでの活動をさらに深めるフィールドワーク。

冬休み

- ゼミによって、ミーティング、調査、研修など実施

3学期

- ゼミ内報告会（1月下旬）
 - ・ 探究テーマに対する各自の取り組みをゼミ内で発表（日本語）。
 - ・ 飛鳥中学校教員による発表見学と講評。
- たてにつながる探究交流会（3月上旬）
 - ・ 各ゼミの2年代表生徒が1年生に探究活動を発表。
 - ・ 1年生と発表に関するテーマでディスカッションをする。
 - ・ 2月下旬よりファシリテーションの練習（各ゼミ4名）。

春休み

- ゼミによって、ミーティング、調査、研修など実施

(参考) 「グローバル探究Ⅲ」スケジュール

【対象】 3年生
【時間】 火曜7限、金曜6・7限
【目的】 1学期 <ul style="list-style-type: none">● 探究のテーマを深めつつ、高校生国際会議に向けた準備を進める● 論文作成に関わる、書き方や形式を身につける 夏休み <ul style="list-style-type: none">● 高校生国際会議にて、宣言文を作成し未来へつながる行動指針を共有する● 各自論文の作成を進める 2学期 <ul style="list-style-type: none">● 論文を完成させ、他者と共有することにより探究のさらなる深化を図る
【計画】 1学期 <ul style="list-style-type: none">● 高校生国際会議に向けて、探究の成果を発表する● 論文のてびきを配布し、論文の形式や注意事項について確認する● たてにつながる探究交流会（7月4日）<ul style="list-style-type: none">・ 各ゼミの代表生徒を選出し、発表を行う。・ 1・2年生と発表に関するテーマでディスカッションをする。 夏休み <ul style="list-style-type: none">● 高校生国際会議で、発表者だけでなく参加者全てを巻き込んだディスカッションを行い、未来につながる行動指針を作成する 2学期 <ul style="list-style-type: none">● 要旨とともに論文を完成させ、推敲を行う● 論文の交流を通じて、他者の視点をふまえてさらに探究を深化させる

イ 世界の言語

(7) 世界の言語Ⅰ（1年次2単位 必修）

全員が中国語、韓国語、スペイン語、フランス語、ドイツ語の5言語を8時間ずつ学ぶカリキュラムを全国で初めて開発し、言語そのものの習得だけでなく、異文化、多様性の理解につなげることを大きな目的としている。各言語の最終2時間には、各言語のネイティブ教員が授業に入り、身の周りのことを表現するやり取りや異文化理解の講義を実施している。

3学期には、奈良教育大学の吉村教授による講義を受け、言語によることわざの類似点や相差点、表現の違いなどを考え、言語に対する学びを深めた。

(4) 世界の言語Ⅱ（2年次2単位 必修）

1年で履修した言語の中から1つの言語を選択し、聞く、話す、読む、書くの言語活動を行う。全ての授業で、日本人教員とネイティブ教員のティームティーチングを実施している。学年末には、課題研究として、各言語での学びについて、他言語を学んだ生徒に伝える成果報告会を実施した。

授業の中では、各言語圏の高校生とのオンライン交流を取り入れることを目標とし、全言語で少なくとも一回の交流を実施することができた。

(5) 世界の言語Ⅲ（3年次2単位 選択）

2年で履修した言語について、聞く、話す、読む、書くの言語活動を発展的に行う。全校生徒

の約半数が選択する予定となっている。進路先として、各言語を継続的に学べる大学を選択したものも多く、スムーズな大学での学びにつながるよう今後も高大連携を進めていきたい。

(参考) 「世界の言語Ⅰ」年間スケジュール

	1組	2組	3組	4組	5組
4/15	オリエンテーション (奈良教育大学吉村教授)				
4/20-5/27	フランス語	ドイツ語	中国語	韓国語	スペイン語
6/1-6/24	韓国語	スペイン語	フランス語	ドイツ語	中国語
6/29-9/30	ドイツ語	中国語	韓国語	スペイン語	フランス語
10/5-11/2	スペイン語	フランス語	ドイツ語	中国語	韓国語
11/4-12/2	中国語	韓国語	スペイン語	フランス語	ドイツ語
12/7	これまでの振り返りと言語の選択について (奈良教育大学吉村教授)				
1/13、20、2/3	課題研究	課題研究	課題研究	課題研究	課題研究
1/18、25、2/8	吉村先生の特別講義	吉村先生の特別講義	吉村先生の特別講義	吉村先生の特別講義	吉村先生の特別講義
2/10	手話講座				
2/15	次年度に向けてのオリエンテーション				

各言語は8時間 (週2時間×4週間) 実施。最終日はネイティブ教員とのTT

- d 海外の連携校等への短期・長期留学や海外研修を、カリキュラムの中に体系的に位置づけて実施したことについて

学校設定科目「グローバル探究」の一環として、2年生の10月にシンガポールへのスタディツアー (全員参加) を計画していたが、コロナ禍のため、行き先を国内 (九州) に変更して10月に実施した。6つのゼミごとにフィールドワークを行い、現地の人とつながるという形で、国内ではあるが、スタディツアーの当初の目的は達成できた。

学校設定科目「世界の言語Ⅱ」では、上述の通り、言語ごとに、その言語を話す国・地域の高校生と国際交流 (オンライン) を行うことができるように、海外交流アドバイザーを中心に調整を進め、成果を上げた。

- e 体系的なカリキュラムの編成にあたって、文系・理系を問わず、各教科をバランスよく学ぶ教育課程の編成をしたことについて

拠点校は、国際科単独設置校であり、1年次から3年次まで、文系・理系のクラスやコース分けのない教育課程を編成している。2年次からは、個々の進路希望等に応じて科目選択するため、卒業までに取得する単位数は、各教科で一律とはならないが、3年間の各教科における単位数は以下の範囲の中で設定している。

教科の例	1年	2年	3年
国語	4	3～7	5
地歴・公民	2	4～5	2～9
数学	5	6～7	2～7
理科	4	2～6	0～6
外国語	6	5～7	7～11
国際教養 (教科横断)	5	5	3～10

- f 学習活動が、構想目的の達成に資するよう工夫したことについて

拠点校においては、「グローバル探究」を全教科や教科外の教育活動の中心に位置付けながら、以下のような取組を実施している。

ア カリキュラムマップの作成

「グローバル探究」を教育活動の中心として位置づけたカリキュラムマップを作成し、教科等横断的な学びが実現するように工夫をしている。

イ 探究の方法を学ぶ

週3時間、「グローバル探究」でゼミに分かれて探究活動を行う中で、問題解決のプロセスについて学び、情報収集力、情報分析力、課題発見力、構想力、表現力、実行力を身に付けている。

ウ 英語によるプレゼンテーション・ライティング指導

「総合英語」では、ネイティブ教員による単独での授業を実施し、ライティングやプレゼンテーションの指導を行い、生徒の英語によるアウトプットの能力を向上させている。プレゼンテーションの世界的な第一人者であるガー・レイノルズ教授が、拠点校の名誉校長であるため、希望者向けのサマーセミナー（8月）や2年生対象に英語による効果的なプレゼンテーション方法についての講義（11月）も実施した。

エ 専門教科英語「ディベート・ディスカッション」

地球規模の課題について英語でディベートやディスカッションができる力を付けるため、「ディベート・ディスカッション」を全員必修とし、ネイティブ教員による授業を実施している。（2年次2単位、3年次2単位全員履修）

オ 専門教科英語「エッセイ・ライティング」

1クラスを二つに分けた少人数習熟度別でネイティブ教員または日本人教員とALTのティームティーチングで授業を実施している、1学期には英語での論文の書き方を学び、2学期には「グローバル探究」で作成した日本語の論文を英語に翻訳する指導を行った。（3年次2単位全員履修）

カ 探究力を測る

全学年4月に、学校法人河合塾のアセスメントテスト「学びみらいPASS」を実施し、リテラシー・コンピテンシーを客観的に把握することで、研究の成果や課題を確認するとともに、生徒自らが客観的に伸びを認識する機会としている。アセスメントテスト受験後は、河合塾主催で教員向けの研修と生徒向けの講習会も実施した。

g 高大連携による大学教育の先取り履修を可能とする取組を実施（または計画）したことについて

拠点校より近畿圏の大学を訪問し、拠点校の教育活動について説明を行った上で、高大連携の協力を依頼している。連携校である大阪公立大学、同志社女子大学、国際教養大学とは、出張講義や大学での授業参加などの取り組みを進めているが、先取り履修の実現までは至っていない。本年度は新たに天理大学とも連携の可能性について調整を開始した。

h より高度な内容を学びたい高校生が学習できる環境整備について

ア 国際教養大学によるイングリッシュビレッジ

イングリッシュビレッジとは、2泊3日の英語だけで行われるプログラムで、国際教養大学の日本人学生2名、留学生1名が指導を行う。このことについては、すでに令和元年11月15日に締結した「公立大学法人国際教養大学、奈良県立国際高等学校及び奈良県教育委員会の連携協力に関する協定書」の第2条第3項に明記している。令和4年度は3月に実施した。

イ 国際教養大学による出前講座

令和4年度は、12月に国際教養大学より講師を派遣し、高校生向けの出前講座を開催した。

- i 国が実施するアジア高校生架け橋プロジェクトや海外の連携校等からリーダー、架け橋となる人材を受け入れ、日本人高校生と留学生と一緒に英語等で授業・探究活動を履修するための学校体制整備について

本年度は、アジア架け橋プロジェクトより3名（マレーシア、インドネシア、カンボジア）、AFS 留学生（スウェーデン）1名、YFU 留学生（タイ）1名の合計5名を受け入れた。拠点校にはESD 部内に留学生担当を置き、受け入れの事務全般にあたるほか、各留学生のメンタル面でのサポート、日本語指導のため、学習指導員を配置している。

留学生はすべての授業で日本人高校生と一緒に学び、3年で開講している学校設定科目「イマージョン理数」では、英語を用いて留学生と共に日本人高校生が理数系の探究を行っている。また、7月に開催された高校生国際会議では、留学生も英語でのディスカッションなどに積極的に参加した。

- j その他特筆すべき点について

「グローバル探究」のゼミ活動の中では、地域の自治会や公民館、地域のボランティアの方々などに様々な協力を得ている。各探究の内容は地球規模の課題ではあるが、課題を自分ごととして捉え、地域の人々とともにアクションを起こしていくことができるようにしていきたい。

8 目標の進捗状況、成果、評価

- (1) イノベーティブなグローバル人材の育成状況について

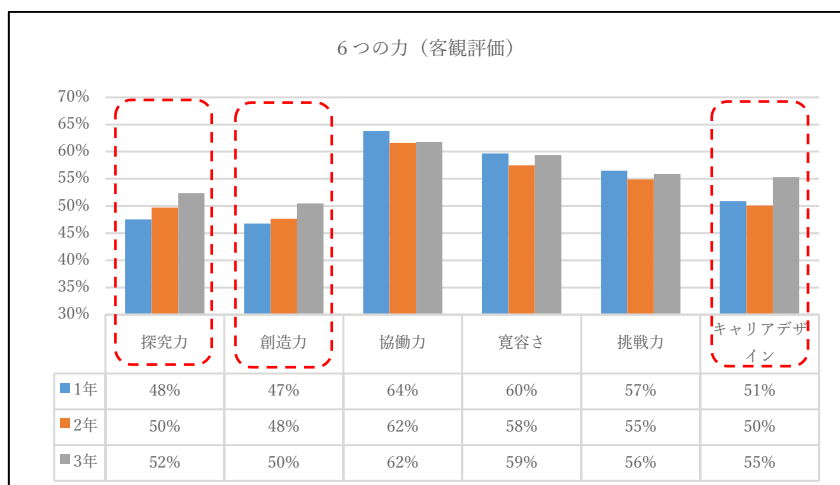
本事業では、イノベーティブなグローバル人材に必要な資質能力を「探究力」「創造力」「協働力」「寛容さ」「行動力」「キャリアデザイン力」という6つの力に定めている。

拠点校では、キャリアパスポートで、6つの力のルーブリックを示し、生徒が年度・学期の始まりや終わりに目標設定し、自己を振り返る時間を設定している。また、「グローバル探究」の時間には、6つの力をベースとしたチェックシートを作成し、毎時間振り返りに使用している。さらに、客観的な資料として、河合塾の「まなびみらいPASS」を全校生徒に実施している。

ジェネリックスキルと6つの力の紐づけに従って各スキルの合成変数から6つの力の到達度を算出し、1期生の変化を見たところ「探究力」「創造力」「キャリアデザイン力」において特に成長が見られた。

「6つの力」とジェネリックスキルの紐づけ

	リテラシー 総合	コンピテンシー								
		対人			対自己			対課題		
		親和力	協働力	統率力	感情制御力	自身創出力	行動持続力	課題発見力	計画立案力	実践力
探究力	●							●	●	
創造力	●									●
協働力		●	●	●						
寛容さ		●				●				
挑戦力						●	●			
キャリアデザイン力	●				●	●	●	●	●	●



また、成長セルフチェックシートの回答により、第4回（4月）から第4回（12月）の自己評価における伸長を分析した。1年生は「探究力」、2年生は「+αの力」、3年生は「挑戦力」が最も伸びており、特に全ての力において大きく伸びている3年生は高い成長実感を得られていると思われる。

1年（166人）	最も高い 最も低い				差 （12月 - 4月）
	第1回 4月	第2回 7月	第3回 9月	第4回 12月	
探究力	4.39	5.25	5.10	5.52	1.13
創造力	4.54	5.23	5.10	5.57	1.03
協働力	4.68	5.43	5.34	5.61	0.93
寛容さ	5.37	5.87	5.93	6.21	0.84
挑戦力	4.38	4.85	5.02	5.23	0.86
キャリアデザイン力	4.11	4.72	4.78	4.96	0.85
+αの力	4.62	4.77	4.96	4.87	0.25

2年（135人）	最も高い 最も低い				差 （12月 - 4月）
	第1回 4月	第2回 7月	第3回 9月	第4回 12月	
探究力	4.44	4.70	4.87	5.26	0.81
創造力	4.56	4.79	4.85	5.49	0.93
協働力	4.83	4.99	5.07	5.66	0.83
寛容さ	5.62	5.53	5.90	6.22	0.60
挑戦力	4.13	4.50	4.27	5.08	0.95
キャリアデザイン力	3.76	4.21	4.34	4.59	0.84
+αの力	4.45	4.74	5.06	5.47	1.01

3年（128人）	最も高い 最も低い				差 （12月 - 4月）
	第1回 4月	第2回 7月	第3回 9月	第4回 12月	
探究力	4.61	5.06	5.34	6.02	1.41
創造力	4.63	5.16	5.46	5.81	1.18
協働力	4.81	5.21	5.55	5.96	1.15
寛容さ	5.73	6.06	6.07	6.60	0.87
挑戦力	4.26	4.92	5.38	5.80	1.54
キャリアデザイン力	4.23	4.61	4.80	5.44	1.21
+αの力	5.32	5.87	6.11	6.55	1.23

※「+αの力」とは、持続可能な社会をつくるために欠かせない力であり、これからの未来を生き抜くために持ち合わせてほしい力としてグローバル探究の担当教員の方々が設定した力

次年度も「まなびみらいPASS」を実施する予定であり、これらの素材を検証し、育成状況について今後も検証を進めて参りたい。

(2) ALネットワークの形成について

ALネットワークの形成により、これまで奈良県に存在しなかった、事業拠点校、連携校及び連携関係機関の協力関係が生まれ、新たな学びの創造へとつながりができた。今年度初めて実施した高校生国際会議では、実施に向けて、公立・私立の枠を越えて生徒同士が交流し、議論し、協働した。ALネットワークが果たした役割の一つだといえる。

今後は、国際高等学校がこれまで取り組んできた、「グローバル探究」授業の取組やカリキュラム開発を連携校と共有し、「探究」の学びをさらに深い学びへと進化させるため、「総合的な探究の時間」部会等、その他の取組とも連携を図り、奈良県内のすべての高等学校と共有することを検討して参りたい。

(3) 短期的、中期的及び長期的に設定した目標の進捗状況について

ア 短期的目標（1～3年）

(7) カリキュラムの開発

現在開校3年目であり、今年度は、「グローバル探究Ⅲ」及び「世界の言語Ⅲ」が開講され、全ての科目が開講された。カリキュラム開発の成果を検討し、より発展させていく。

(4) ALネットワークにおけるステークホルダーの拡大

海外のネットワークについても、海外交流アドバイザーを中心に、連携先を開拓し、本年度7つの教育機関とつながることができた。フランスのサン・テレーズ高校とは姉妹校協定を締結することができた。

(ウ) AP（アドバンス・プレースメント）システムの検討

システム的前提となる高大連携を現在構築しているところである。次年度も関係校とAPシステムの構築に向けて協議を進めていきたい。

(エ) 高校生国際会議の開催

次年度は第2回高校生国際会議を8月に実施予定である。

イ 中期的目標（3～5年）

(7) ALネットワークの本格稼働

事業実施3年間で拡大した各ネットワークステークホルダーとの協働が事業実施後も持続可能なものとなるよう、県教育委員会を中心に計画を進めていく。

(4) APシステムの構築

システム的前提となる高大連携を現在構築しているところである。

(ウ) 拠点校、連携校における国内外トップ大学進学や海外留学の促進

拠点校が開校3年目の学校であり、今年度が初めての卒業生となった。進路先としては、韓国の延世大学等に合格し、数名が海外大学進学を目指して、現在も進学準備を続けている。また、「グローバル探究」や「世界の言語」での学びを大学につなげていくために進路先を選択している生徒も多くいた。今後、カリキュラム開発の成果やこれまでの取組と生徒の進学状況との関連を分析し、海外留学の促進に向けて見直しを図る。

ウ 長期的目標（10年）

(7) 近府県のALネットワークとの連携

連携協定締結校である名古屋国際高等学校とは、WWL 成果発表会や高校生国際会議への参加など交流を進めている。今後も、他府県のWWL 拠点校と積極的に交流し、連携を深めていきたい。

9 次年度以降の課題及び改善点

(1) 管理機関の課題及び改善点

管理機関として財政等支援だけでなく、事業の進行管理や事業推進に積極的にかかわること

ができるよう、他の管理機関からも情報を収集し、本県の事業推進に努めてまいりたい。また、事業契約期間が終了した管理機関からも情報を収集し、本事業が国の支援がなしでも自走できるよう準備・計画を進めて参りたい。

国の別事業を実施している連携校においては、十分に本事業に参加できていない現状がある。連携校へは本事業へのより積極的な協力を依頼するとともに、それを実現できるような内組織の整備も依頼したい。また、本事業に係る活動及び取組の充実のために、管理機関による支援が必要な連携校があると感じられる。それらの連携校には、どのような支援が有効か検討し、必要に応じた支援を実施して参りたい。

(2) 研究開発にかかる課題や改善点

開校から3年間カリキュラム開発を行った学校設定科目「グローバル探究」「世界の言語」について、全学年のカリキュラムの実践を一通り終えることができた。これを機会にこの3年間の成果と課題を検証し、カリキュラムの発展につなげていきたい。今後、「グローバル探究」を中心に据えた教科等横断的な学びを実践するために、各教科のシラバスをもとに教科代表が調整を行い、教科等横断的な学びが実現するような実効性のあるカリキュラムマップ作成に取り組んでいきたい。

この一年間、カリキュラムアドバイザーの吉田教授をはじめ、多くの外部の方のご指導、ご支援を賜りながら、「本校らしい探究とは」という問いについて、教員で協議を進めてきた。ある一定の方向性は見出せたものの、全教職員で共有するところまでは至っていない。今後、本校が目指す探究活動について、全教職員が思いを一つに取り組んでいけるよう、力を注いでいきたい。

高大連携のシステムづくりについては、本校の協定校を中心に、出前授業や大学訪問などの取組を進めることができたが、アドバンストプレースメントの実現までには至っていない。大学側の仕組みづくりが難しいなど多くの課題もあるが、次年度も大学と検討・調整の機会をもちながら、目標に向けて進めていきたい。

次年度は事業最終年度となる。県教育委員会の支援も受けながら、事業終了後もALネットワークが発展するよう、拠点校として持続可能な取組みについて検討を行っていきたい。

【担当者】

担当課	高校の特色づくり推進課	T E L	0742-27-9851
氏 名	川崎 崇	F A X	0742-23-4312
職 名	主査	E-mail	koukou@office.pref.nara.lg.jp

2 管理機関の取組

2.1 ALネットワーク運営委員会

氏 名	所 属
和泉 宏明	国連世界観光機関
内田 浩樹	国際教養大学教授
佐田 創	株式会社アイエスエイ
山口 大輔	学校法人河合塾
中尾 雪路	奈良県立国際高等学校長（拠点校）
前田 景子	奈良県立奈良高等学校長
大石 健一	奈良県立畝傍高等学校長
河合 知子	奈良県立青翔高等学校長
上田 精也	奈良県立法隆寺国際高等学校長
渡部 憲一	奈良県立高取国際高等学校長
吉田 隆	奈良女子大学附属中等教育学校長
安井 孝至	奈良学園登美ヶ丘高等学校長
吉田 育弘	奈良県教育委員会教育長

ア 第1回

- (ア) 日時 令和4年6月30日（木）
(イ) 場所 （リモートによる開催）
(ウ) 内容 ・ALネットワーク運営委員の委嘱について
・WWLコンソーシアム構築支援事業について
・拠点校における現在の取組について
・その他

イ 第2回

- (ア) 日時 令和5年2月7日（火）
(イ) 場所 （リモートによる開催）
(ウ) 内容 ・令和4年度WWLコンソーシアム構築支援事業の取組について
・運営指導委員からの指導助言について
・令和5年度の事業について

2.2 ALネットワーク担当者会議

氏 名	所 属
松本 真紀	奈良県立国際高等学校教諭（拠点校）
吉村 雅子	奈良県立奈良高等学校教諭
杉本 和歌子	奈良県立畝傍高等学校教諭
小川 香	奈良県立青翔高等学校教諭
松井 真奈美	奈良県立法隆寺国際高等学校教諭
古芝 尚子	奈良県立高取国際高等学校教諭
藤井 正太	奈良女子大学附属中等教育学校教諭
深石 芳弘	奈良学園登美ヶ丘高等学校教諭

ア 第1回

- (ア) 日時 令和4年4月22日（金）
- (イ) 場所 リモートによる開催
- (ウ) 内容 ・WWLコンソーシアム構築支援事業に係る今年度の取組について
・その他

イ 第2回

- (ア) 日時 令和4年6月9日（木）
- (イ) 場所 リモートによる開催
- (ウ) 内容 ・生徒運営委員会の進捗状況について
・高校生国際会議について
・その他

上記担当者会議のほか、Google Workspace for Educationを活用して「ALネットワーク担当者Classroom」を作成し、適宜、高校生国際会議生徒実行委員会の進捗状況等の情報共有を行った。

2.3 高校生国際会議生徒実行委員会

- 参加者 高校生国際会議実行委員会（高校生） 約40名
拠点校・各事業連携校ALネットワーク担当者等
- 内 容 令和4年度WWLコンソーシアム構築支援事業高校生国際会議に向けた運営・進行の検討等。

ア 第1回

- (ア) 日時 令和4年5月28日（土）
- (イ) 場所 奈良県立国際高等学校

イ 第2回

- (ア) 日時 令和4年6月11日（土）
- (イ) 場所 奈良県立国際高等学校

- ウ 第3回
 - (ア) 日時 令和4年7月21日(木)
 - (イ) 場所 奈良県立国際高等学校
- エ 第4回
 - (ア) 日時 令和4年7月27日(水)
 - (イ) 場所 奈良県立国際高等学校
- オ 第5回
 - (ア) 日時 令和4年7月28日(木)
 - (イ) 場所 奈良春日野国際フォーラム麓(高校生国際会議前日準備)
- カ 第6回
 - (ア) 日時 令和4年7月29日(金)
 - (イ) 場所 奈良春日野国際フォーラム麓(高校生国際会議)
- キ 第7回
 - (ア) 日時 令和4年11月15日(火)
 - (イ) 場所 (リモートによる開催)

【高校生国際会議生徒実行委員会の様子】



令和4年度高校生国際会議の実施に向けて、これまで、ALネットワーク校計6校の生徒が参加し、学校の枠を超えて協力し合った。

2.4 ALネットワーク運営指導委員会

氏 名	所 属
宮下 俊也	奈良教育大学 学長
赤沢 早人	奈良教育大学 教授
赤間 亜希	日本エコツーリズム協会 主任研究員
木村 出	JICA関西 所長

- (ア) 日時 令和5年2月1日(水)
(イ) 場所 リモートによる開催
(ウ) 内容 ・令和4年度のWWLコンソーシアム構築支援事業の取組について
・拠点校での取組について
・運営指導委員による指導助言
・その他

<運営指導委員によるコメントの概要>

・国際高等学校の取組は意義のある取組で、先生方の努力は素晴らしい。活動をしている生徒の表情が非常にいい。日本の中でも奈良は魅力ある場所(観光地)の一つである。奈良県ならではの国際交流を今後も探究し続けていってほしい。

・グローバル探究に意欲的に取り組む学校は教員が大変である。先生方も大変な思いをされているのではないかと考える。今後のこととして、この事業での成果を一般教科へ波及させることが大切であるとする。学校ぐるみでその枠組みをどう作っていくか、そのためには教育課程やカリキュラムが大切になる。しかし、その枠組みを作る際に「グローバル」を前面に出しすぎると、一般教科との関連性の強弱があり難しいので、あまり出し過ぎない方がよい。探究や課題発見学習においても同様に「グローバル」をあまり意識しない方がよいのではないかと。

・文部科学省の3観点の評価と国際高等学校が生徒につけさせたいと考える6つの力を関連付けることが大切である。

・先日、ガラパゴス諸島保全団体が小学生や私学の学生に講演するのを聞いた。そのときの団体の取組が、本日聞いた国際高等学校の活動に非常に類似していると感じた。エコガイドは案内する場所の情報を収集し、自分が楽しいと思うものをまとめて、観光客に紹介する。国際高等学校の先生方も自分が楽しいと思えることを、しっかりと事前に情報整理し、楽しい体験を生徒に伝えているように思う。また、探究活動を通して生徒と交流している姿が素晴らしい。

・この国際高等学校の取組は、奈良県内のモデル校として評価できる。今後この取組を横へ広げていく活動がより大切になって来ると思われる。日本エコツーリズム協会も学生対象のシンポジウムなどを開催し、大学生や高校生に対して講演活動などを行っている。協会がお手伝いできることがあれば、御協力したい。

・発表に大変感銘を受けた。長引くコロナ禍のもとで、工夫を重ねて開始・推進してこられ、今年度は対面での機会が増えつつあるとのことで、深い敬意とともに、嬉しく拝聴した。「問い」を大切に、世界の課題を自分ごとにする、というグローバル探究の取組は、是非今後とも継続発展して頂きたいと感じた。そうした方々が、私どもが取り組んでいる国際協力の次世代を担って下さるとの希望を感じた。常々こうした取組は一過性に留めず、「仕組み化」することで、まさに波及効果を伴わせる必要があるとの問題意識を有しており、ある自治体の教育委員会とは、一緒に教材づくりに取り組んでいる。私としては、モデル自治体、モデル校との取組を深めた上で、そこでの取組を提携校や当該自治体の中で仕組みとして根付かせる可能性があれば、今後、ともにプログラムの形成や教材づくりなどに共に取り組ませて頂くのは有意義では、と感じた。

3.1 拠点校の取組概要

拠点校である奈良県立国際高等学校は、「多様な人々と積極的なコミュニケーションを通して、グローバルな視点でものごとを捉え、国際社会の平和と発展に貢献する資質・能力を育成する」ことを Mission とし、令和2年4月に開校した。

Mission（本校の使命）

- 多様な人々との積極的なコミュニケーションを通して、グローバルな視点でものごとを捉え、国際社会の平和と発展に貢献する資質・能力を育成する。
- 強い探究心と主体性をもって、国際社会で新たな価値を創造していく自律した態度を育成する。
- 国際社会で求められる自他を尊重する精神と豊かな感性を育成する。
- 健やかな心身により、国際社会で活躍するための旺盛な行動力を育成する。

Admission Policy（入学者の受け入れに関する方針）

- ・ 本校の使命や育成を目指す資質・能力を理解し、教育課程全般に前向きに取り組むことができる生徒
- ・ 中学校段階で求められる基礎的な学力を身に付けている生徒
- ・ 多様な人々とのコミュニケーションに意欲的に取り組む生徒
- ・ 国際社会の平和と発展に貢献する意欲をもつ生徒

Curriculum Policy（教育課程の編成及び実施に関する方針）

- ・ ICTの活用により個別最適な学びを目指します
- ・ 探究活動をはじめとするあらゆる教育活動で協働的な学びを推進します
- ・ 学校設定教科「国際教養」を中心においた系統的総合的な教育課程を編成します
- ・ 社会に開かれた教育課程の実現に向けて学校全体でカリキュラムマネジメントを徹底します
- ・ 「世界とつながる高校。」をテーマにグローバル教育を推進します

Graduation Policy（育成を目指す資質・能力に関する方針）

本校では、以下の6つの資質・能力の育成を目指します。

- ・ 探究力
社会の様々な課題について、探究心をもって課題を発見し、解決に導く。
- ・ 創造力
自分の考えや常識にとらわれず、創造的に考え、新たなアイデアを生み出す。
- ・ 協働力
文化や言語の違いを超えて、協力・協働しながら互いに高め合う。
- ・ 寛容さ
文化や考えの違う他者の意見や存在を、社会をよりよくしていくための重要なものとして受け入れ共に高めようとする。
- ・ 挑戦力
課題について、失敗を糧にしながら意欲的に解決に向かう。
- ・ キャリアデザイン力
希望する進路に向けて、課題を把握し、解決のために行動を起こす。

奈良県立国際高等学校 グランドデザイン

使命 MISSION



多様な人々との積極的なコミュニケーションを通して、グローバルな視点でものごとを捉え、国際社会の平和と発展に貢献する資質・能力を育成する。



強い探究心と主体性をもって、国際社会で新たな価値を創造していく自立した態度を育成する。



国際社会で求められる自他を尊重する精神と豊かな感性を育成する。



健やかな心身により、国際社会で活躍するための旺盛な行動力を育成する。

目標 GOAL 世界とつながる高校。



これからの社会に必要な新たな教育を創造する。



高度な学びのネットワークの拠点校としての役割を果たす。

育てたい力 GENERIC SKILLS



知識を活用し課題を解決する力

探究力



協力・協働して互いに高め合う力

協働力



試練を克服し前進する力

挑戦力



新たなアイデアを生み出す力

創造力



文化や考えの違いを大切にできる力

寛容さ



進路に向けて行動を起こす力

キャリアデザイン力

学び CURRICULUM 「国際≠英語。～真の国際人を目指して～」



ICT

- ・一人一台のiPadを使用
- ・個別最適化された学習
- ・反転型学習、探究学習



グローバル探究

学校設定教科「国際教養」を設置

- ・地球規模の課題について探究活動



英語

- ・少人数・習熟度別授業
- ・プレゼンテーション指導
- ・ネイティブ教員による授業

世界の言語

- ・5つの言語・文化に触れる

将来 FUTURE



世界へ

海外大学進学



日本で

国内大学進学（理系・文系）

日本で、世界でグローバルに活躍

ルーブリック

	レベル1	レベル2	レベル3	レベル4
探究力	生活や社会について考え、改善したほうが良いと考えていることがある	地域や社会で解決したい課題を見つけ、その原因や背景を考えることができる	地域や社会のよりよい未来に向けて、改善すべき課題を見つけ、その原因を追求して、未来のあるべき姿を考えることができる	グローバルな視点から、世界的な課題の問題点やより良い未来の理想的な姿を示し、その実行可能性について検討することができる
創造力	与えられた情報を整理することができる	地域や社会の課題について情報を集め、分析・評価しながら改善すべき点を提示できる	地域や社会の課題やその解決のための内容を批判的思考で掘り下げ、解決に向けた案を提示することができる	自己の考えに固執することなく、グローバルな視点から創造的に考え、斬新なアイデアを生み出すことができる
協働力	他者と積極的にコミュニケーションをとることができる	目標達成のために、集団の中で他者を助けたり、支援したりできる	課題解決に向け、集団の中での自己の責任を果たしながら、他者と協力して行動することができる	課題解決に向け、対話を通して、自己の主張や他者の意見を調整し、集団として士気を高めることができる
寛容さ	相手の立場や考えを気づかえる	相手の立場や考えを常に想像し、共感することができる	文化や考え等の違う相手にもあたたかく接して、他者の考えを尊重し、違いを認めることができる	自分とは違う意見や考え、経験を共有し、社会をより良くしていくための重要なものと考えることができる
挑戦力	与えられた指示に従い、自分の作業をすることができる	指示を待たず、課題を自ら発見し、取り組むことができる	課題に取り組む中で、失敗しても強い意志をもって、新たな挑戦を続けることができる	高い目標や志をもち、困難なことに向き合いながら、意欲的・積極的・継続的に取り組むことができる
キャリアデザイン力	自己の適性について考えることができる	自己の適性を理解し、進路に関する情報を自ら集めることができる	希望する進路を実現するために、自己が直面している課題を把握することができる	希望する進路を実現するための課題を的確に把握し、解決のために行動を起こすことができる

3.2 カリキュラム開発

3.2.1 概要

拠点校には、学校設定教科「国際教養」を設定している。教科設置の目的は、「異なる言語・文化、世界の歴史や自然科学について幅広く学ぶことで、国際人として必要な教養を身に付けるとともに、様々な探究活動を通して、強い探究心と主体性をもって、国際社会で新たな価値を創造していく自立した態度を養う。」こととしており、この学校設定教科「国際教養」に複数の教科を融合した内容について探究活動を行う学校設定科目「グローバル探究」と英語以外の外国語やその文化について幅広く学ぶ「世界の言語」を設定している。

学校設定科目「グローバル探究」

身近にある問題から探究のプロセスを繰り返す中で、自分自身の課題を設定し、フィールドワークやシンガポールでのスタディツアーなどで探究を深めながら、最終学年では、高校生国際会議の開催、日本語と英語での論文作成を目指す。

拠点校では、この「グローバル探究」を基幹科目と位置づけ、全教員が担当し、取組を進めている。（6つのゼミを2人ずつの教員が担当）

- 「グローバル探究Ⅰ」（1年次3単位 必修） ※情報Ⅰ（2単位）を代替
- 「グローバル探究Ⅱ」（2年次3単位 必修）
- 「グローバル探究Ⅲ」（3年次3単位 必修）

学校設定科目「世界の言語」

複数の言語を学ぶことで、言語間の共通点や相違点に気付き、言語そのものへの理解が深まるだけでなく、世界の多様性への意識を育むことができる。このため、5言語すべてを学ぶカリキュラムを奈良教育大学吉村雅仁教授の指導で開発・実践している。

「世界の言語Ⅰ」では4週間に1回、「世界の言語Ⅱ」では、毎回、日本人教員と各言語のネイティブ教員によるチームティーチングを実施している。

- 「世界の言語Ⅰ」（1年次2単位 必修）
- 「世界の言語Ⅱ」（2年次2単位 必修）
- 「世界の言語Ⅲ」（3年次2単位 選択）

他教科での取組

- ・「総合英語」：ネイティブ教員による単独での授業を実施し、ライティングやプレゼンテーションの指導を行い、生徒の英語によるアウトプットの能力を向上させている。
- ・「ディベート・ディスカッション」（2年次2単位、3年次2単位全員履修）
地球規模の課題について英語でディベートやディスカッションができる力を付けるためネイティブ教員による授業を実施している。
- ・「エッセイライティング」（3年次2単位全員履修）
論文の書き方を学び、グローバル探究で作成した論文を英語にする指導を行っている。
- ・EAP（2年次2単位、3年次4単位海外進学コースのみ）
海外大学進学準備として、様々なテーマについて英語を用いて学び、議論をする。
- ・イマージョン理数（3年次2単位海外進学コースのみ）
自然の事物・現象について、英語を通して科学的に探究する。

3.2.2 グローバル探究I

a 全体計画

【対象】 1年生
【時間】 火曜 1 限、金曜 5 限
【目的】 1 学期 ・グローバル探究や本校で身につけて欲しい能力について学習する ・自分と世界のつながりを認識しESDの感覚を身に付ける ・様々な活動を通して探究プロセスを学ぶ 2 学期 ・地域の魅力、課題を探究する中でSDGsを自分ごと化する ・探究活動を行う中で主体性を養う ・発表、協働の場を設け、生徒間、生徒教員間の交流を深める 3 学期 ・2 学期の活動を振り返り、これまでにできたこと、できなかったこと等を把握する ・グローバル探究IIでの活動を円滑にするため、探究の手法について学習する ・自らの興味関心を元に2年生以降の探究活動の展望をする
【計画】 1 学期 1, 機器の設定 Google Classroom、School Takt、Classiの設定 2, 国際高校の6つの力、ミッションについて 国際高校における6つの力、ミッションを確認し、セルフチェックシートを用いて現在の自分の認知を図る。 3, 正しい情報収集の仕方について ジャパンナレッジを用いて正しい情報の収集方法について学ぶ。 4, 校外学習準備 5月に実施する校外学習の事前準備を行う。近鉄奈良駅付近でのフィールドワークのテーマは、「世界と日本のつながりを探す」。当日はどこで何を目的に探索するのかグループ毎に決定する。 5, 校外学習 テーマ：世界と日本のつながりを探す フィールドワーク 6, 校外学習のまとめ、発表 7, グローバル探究が目指すことと国際高校の生徒に身に付けてほしい意識（ESD）について ホセムヒカ、セバンスズキのスピーチを聞いて30年後について考える。 8, 世界の持続可能性を阻害する問題とは（ボルネオ島の現状）

9, 熱帯雨林分断ワークショップ
ボルネオ保全トラストジャパンと日本水族館動物園協会の協力園と共同開発中のボードゲームをアレンジした高校生版を使用。

10, ロールプレイ（様々なステークホルダーの視点から物事を見る）

11, パーム油について専門家から話しを聞く（情報Iと教科横断、ボルネオ保全トラストジャパン 青木崇史事務局長によるオンライン授業）

12, 6月以降に取り扱っている諸問題に対して自分たちが出来ることを考え、解決方法をクラス内で共有
保全専門家に話を聞く（旭山動物園、ボルネオ保全トラストジャパンによるオンライン授業）

夏休み

7月に考えた問題の解決方法を実践する

2学期

1, 夏休みの実践、探究についてまとめ、発表

2, 日本の課題について（SDGsワーク）本ワークについては、3.6.6 東京都市大学 佐藤先生 b 1年生へのプログラム導入を参照されたい。

3, SDGs新聞ワーク（朝日新聞社「ペタッとSDGs」）
<https://www.asahi.com/corporate/sdgs/13208860>. (2023/2/24)

4, 地域の魅力発見
魅力を探る際、「文化」「環境」「経済」の3領域の切り口からウェビングマップを用いて情報の可視化を行う。そして自分の内発的動機付けに従って魅力を発見する。

5, 地域の魅力をクラス内で共有する

6, 地域の魅力の持続可能性を阻害しているもの→課題

7, 地域の課題について調査
インターネット、文献、インタビュー等を通じて情報収集を行う。

8, 課題をまとめる、発表準備

9, 学年内で発表
発表は2段階設定：1) 座談会形式 2) 講演形式
1) 座談会形式ではクラスの枠組みを取り払い学年内の生徒で交流
2) 上記を元にアンケートを取り、選抜者を決定し、体育館で学年全員に向けて発表。発表会には奈良商工会議所青年部寺西壮平理事を招き、講評を頂く。

10, 課題の整理、解決策を考える

11, 解決策の考察
自分が考えた解決策にはどんな社会的意義があるのか、また、解決するために自分たちが出来ることを探る。

1 2, 2 学期の地域探究まとめ
2 学期の探究活動について文章化する。

冬休み

探究コンテストへの応募に向けて文章、データの整理

3 学期

1, 2 学期の探究プロセスを振り返る
自分が行ってきた探究活動を振り返り、文章化することで活動を可視化、整理する。

2, 探究の手法について学ぶ
今後探究活動及び学生生活を送る上で重要となるスキルについて学習した。例) クリティカルシンキング等

3, グローバル探究Ⅱに向けての準備
ゼミ分けに際して自分の興味関心を深掘し、志望動機を作成する。

b 地域探究の成果と課題

概要

第1学年では、1学期に世界と自分のつながりを認識できるような探究活動を行った。これを経て、2学期は地域に焦点を当てた。

地域課題に取り組むことで、まずは身近なところに良い影響を及ぼし、その活動がひいては社会全体の持続可能性に寄与することを期待している。その過程でSDGsを自分ごと化し、自らにできることを発見し、社会貢献を目指す。

探究の発表については、教員がファシリテーターとなり、生徒間の意見交換、交流を目的としたグループ内発表、また、選抜者が学年全体に向けて発表するという2種類の形式で実施した。なお、発表にあたって、奈良商工会議所青年部の寺西壮平理事にご講評を頂いた。

成果

今回の地域探究では、個人探究の形をとることで、自らの興味関心にあった内容で探究活動を進めることができた。生徒の内発的動機付けに従って問い立てを行ったので、より積極的に取り組むことができた。

地元の魅力を再発見し、課題を探り、解決策を考える中で、問い立て、調査、まとめ、発表、振り返りといった探究プロセスを踏むことができた。このプロセスの中で生徒は主体的に行動し、地域の人々とつながりを持つことができた。このようなつながりは今後探究活動を行うにあたって有利に働くと考えられる。

グループ内発表では、対話の中から新たなアイデアを得たりし、選抜者の発表では、聴衆側の生徒に良いモデルを提示することができた（発表テーマは後述）。意見交換の場を複数回設けることで、自らの探究を発表する場、その発表に対して同級生からフィードバックを受ける場を持つことができた。

フィードバックを受けて内容を改善し、最終的には「中高生探究コンテスト2023（株式会社CURIO SCHOOL・一般財団法人ソーシャル・ビジネス・プラットフォーム 共催）」に応募するために探究内容をまとめて文章化、およびスライド等の電子データ作成をすることができた。これらにより、自らの探究（考え）を可視化することができた。

発表テーマ（一部抜粋）

- ・奈良公園のゴミ（鹿の持続可能性）
- ・空き家活用（カフェ、美術館当）
- ・奈良の林業を広める
- ・生駒山上遊園地
- ・奈良の観光
- ・水平社博物館について（人権問題）
- ・奈良の食文化（こども食堂、インスタ）
- ・奈良県の部活動について

課題

調査段階で、専門家に話を聞くような活動を設定できなかったことが課題である。個人探究で生徒それぞれのテーマは多岐に渡り、全員のニーズに答えるための準備ができなかったことが原因である。一方で、全体での場は設定できなかったものの、生徒個人が自ら行動して、現地に赴いて調査をしたりするような主体性の発達を見ることができた。

今回の地域探究では教員側からの探究プロセスの提示が毎時間あったが、今後の探究活動では、生徒自らが興味関心に基づいて探究活動を自動的に進めていくことが課題である。教員側は探究活動のサポーターとして生徒との対話を通じて的確な指示、アドバイスを行うことが求められる。探究活動と調べ学習を区別するために、探究プロセスの定着に加えて、

SDGs、ESDの観点から内容を深め、高校生として社会貢献のためにできることを模索し、実践していくことが必要である。

グループ内発表 1



グループ内発表 2




選抜者の発表



c 情報年間計画 データサイエンス講座 情報TA

R4年度情報年間計画

月	学習内容	回	主な活動
4	オリエンテーション	1	<ul style="list-style-type: none"> ・ Society5.0と人間社会（お話） ・ 授業の進め方について
5	情報デザイン	3	<p>国際ピクトグラムを作ろう p.74 *Adobe CCE(旧Adobe spark)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ オリジナルロゴ作り ・ 「国際6つの力」のオリジナルアイコン作り ・ 「図書館ピクトグラム」のデザイン 
6	データの分析	4	<p>様々な形式、表やグラフの利用 p.146 *表計算ソフト Excel</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ Excelの使い方（3時間） 1、様々な代表値（最大値、最小値、平均値、中央値）の計算方法を学ぶ。ヒストグラムの作成。 2、分散と標準偏差、散布図などから、データを分析して考察する力を身に付ける。 <p>【グローバル探究6/17（ボルネオ保全トラストジャパン青木崇史さんご講演）】</p> <p>パーム油白書のデータ（グラフ）から見えてくるもの</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 様々なグラフからパーム油の特徴や抱える問題を知る ・ グラフを分析し、誰に何をどのように伝えたらよいか（情報デザイン）を考える ・ パーム油白書から何が読み取れるか考える <p>☆「パーム油白書」から統計を正しく読む（1時間）</p> <p>パーム油の国別生産量、消費量、輸入量、輸出量のデータから、マレーシアについてグラフにまとめる等、知りたい情報を視覚的に見やすくまとめる力を育てる</p>
6	一学期のまとめ	1	タイピング練習、Wordに感想を書く
夏休み			
9 10 11	プログラミング	12	<p>1、フローチャートをかいてみよう</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ プログラムはどうやって動くのか ・ タイピング練習 <p>2、文字列の表示</p> <p>*プログラム言語はJavascript *大阪公立大学太田正哉先生のサイトを使う</p> <p>3、数値と式 4、変数と式（1）</p>

			5、変数と式（2） 6、乱数 7、条件分岐 if 8、繰り返し for（1） 9、繰り返し for（2） 10、配列変数 11～12、今まで習ったことを使ってオリジナルプログラムを作成する *ワークシート配布 *計画書とPC画面を写真に撮り、スクールタクトに提出する
冬休み			
1	情報のデジタル表現	5	1、アナログとデジタル p.48～61 2、デジタル情報の表現 3、n進数の計算演習 4、文字のデジタル表現 5、音のデジタル表現 *ライフイズテックレッスンにログインする
2			
	データサイエンス講座	2	大阪公立大学上杉先生によるオンデマンド配信 *2月入試期間を利用

データサイエンス講座

一年生を対象とした、大阪公立大学上杉徳照先生によるオンデマンド配信（40分×2本）

講座 1

- 1、データサイエンス
- 2、ヒストグラムと箱ひげ図
- 3、分散と標準偏差
- 4、散布図と相関係数
- 5、回帰直線と決定係数
- 6、疑似相関
- 7、ランダム化比較試験

講座 2

- 1、重回帰分析
- 2、人工知能と機械学習
- 3、機械学習の分類
- 4、機械学習の流れ
- 5、データの分割と過学習

情報TA

二学期の情報 I の授業（プログラミング全12回）において、大阪公立大学大学院の学生二名にTAを依頼し、個に応じたきめ細かい指導が可能となった。

3.2.3 グローバル探究II

a 全体計画

【対象】 2年生
【時間】 月曜7限、木曜6・7限
【目的】 1 学期 <ul style="list-style-type: none">● ゼミのテーマに関する世界のさまざまな問題に目を向ける● ゼミのテーマに関する幅広い情報の収集● 探究テーマを見つける● 持続可能な社会を作る生き方と自分の将来（進路）をつなげる 夏休み <ul style="list-style-type: none">● 探究テーマを深める 2 学期・3 学期 <ul style="list-style-type: none">● 探究テーマに沿って持続可能性を阻害する問題について、その原因を探りながら、より良い未来を作る方法を考え、高校生にできることから実践する● 自分たちの学びを他者に伝えるとともに、仲間の活動から学びを得る
【計画】 1 学期 <ul style="list-style-type: none">● 新聞ワーク<ul style="list-style-type: none">・ 新聞を読み、それぞれが新聞から気になる記事を見つけ、深掘りする・ ニュースについて、その背景について、興味を持った理由などをグループで共有、意見交換● たてにつながる探究交流会（7月4日）<ul style="list-style-type: none">・ 各ゼミの3年代表生徒の発表を聞く・ 3年生と発表に関するテーマでディスカッションをする● 探究テーマの決定<ul style="list-style-type: none">・ ゼミ担当教員と面談をしながら、探究テーマを決定する・ ファミリーにわかれて活動スタート 夏休み <ul style="list-style-type: none">● ゼミによって、ミーティング、調査、研修など実施 2 学期 <ul style="list-style-type: none">● 探究ゼミごとにファミリー活動● ゼミ内中間報告（10月中旬）<ul style="list-style-type: none">・ 自分達の探究テーマや問題解決に向けての課題をゼミ内で発表（日本語）・ 12月実施のWWL全国高校生フォーラム参加者を決定● スタディツアー（10月25日～28日）<ul style="list-style-type: none">・ 各ゼミでの活動をさらに深めるフィールドワーク 冬休み <ul style="list-style-type: none">● ゼミによって、ミーティング、調査、研修など実施 3 学期 <ul style="list-style-type: none">● ゼミ内報告会（1月下旬）<ul style="list-style-type: none">・ 探究テーマに対する各自の取り組みをゼミ内で発表（日本語）・ 飛鳥中学校教員による発表見学と講評● たてにつながる探究交流会（3月上旬）<ul style="list-style-type: none">・ 各ゼミの2年代表生徒が1年生に探究活動を発表・ 1年生と発表に関するテーマでディスカッションをする・ 2月下旬よりファシリテーションの練習（各ゼミ4名） 春休み <ul style="list-style-type: none">● ゼミによって、ミーティング、調査、研修など実施

3.2.3.b グローバル探究II 6つのゼミ

2年時より、6つのゼミを開講し、生徒自身が関心のあるテーマに近いゼミを選択する。持続可能な社会の構築を目指し、さまざまな分野で社会課題と向き合う。問題を解決するために、自分にできることは何かを問う。



c ゼミの取り組み

「みんなで作る笑顔のコミュニティ」ゼミ 生徒：31名

概要：コミュニティに関連するそれぞれのテーマに基づいて探究を行っている。授業内では論文を執筆し、「研究動機」「先行文献の研究」「独自研究の成果」についてまとめている。

ファミリー（チーム）での取り組み

テーマ：海外と比べて日本は臓器移植者が少ないことについて

取り組み：日本の臓器移植者が少ないことに着目し、校内での臓器移植に対する考え方の現状から知識や興味を持ってもらう人を増やすために、ポスターを作成した。

テーマ：地震が起きた後、高校生に何ができるか

取り組み：今後、大地震が起こることを想定し、防災に対する高校生の意識が低いことに着目した。地震が起こった時の対応が分かるように、アンケート調査や防災センター等に実際に行き学んだことを基にパンフレットを作成した。

テーマ：生徒が快適に過ごすことができる教室のレイアウトとはどのようなものか

取り組み：学校の環境を整えることで、生徒が快適に過ごせるのではないかと考え、教室のレイアウトや過ごしやすい環境について探究している。

テーマ：高校生におけるSNSのいじめ～SNSいじめの起こる原因とは

取り組み：インターネットが普及し、多くの人繋がることのできるため、SNSいじめが増加していることに着目し、SNSいじめを減らすためにできることをアンケートなどを通して探究している。

テーマ：コロナ禍の消費者行動について

取り組み：コロナ禍で、消費者の行動がネットでの購入に変化してきている。コロナ禍が明けたときに、どのような方法で購買意欲を高めるのかということ等を探究している。

テーマ：トラックドライバーの減少について

取り組み：トラックドライバーの減少によって物流が回らなくなるのではないかとすることに着目した。SNS等を使った雇用の促進方法等について探究している。

テーマ：まちのいいところをPRして、人を集めよう

取り組み：公共施設などの整備不足が過疎化の原因の1つになっているのではないかと考え、実際に歩いてバス停を調べた。まちのいいところをPRすることで、人を呼び、公共施設などが改修されると考え、行動している。

テーマ：小・中学生における学校内のいじめ対策の提案

取り組み：小・中学生のいじめ件数の多さに着目し、小・中学生の時に倫理観を身に付けることが大切であると考えた。倫理観を身に付けるための授業の方法や内容について探究している。

<p>テーマ：海外と比べて日本は臓器移植者が少ないことについて</p>
<p>取り組み：日本の臓器移植者が少ないことに着目し、校内での臓器移植に対する考え方の現状から知識や興味を持ってもらう人を増やすために、ポスターを作成した。</p>
<p>テーマ：地震が起きた後、高校生に何ができるか</p>
<p>取り組み：今後、大地震が起こることを想定し、防災に対する高校生の意識が低いことに着目した。地震が起こった時の対応が分かるように、アンケート調査や防災センター等に実際に行き学んだことを基にパンフレットを作成した。</p>
<p>テーマ：イベント・ボランティアによる地域活動の活性化とともに地域のコミュニティを広げたい</p>
<p>取り組み：イベント・ボランティアの参加率の低下が起きており、その原因や若者に興味を持ってもらうためにできることを考えている。新型コロナウイルスの影響やイベント・ボランティアに対する印象に着目し、宣伝方法について探究している。</p>
<p>テーマ：奈良の商店街を繁栄させる</p>
<p>取り組み：奈良県の商店街が新型コロナウイルスの影響で人通りが少なくなったことに着目し、観光客だけでなく地元の住民を呼ぶことが重要であると考えた。スタディーツアーで調べた、観光地の取り組みから奈良県に取り入れることなどを探究している。</p>
<p>テーマ：貧困による教育格差</p>
<p>取り組み：貧困による教育格差によって、本校の生徒がどのような考えを持っているのか、どのような現状なのかについてアンケート調査した。貧困による教育格差を減らす方法を探究している。</p>
<p>テーマ：日本のプラスチック再生率の低さ</p>
<p>取り組み：日本がゴミ発生の上位国であることに着目し、他国のごみ処理の工夫などを調べ導入できるものがないか考えた。また、ごみを出す量を減らすために自分達にできることを探究している。</p>
<p>テーマ：奈良の観光業を聖地巡礼（コンテンツ・ツーリズム）を通じて活気を取り戻すことは可能なのか</p>
<p>取り組み：聖地巡礼により観光業が盛り上がっている県があることに着目し、奈良県でも聖地巡礼で観光客を呼び込むことができるのかについて探究している。</p>
<p>テーマ：カラーユニバーサルを広めよう</p>
<p>取り組み：カラーユニバーサルという色覚の多様性に着目し、誰もが理解しやすいデザインについて探究している。色覚異常がある人の困りごとなどについて調べ、学校内の表示について変える必要があるものがあるか調べている。</p>
<p>テーマ：現代の社会、会社ではSDGsに対してどのような対策に取り組んでいるのだろうか</p>
<p>取り組み：プラスチックの削減に着目し、現在、注目されている紙ストロー使用に対する本校の生徒の考えをアンケート調査等を通して明らかにした。プラスチックに変わる製品にはどのようなものが使えるか等を探究している。</p>

生徒・教員の変容

ゼミの開講当初は、知識も少なくインターネットの情報などから調べた情報のみを扱うことが多かった。しかし、授業を進める内に、本やアンケート調査、実地調査など様々な調査を通して物事を多角的に見ることができるようになってきた。お互いの状況を報告することを通して、日本や世界で起こっている課題について共有ができ、周りで起こっていることを自分事として捉えることができてきた。教員も多岐にわたる生徒のテーマについて客観的な助言ができるように、教科の枠を超えた知識を得た。調べ学習で終わらないための必要な助言について、担当教員で連携を図りながら考えることができた。

「先人の知恵を未来へ届ける」ゼミ 生徒： 31 名

概要：過去から現代に伝承・継承されている様々な事柄について、各自が設定したテーマに基づき探究活動を行っている。授業内では論文を執筆し、「研究動機」「先行文献の研究」「独自研究の成果」についてまとめている。

ファミリー（チーム）での取り組み

テーマ：世界遺産をどのように守っていくか

取り組み：自然災害や人災によって世界遺産が破壊されるケースがある。また、人々がその価値を認識する場面も減少している。世界遺産をよりよい形で維持や管理するために必要なことは何かを探究している。現在は日本各地の世界遺産を守る為にされている取り組みを調査し、まとめている。また世界遺産に対して人々がどのような認識をもっているのかも調査している。

テーマ：先人から伝わってきた説を広める方法とは

取り組み：「現代に伝わっている様々な事象に対する説には複数の憶測論も含まれている」という前提のもと、現在に誤った説が伝承されている可能性の提示や正しい説の伝承方法の模索を行っている。現在は恐竜の絶滅についての説を対象にその真偽を確かめる方法を探究している。

テーマ：食品ロスと先人の知恵

取り組み：昨今の食品ロス問題の解消に向けての取り組みとして、「先人が抱いていた信仰心」や「農業従事者の経験の有無」に着目した。現在は高校生を対象に意識調査を行っている。今後は学校内で希望者を募り農業体験活動を行うことで、食事や食品ロスに対する意識の変化について調査していく。

テーマ：大和野菜を未来に

取り組み：高いブランド力をもつ一方で県外では認知度の低さが懸念されている大和野菜。まずは県内での普及と認知度を高めることで地産地消の推進を目指す。現在まで、生徒自身で大和野菜を実際に栽培し、その特性と栽培における課題を考えた。今後はより身近に大和野菜の存在を感じるために、PR方法の考察などを行っていく。

テーマ：現代の風潮と伝統を掛け合わせた着物とは何か

取り組み：昔は普段着として用いられていた着物が、現在では様々な課題から需要が下がっていると考えられる。未来に着物文化を残していくためにはどうすればよいのかを探究している。現在までの取り組みとして、実際に着物を着用しその利点と欠点について考察した。また、高校生に対してアンケート調査を行い着物への関心度を調査した。

テーマ：薬の進化をつなぐ

取り組み：古来から薬草や漢方は人類の進化に欠かせないものであった。現在も様々な種類の薬が使用されているが、どのような進化を遂げて、今後どのような形で人類と関わっていくのか。日本は国際社会となり様々な国と交流をもっている。新たな感染症がこれか

らも広まっていく危険性もあるため、薬の存在は必要不可欠であると考えた。薬の重要性を伝えるためにどのような方法が効果的か探究している。

テーマ：祭りと年中行事は今後どのようなようになっていくのか

取り組み：地域の過疎化や後継者不足、新型コロナウイルス感染症の影響により、各地にある年中行事や祭りの継承が困難になってきている。衰退や減少を回避するためにどのようなことができるのかを探究している。現在は地域のイベントに実際に参加したり、主催団体にインタビューしたりしてその現状を調査している。

テーマ：伝統食が継承されない事実に革命を起こすには

取り組み：日本に存在する数多くの伝統食に着目した。若者が伝統食に触れる機会が減少している現状で、どのようにすれば若者が伝統食に触れることができるのか、一過性の興味で終わることなく継続的に伝統食と関わっていく機会をどのように作っていくか模索している。現在は各地方での伝統食との関わりを実地調査し、その結果を分析している。

テーマ：伝統工芸品はこれからも伝えられるか

取り組み：伝統工芸品は後継者不足や職人の高齢化など様々な問題を抱えている。伝統工芸品を作る技術をどのように後世に伝えることができるのか、日本刀を中心にその方法について探究している。現在は伝統工芸品の継承が難しいのはなぜかを多面的に調査し、アプローチ方法を模索している。また、その技術が別の形でどのように用いられているのかにも焦点を当てている。

生徒・教員の変容

ゼミの開講当初は、生徒達のテーマに対する知識が乏しく、研究内容の方向性を決めるのに、苦慮していた。一人一人テーマに対しての課題を発表し合い、多角的に見ることによって、研究内容の方向性が定まっていた。研究内容が定まっても、必要な情報の取捨選択に困っていた様子であった。グループ、個人での発表を行うことで、他者に自分の考察している内容を伝えるにはどの情報が必要なのか考える力がついたと考えられる。またその際、簡単な質問ではあるが、発表者に対して、問いを投げかけることで批判的に物事を捉えようとする姿勢を養うことができた。

教員側は、テーマに沿っているとはいえ生徒達が持つテーマは多岐にわたるので、できるだけ各グループ毎に指導を行うようになった。また、他の担当教員とも協力し、どう声かけをしていくのがいいかなどの話し合いを行うようになった。

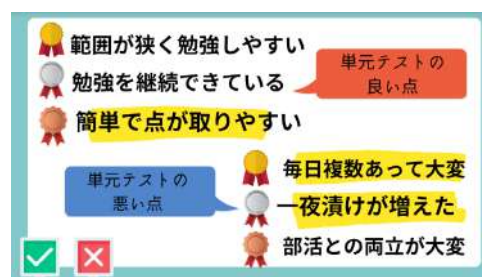
グローバルゼミの取り組み



グローバルが生み出す力のゼミは毎週月曜日（1時間）と木曜日（2時間）しています。生徒は26人で、「グローバル」はどのように私たちのライフスタイルに関わっているかというトピックに沿って探究しています。基本的に指導は英語で進んでいます。生徒の発表やディスカッションは日本語です。

1学期には、各ファミリーで探究テーマを決定させて、3年生の発表も聞くことができました。2学期には、スタディツアーで北陸地方に3日間滞在し、能登島と海外のつながりや観光地で有名な金沢について勉強しました。中間発表や最近のニュースについてのディスカッションなどをし、タイの先生との交流も体験しました。タイとの交流では、タイの学校の取り組み発表を見て、ゼミの生徒から質問をすることができました。「グローバル」というのは、英語だけではなく、英語以外の様々な言語や文化も含まれます。

ゼミでは、7つのファミリーで様々な面から「グローバル」のテーマを探究しています。3学期には、各ファミリーがゼミ内で発表をしました。さらに、感想を各ファミリーに共有し、3学期の探究週間で1年生との交流を進めています。3年生のグローバルゼミはWWL高校生国際会議に参加する予定です。



教育ファミリーのスライド。単元テストと定期テストの利点についての発表でした。

ファミリーテーマと発表テーマ

教育	〇〇社会になるように（〇〇には造語がこれから入ります）
人権	それぞれの個性が輝く学校
言語	言語の違いを踏まえた異文化コミュニケーション
医療	持続可能な医療
フードロス	残りものには福がある
貧困	日本の貧困ー日本でも貧困ってあるの？実は身近にあるかも？
文化	関西・北陸なにが違うの？



貧困について探究をしているファミリーが生駒市にある「たわわ食堂」で質問をしたり、子供と話したりしました。また、実際に仕事の体験もすることができました。とても貴重な体験でした。



3学期にフランスのサンレーゼ高校の留学生と交流をすることができました。お互いに学校や探究についての発表をしました。最後に集合写真をフランス語で撮りました。

令和4年度の流れ

- 1 学期 テーマ作り
WWL高校生国際会議

- 2 学期 スタディツアー
タイの先生と交流会
ゼミ中間発表

- 3 学期 ゼミ内最終発表
フランス、サンテレーゼ高校交流会
1 学年と発表交流会

概要：国内外のデータや新聞記事を読み、ドキュメンタリー映画から世界の人権侵害の現実について知り、様々な文献を読みながら人権や多様性について深く考えた。その中で、自分の生い立ちや生き方と関わりの深い課題を考え、その課題をもとに探究活動をはじめた。授業内では論文を執筆し、「研究動機」「先行文献の研究」「独自研究の成果」についてまとめている。

ファミリー（チーム）での取り組み（一部）

テーマ：日本が学ぶべきタイの寛容性

取り組み：タイはLGBTQに寛容な社会と言われるがそれはなぜなのかを、複数の文献をもとに日本社会やタイ社会の特徴・文化などを整理し、タイの教員とのオンライン交流会を活用し、タイ国内の状況についてインタビュー取材をした。日本が寛容な社会となるよう、LGBTQについて学べるカードゲームを制作している。

テーマ：日本でのLGBTQ+に対する教育不足の原因は何か

取り組み：LGBTQ+について、日本国内の課題は教育にあると定め、学校教育の中でどのようにLGBTQ+のことを取り扱うかを考えた。とりわけ、保健などの教科書の記述に注目し、自分たちで理想の教科書の記述を考案していきたいと考えている。

テーマ：安楽死・尊厳死について

取り組み：安楽死や尊厳死について、様々な文献を読みながら、自殺と安楽死・尊厳死の違いは一体何なのか、尊厳死はどのような形で保障されるべきかを世界各国の法制度を比較しながら、国内の課題について考えた。

テーマ：薬を飲むことは幸せにつながるのかー精神病から学ぶこと

取り組み：心の病にはどのようなものがあるかを文献を使って調べ、薬を飲むことが幸せにつながるのかを様々な事例をもとに検討し、薬以外のサポート方法にはどのようなものがあるかを考え、アンケート調査なども視野に入れながら探究している。

テーマ：同性婚と日本の現状

取り組み：同性婚が日本で認められない現状を文献から、法制度や伝統的な価値観等、様々な視点で整理し、大阪にあるNPO法人へ取材調査へ行ったり、海外の法制度を調べるなどしながら、Allyを増やすための活動について考えている。

テーマ：女性のすごしやすい社会にするためにはどうすればいいのか

取り組み：全国データから、奈良県は女性の就労等、女性の権利について大きな課題があるということを確認し、文献を読みながら女性のすごしやすい社会にするためにはどうすればいいのかを考えている。

テーマ：在日コリアンへの差別はなぜ起こるのか

取り組み：在日コリアンへの差別について、日本国内にある問題の概要や在日コリアンの歴史に関連した文献を読み、ヘイトスピーチなどが起こらないようにするために何をすべきかを考えている。

テーマ：黒人差別を無くす第一歩はどうやって踏み出すのか

取り組み：SNSで盛り上がりを見せたBlack Lives Matter運動を知ったことがきっかけとなり、黒人差別の歴史と現状について様々な文献を読み、自身の得意なことを活かしながら、黒人差別をなくすための行動をどのようにするかを考えている。

テーマ：障がいの有無で分けられることのない社会はどうしたら作れるのか

取り組み：インクルーシブの考えを文献で学び、学校教育や職場など、社会全体で障害の有無で分けられることのない社会をどうすれば作れるのかを、実際の事例なども検討しながら考えている。

生徒・教員の変容

年度当初は社会の中にどのような人権課題があるのか分からない生徒も多かったが、様々な学習活動を重ねるうちに様々な人権課題について見識を深めることができた。また、課題を設定し、文献を読みながら協働して論文を執筆する中で、自分たちの考えを論理的に整理し、意見の根拠や理由を明確にすることを意識できるようになってきた。
教員も論文添削指導を経て、論理的に考えることを支援し、生徒とともに探究テーマについて深めて考えることができた。

「蒼い地球を未来につなぐ」ゼミ

生徒：29名

概要：地球温暖化や水質汚染、プラスチック問題など環境に関わるテーマで各自が探究をしている。「美しい地球を保つために、高校生の自分達にできることはなにか」という考えを大切に、持続可能な社会の実現を目指している。

ファミリー（チーム）での取り組み

テーマ：ポイ捨てを減らそう

取り組み：ゴミのポイ捨て防止による、自然環境の改善を目指している。実際に学校周辺のゴミの調査を実施し、タバコのポイ捨てに焦点をあてて、その原因及び解決方法を探究している。

テーマ：チョークを完全再利用～チョークで変わる学校生活～

取り組み：学校でのリサイクル促進を目指し、チョークの再利用を試みている。使用済のチョークの粉を集め、水の量を調整しながら、耐久性や書きやすさの向上を目指した。現在は学校全体でチョークの再利用ができるように、より簡単で手軽に作る方法を模索している。

テーマ：身の回りに潜む外来種とその対策～セイタカアワダチソウ～

取り組み：外来種の生き物や植物による、在来種への悪影響は非常に大きい。環境省により要注意外来生物リストに載せられているセイタカアワダチソウは、学校でも多く存在していることが判明した。入浴剤の製作や食材としての利用を検討するなど、効果的な処分の仕方を探究している。

テーマ：ペーパーレスの推進

取り組み：紙の大量生産及び消費による森林伐採は深刻である。本校では全生徒がタブレットを所持しているが、ペーパーレス化は進まず、依然として多くの紙資源が使用されている。教員の協力を得て、実際にプリント等をデジタル化することにより、どのような不便が生じるか、またそれらをどのようにして解決し、全校的にペーパーレス化を推進するかを探究している。

テーマ：大和川水質改善プロジェクト

取り組み：奈良県を流れる大和川は、近年水質が改善されてきているが、依然として環境基準を達成できていない支川がある。大和川の汚れの原因の半分以上は生活排水と言われている。生活排水を減らすために、油や米のとぎ汁に着目し、家庭で出来るちょっとした工夫を模索している。

テーマ：Use after Use

取り組み：陸上のプラスチック廃棄物の一部が海へ流出し微細になったものは、マイクロプラスチックと呼ばれ、食物連鎖を通して生態系全体に汚染が広がっている。プラスチックは私たちの生活で欠かせないものとなっており、使用を制限するのは難しい。また処分をするのにも費用と時間がかかる。そこでペットボトルなどの製品の「リユース」を促進するために、便利でかつ魅力的な使用法を探究している。

テーマ：ゴミの分別の促進

取り組み：リサイクルのできる資源を有効活用するためにも、ゴミの分別は必要である。アルミ缶の磁石に引き寄せられる特徴に着目し、スチール缶との分別が自動で行われるゴミ箱の作成をしている。またデザインを工夫することで、生徒の分別に対する意識向上を目指している。

テーマ：サステナブルスクール～データで紐解く電力消費量～

取り組み：学校では年間で大量の電力が消費されており、その中でもエアコンの使用は非常に大きな影響がある。学校でのエアコンによる電力消費量を減らすために、毎日や月々の消費量のデータを分析し、効果的な方法を探究している。

生徒・教員の変容

年度当初は探究テーマの設定がなかなか進まず、もどかしさを感じている生徒も多いようであったが、SDGsに関わる現代の課題や自分の興味とのすり合わせをすることで、徐々に各自が自分のテーマを決定していった。探究活動を進めていく上で、教員は生徒の思考を深めるために、上手くサポートしていく必要がある。課題の原因は何なのか、数ある解決策の中からもなぜその手法を選んだのかなど、質問をすることにより生徒の新たな発見や視点を導くことができると感じた場面が多くあった。グローバル探究IIの日々の授業を通して、生徒が主体となる授業における教員の役割を再認識することができた。

概要：さまざまないのちがともに生きる世界、そのバランスが崩れ、今、共存することが難しくなっている。すべてのいのちが輝き、それぞれの力を発揮できる世界を実現するために、私たちはどう生きるべきなのか。私たちヒトを含む多くのいのちがバランスを保ち、共に暮らせる社会を作るためのヒントを探る。

ファミリー（チーム）での取り組み

テーマ：海洋流出ゴミを減らし、海洋生物を守る

取り組み：海洋プラスチックをはじめ、海洋に流れ込むゴミにより生き物の命が脅かされている。海洋に流れ込むゴミの多くは、ポイ捨てされたゴミである。調査の結果、ポイ捨てされたゴミのうち、マスクが高い割合を占めた。そこで、マスクを生分解性プラスチック製のものに変えると、海に流れ込むゴミが減るのではないかと考えた。現在、生分解性プラスチック製のマスクがどの程度の時間で分解されるのか、実際にマスクを校内の複数箇所に埋めて実験を行っている。



テーマ：ヨシの有効利用

取り組み：湿地帯に生えるヨシは、以前はさまざまな用途に用いるために刈り取られていた。しかし現在、ヨシは利用されなくなり放置されることが多くなった。ヨシの放置は、湿地の環境を変化させ、そのためそこに住む生物の多様性を減少させる要因となっている。このような現状をスタディーツアーで学んだことがきっかけで、ヨシをストローとして活用するアイデアを立案した。現在、ヨシストローを実際に制作し、その有効性を確認した。今後は、平城宮跡のヨシの有効活用を模索している。



テーマ：RSPOハンドソープの使用を促進する

取り組み：パーム油は我々の生活に深く関わるが、その生産量はボルネオの接待雨林を切り開くことで確保されている。違法な伐採によりパーム油の増産が行われているが、RSPO認証を受けた製品は、違法な伐採が行われていない生産地から生産されたパーム油を使用していることを示している。そのため、RSPO認証製品を積極的に使用することは、ボルネオの森林を守ることに繋がる。このRSPO認証を受けたハンドソープを学校で使用する運動を、昨年から継続して取り組んでいる先輩と協働で行った。校長先生などの学校代表者が集まる場で、RSPO認証ハンドソープの使用を訴えた結果、学校で使用するハンドソープがRSPO認証のものに変更されることになった。今後はその意義を学校全体で共有する活動を行っていく。



テーマ：台所からマイクロプラスチックを減らす

取り組み：海洋に流出するプラスチックゴミが問題となっているが、その中でもマイクロプラスチックは回収が困難であり、さまざまな生物の健康被害をもたらす要因とされている。このマイクロプラスチックを減らすさまざまなアプローチを検討している。これまでに、洗濯で出るマイクロプラスチックを減らす取り組みをしてきた。現在は台所から出るマイクロプラスチックを減らすために、キッチンスポンジをプラスチックが含まれるものから天然物由来のものに変える取り組みをしている。具体的には、麻のヒモから食器洗い用たわしを作成し、その使用を広めようとしている。形状や大きさなどを変化させ、より使いやすいものを制作しようと試行錯誤している。



テーマ：外来昆虫問題に取り組む

取り組み：昨年度に先輩が行った調査を引き継ぎ、奈良県における特定外来生物クビアカツヤカミキリの被害を調べた。秋篠川沿いの桜並木を重要監視地点とし、ラベリングをした157本の桜に対し、2022年10月に調査を実施した。クビアカツヤカミキリに関しては現在は駆除の方法をとっているが、さまざまな外来生物に対し、侵入の経緯など、外来生物となる原因を探り、解決の糸口を見つけたい。



テーマ：殺処分をゼロにする

取り組み：殺処分は、ペットに関する最も深刻な社会問題の一つで、環境省が発表した統計資料では、2020年度の年間殺処分数は犬・猫合計で約23,764頭であった。この殺処分をゼロにするために、奈良県内にある保護施設にボランティアにいき、現状について体験を通して学んだ。また、募金活動などを企画することで、資金面での問題の解決を模索している。

テーマ：獣害保護のために処分された命を無駄にしないために

取り組み：シカやイノシシなどの野生動物によって、農産物に損害が生じている。このような被害(獣害)を減らすために野生動物は駆除され、主に埋めたり焼却されたりして処理されている。そこでジビエの利用をもっと促進することに注目した。この目的を達成するために、「いこま未来LAB」という生駒市が主催する実践型ワークショップイベントに参加した。このイベントで、生駒市のさまざまな方のサポートを受け、ジビエの試食会や勉強会を開催したり、地域のイベントでジビエの広報活動を行うなどして、ジビエの認知度を上げる活動をした。



テーマ：制服のリサイクルを考える

取り組み：ゴミ削減を考える中で、ファストファッションに関する問題に注目し、探究を進めた。その中で、本校の制服リサイクルに着目し、卒業生の制服を再利用することで、捨てられる制服の無駄をなくすことを考えた。自分たちが卒業した中学校における制服リサイクルの状況を聞き込みし、自分たちの活動に繋げようとしている。



テーマ：動物実験をゼロにする①

取り組み：人間に対して危険が生じる可能性のある化学物質を、人間に適用する前にまず動物に対して実験し、その安全性を確認している。この動物実験によって多数の動物の命が失われていることを問題とし、動物実験で失われる命を少なくするような活動をしている。その中でも、自分たちに馴染みのある化粧品について注目した。動物実験をしていない企業を調べたり、そのうちのいくつかに連絡を取りインタビューをするなどして現状の把握をするとともに、動物実験をしていない化粧品の使用を同年代の生徒に広めようと活動している。



生徒・教員の変容

昨年度のゼミと同様、ファミリーでテーマを見つけることに多くの時間を割いた。問いの質を高めるために、教員と生徒間で夏季や冬季の休業中も対話を重ねた。今年度は、できるだけ早い段階で外部の活動者や企業などと連携をとるように指導をした。教員以外の大人と対話をする中で、生徒は問題について、自分ごととして考えるようになった。

d グローバル探究校内発表会

概要：異なる学年の生徒同士での学び合いを促進するため、今年度は「たてにつながる探究交流会」を学期ごとの探究週間中に合計3回実施した。第1回目は1年生から3年生まで全ての学年が参加した。2・3年生は6つのゼミを3分割し、そこにランダムに1年生が入った。18教室で初めての異なる学年が学び合う交流会となった。本校の高校生国際会議でファシリテーターを担当する予定の2・3年生と、希望してくれた生徒で進行した。第2回は2年生と3年生のみが参加し、高校生国際会議の流れに沿って進められた。第3回は1年生と2年生が参加した。第2回・第3回は6つのゼミを2分割し、合計12の2学年が混ざったグループが別の教室に移動し、交流会を開催した。どちらも各ゼミからファシリテーターを募り、彼らが発表の司会進行及びディスカッションでのファシリテーションを行った。ファシリテーションを行う際の注意点として、生徒は以下の点を心掛けた。

【みんなが安心できる場づくり】

- ・この授業では答えに「正しい」や「間違い」はなく、ひとりひとりの意見や考えはすべて平等で、大切な意見・考えとして尊重される
- ・「さまざまな意見や考えがひとつになり、大きな力になる」ことを前提とし、学校はみんなが安心・安全な場である
- ・仲間や相手を傷つけたり、存在を否定したりする発言などはしない
- ・配慮を忘れない

第1回たてにつながる探究交流会 5月17日（火）1～3限	
【ねらい】	
<ul style="list-style-type: none"> ○ 国際高校生がたてにつながり、学び合いをする ○ 3年生の取り組みを1・2年生に伝え、持続可能な探究活動にする ○ 意見交換により、新たな考え方やアイデアを得て、探究をさらに発展させる 	
5	<ul style="list-style-type: none"> ・各自教室に集合 6つのゼミを3分割し、合計18の3学年が混合したグループ ・ファシリテーター生徒自己紹介（2名） ・本日の内容説明
125	<ul style="list-style-type: none"> ・3年生代表者による発表（5組各10分） ・セッション（各発表に15分） 質疑応答、3年生の思い、発表からの気づきなど ・休憩5分
30	交流会 <ul style="list-style-type: none"> ・3学年で構成されるファミリー（グループ）で5つの発表から以下についてディスカッションを行う テーマ： <ol style="list-style-type: none"> ① 本日の学び・気づき ② 自分がその学びから得たこと 自分自身の変容（考え方や思い・姿勢などの変化） ③ 今日からの自分たちにできること 行動や意識など、何をすることが大切か ①－③を画用紙にわかりやすく書く
15	共有会 <ul style="list-style-type: none"> 各ファミリーで代表を決め、教室全体で共有する



第1回たてにつながる探究交流会①



第1回たてにつながる探究交流会②

第2回たてにつながる探究交流会 7月4日（火）2.3限

【ねらい】

- 高校生国際会議の流れに沿った発表及びディスカッションを経験する
- 3年生の探究してきた内容を2年生に共有することで、探究活動に関するアイデアや気づきを促す
- 事前の練習会を通して、ファシリテーターの育成を行う

5	<ul style="list-style-type: none"> ・各自教室に集合 6つのゼミを2分割し、合計12の2学年が混合したグループ ・ファシリテーター生徒自己紹介（2名） ・講評担当紹介 各教室に大学教授や他校教員が割り当てられ、発表やディスカッションに関する講評をして頂いた ・本日の内容説明
45	<ul style="list-style-type: none"> ・3年生代表者による発表（3組8分ずつ） ・質疑応答（各発表に5分） 3年生代表者は発表後、別の教室に移動し再度プレゼンテーションを行った ・講評
5	休憩
10	<ul style="list-style-type: none"> ・ディスカッション① 3つの発表に関わる問題点（持続可能性を阻害するもの）の抽出、共通する深層の原因を探る
15	<ul style="list-style-type: none"> ・ディスカッション② 3つの発表での解決方法・課題（持続可能性を促進するもの）の抽出、解決方法の糸口になるものを探る
15	<ul style="list-style-type: none"> ・ディスカッション③ ①②より、「持続可能な発展と理想の未来を実現するために、国際高校の生徒として、私たちは何をすべきか」について提案を考え、文章化する
5	<ul style="list-style-type: none"> ・各教室宣言（読み上げる発表者の立候補を募る） 宣言読み上げ、拍手で承認



第2回たてにつながる探究交流会①



第2回たてにつながる探究交流会②

第3回たてにつながる探究交流会 3月7日（火） 2.3限

【ねらい】

- 高校生国際会議の流れに沿った発表及びディスカッションを経験する
- 2年生の探究してきた内容を1年生に共有することで、探究活動に関するアイデアや気づきを促す
- 事前の練習会を通して、ファシリテーターの育成を行う

5	<ul style="list-style-type: none"> ・各自教室に集合 6つのゼミを2分割し、合計12の2学年が混合したグループ ・ファシリテーター生徒自己紹介（2名） ・本日の内容説明
45	<ul style="list-style-type: none"> ・2年生代表者による発表（ゼミによって発表者の人数は異なる） ・質疑応答（各発表に5分）
5	休憩
5	・ファシリテーターによるディスカッションの目的とルールの説明
15	<ul style="list-style-type: none"> ・ディスカッション① 発表を聞いた内容を基に、自分自身の生活や行動を振り返り、グループで共有する
15	<ul style="list-style-type: none"> ・ディスカッション② ①で出てきた意見を基に、問題点や課題（持続可能性を阻害するもの）をグループで考える
15	<ul style="list-style-type: none"> ・ディスカッション③ ①②のグループの意見を全体で共有し、高校生として私たちにできることは何か話し合う
5	<ul style="list-style-type: none"> ・まとめ ・アンケート回答



第3回たてにつながる探究交流会①



第3回たてにつながる探究交流会②

e スタディツアーの成果と課題

「 みんなでつくる笑顔のコミュニティ 」ゼミ 生徒： 31 名

概要：各自の探究テーマとしては、「魅力のある町作り」「防災」「コロナ禍の消費活動」「聖地巡礼」「プラスチック問題」などがある。スタディーツアー参加前に、それぞれの訪問先に対して各探究テーマに応じた問いを立てた。現地では、体験学習を中心として、情報収集を行った。参加後はわかったことや新たな問いを立て、各自の探究テーマをさらに深めた。

第1日目 ①

訪問先：二日市リサイクルセンター

目的：リサイクルの取り組みや課題について知る

活動内容：ごみの処理についての講義、センターの見学

成果：自分達の出したゴミがどのように処理されているかを知り、ゴミを捨てる時に分別することやゴミをできるだけ出さないように意識するようになった。

第1日目 ②

訪問先：福井県恐竜博物館

目的：恐竜を中心とした生物やその背景となる地球の歴史を知ること、現在の生き物に対する考えを深める

活動内容：博物館の見学

成果：地球の歴史を知ること、現在の自分の生き方について考えることができた。

第1日目 ③

訪問先：東尋坊

目的：柱状節理が織り成す、約1kmにわたり海岸線に広がる豪快な景観を見学することで、自然について考える

活動内容：東尋坊の見学

成果：自然の力を感じ、自然の保全の大切さを改めて感じた。

第2日目 ①

訪問先：ひがし茶屋町

目的：重要伝統的建造物群保存地区に選定されている町並みや観光について現地調査し、魅力的な町について考える。

活動内容：ひがし茶屋町の見学

成果：車両の通行を禁止したり、公共交通機関を整備したりと観光しやすいように整えられており、観光しやすい町であることがわかった。

第2日目 ②

訪問先：兼六園

目的：自然豊かな庭園を見学し、魅力的な町について考える。

活動内容：兼六園の見学

成果：都市の中に、自然豊かな場所があり、心が落ち着く場所であると感じた。庭園は若者が行くことが少ないように感じるので、聖地巡礼などと結びつけ人を集めることが大切であると考えることができた。

第2日目 ③

訪問先：21世紀美術館

目的：「新しい文化の創造」と「新たなまちの賑わいの創出」を目的に開設された21世紀美術館を見学することで、新たなまちづくりについて考える

活動内容：21世紀美術館の見学

成果：美術館を用いて人が集まり、賑わうことがわかった。奈良には仏像博物館など魅力のあるものがあるが、より老若男女が楽しめるような場所を考案することも町づくりには必要だと考えることができた。

第3日目 ①

訪問先：能登島水族館

目的：海の生き物について知り、海洋プラスチック問題などについて考える

活動内容：能登島水族館の見学

成果：生物の多様性を知り、海の生き物を守ることの大切さを再確認した。海洋生物が海洋プラスチックごみによって被害を受けていることや、年間800万トンが海へ流れ出ているごみの現状から、ごみの処理方法について考えることができた。

第3日目 ②

訪問先：ゆのくにの森

目的：伝統工芸品を体験する

活動内容：それぞれ興味のある伝統工芸を選択し体験をする

成果：ものづくりの大変さを改めて知った。体験の種類が豊富で1カ所に集まっていたり、写真映えするスポットがあり、魅力ある町づくりのヒントとなった。

概要：

昔からの景色、遺産を訪れることで、先人の知恵に触れる。それぞれの場所で、詳しい人から話を聞くことで、どのように保全されてきているのかを知り、今後自分たちはどう関わっていけるのかを考える。多くの人から話を聞き、自分達の研究に生かせるようにする。

第1日目

訪問先：東尋坊

目的：訪問先である東尋坊は福井県有数の観光名所として、毎年100万人を超える観光客が訪れる。実際の観光名所に足を運ぶだけでなく、DMOさかい観光局の方から観光地となる上での工夫等を聞き、日本に残る伝統行事や祭りの継承に役立つ考え方を身につける。

活動内容：

- ・東尋坊訪問
- ・DMOさかい観光局の取り組みについての学習

成果（生徒感想）：

・実際に観光地に足を運ぶことで見えてくる課題があった。と同時に、課題として感じた部分は観光局の方にとっても解決の難しいものであるため、自然遺産の観光地化の難しさを感じることができた。

・観光局の方から地域活性の為にしている取り組みを聞いていると、何気ないように思える部分も様々な角度から配慮されていることに気付く。今回訪れたのは自然遺産であるが、自然遺産・文化遺産それぞれの特性を活かした観光の取り組みについても探究していきたい。



第2日目

訪問先：塩の駅 輪島 道の駅 ポケットパーク

目的：石川県輪島市には、伝統的な方法で作られている輪島塩、また国指定文化財名勝にも指定されている棚田、白米千枚田がある。昔より伝えられ、多くの人を魅了しているこれらは、どのように守られ、現在どのような取り組みをしているのかを、ガイドより聞く。

活動内容：

- ・輪島塩作り体験
- ・ガイドからの話を聞く

- ・白米千枚田訪問
- ・ガイドからの話を聞く

成果（生徒感想）：

輪島塩、千枚田についての概要をガイドより学んだ。また塩の駅輪島では塩作り体験を行った。

現在、どのような活動をして、これらを守り続けているのかを聞いた。



第3日目

訪問先：売薬資料館 民芸合掌館

目的：富山県にある300年以上の歴史をもつ売薬資料館を訪れた。売薬や置き薬という形が主流だったころから現在に至るまで、薬はどのような変化を遂げてきたのか。その歴史を知り資料に触れることで今後の薬の発展を考える。

また民芸合掌館では、合掌造りの建物の中に展示されている民芸品に触れた。当時の建物の中で実際に日用品として用いられていた生活用品を知ることによって当時から培われてきた生活の知恵や工夫を知る。

活動内容：

- ・民芸合掌館への訪問
- ・売薬資料館への訪問
- ・売薬資料館のガイドの方からの講話「薬の歴史について」

成果（生徒感想）：

・現在はテレビの中でしか触れることがない道具が日用品の一つとして展示されている様子を直接見て、現在に至るまで先人たちによる様々な努力と工夫があったのだということを感じて改めた。

・奈良県にも古くから伝わる薬があることを知った。現在では薬局で薬を入手する方法が主流だが、昔は違っていた。昔とは形態は異なるが日常生活の中で必要不可欠なものであることは今も昔も変わらない。現在も感染症が流行している中で薬を更に発展させていくためにはどのようなことが必要か考えるきっかけとなった。



3.2.3 グローバル探究II スタディツアーの成果と課題（グローバルゼミ）

10月25日から28日までグローバルのゼミに分かれて北陸地方でスタディツアーを行いました。スタディツアーの前に各ファミリーが行きたい場所を考え、独自の探究の材料を得るために質問を考えたり、アンケートを実地したり、写真を撮ったりしました。選ばれた場所はグローバルと関係があり、文化、言語、伝統、医療など様々な面から「グローバル」に関する問題に取り組むことができました。

一日目（学校→敦賀ムゼウム→福井県国際交流協会→東尋坊→ホテル）

1日目に敦賀ムゼウムを訪れました。敦賀の古い歴史では外国とのつながりがあるとわかりました。特に、第二次世界大戦では、ポーランドなどの戦地からのユダヤ人の人々は船に乗って、敦賀湾にやってきました。ユダヤ人たちは日本人と一緒に生活し、戦争の終わりまで日本にいました。敦賀ムゼウムは当時あった物が展示されて、実際体験した人々の生の声を聞くことができました。第二次世界大戦の中で、ユダヤ人を救った日本人も大勢いたり、現在までも強いつながりが続いているとわかりました。生徒が、意外な場所から「グローバル」とのつながりがあるのを知り、驚いた生徒もいました。

次に訪れた場所は福井県国際交流協会でした。福井県の施設で、海外から来て住んでいる人々や福井県と海外のつながりを支援する施設でした。まず、協会のスタッフの話を聞きました。スタッフから様々な悩みがあるとわかりました。例えば、日本語が話せない外国人が病院に行く場合、理解の困難と言う問題が出てきます。その場合、知っている日本語の単語を使うから日本語が話せる息子や娘を頼るしかないとわかりました。医療のファミリーは特にこの経験を探究で発表しました。

1日目最後に訪れた場所は東尋坊でした。観光名所として知られており、海外から多くの観光客も訪れる場所だとわかりました。



（写真左）敦賀ムゼウムに入る生徒と先生。

（写真中央）福井県国際交流協会のスタッフとのお話。

（写真右）福井県国際交流協会のスタッフとグローバルゼミの集合写真

二日目 (ホテル→能登島の暮らし体験と観光作り→ホテル)

2日目は能登島のコミュニティーセンターで島民の暮らしについての発表を聞きました。島に暮らしている人数は少ないが、海外との繋がりを作っていると分かりました。特に、フランスからの観光客が多く、レクリエーションや北陸の人々の伝統を体験するなどの活動が人気です。また、能登島とフランスの交流を支援するスタッフがフランスの方へ行くこともあります。発表後、コミュニティーセンターで能登島で育てた野菜で作った弁当を食べて、島でしている蛸釣りや塩作りを体験しました。蛸釣りは魚釣りとは違って、棒を使って海岸から釣る方法でした。結局、蛸を一匹釣ることができ、晩ご飯でゼミと先生の皆さんで食べることが出来ました。最後に、能登島博物館に行きました。能登島の伝統、歴史や今の生産物について学びました。能登島半島では、様々な魚が捕れるので日本の大事な産業地だと分かりました。



(写真左) 能登島コミュニティーセンターで発表を聞くゼミの生徒

(写真中央) 塩作りの写真。鍋に海水を入れて、火で温める。2種類の塩を作ることが出来ました。

(写真右) 蛸釣りの仕方を教えるスタッフメンバー。



(写真左) 生徒が能登島博物館に入る写真。

(写真右) 能登島は産業が盛んで、たくさんの魚が捕れます。

三日目 (ホテル→能登島水族館→金沢21世紀美術館→金沢伝統町体験→ホテル)

3日目は能登島半島にある能登島水族館に行きました。ジンベイザメ、クラゲ、イルカなどたくさんの種類の魚を見ることが出来ました。魚など海の生き物は地球の大切なものなので高校生として持続可能な社会を作ることを改めて考えました。次に、能登島を離れて、金沢市内観光を体験しました。金沢21世紀美術館では、日本と外国の有名な画家の絵が展示されていることがわかりました。フランス出身の有名画家「イエベス・クライン」の絵を鑑賞することが出来ました。美術の美しさを様々な視点から体験し、外国を含めて、地球の宝だと分かりました。その宝を維持するには、お互いに協力してコミュニケーションをとること

とです。最後に、金沢市内の東茶屋街を訪れました。金沢の伝統芸術や有名な抹茶デザートを食べ、古い町の家づくりを鑑賞しました。東茶屋街は日本人にも外国人にももっとも有名な町で町中の様々な看板は英語で書かれていました。これから先、日本社会の少子化の中で外国人の労働者や観光客が欠かせないものになると思いました。



(写真左) 朝の能登島水族館

(写真中央) 能登島水族館の大水槽

(写真右) 金沢21世紀美術館で写真を撮っても大丈夫でした。



(写真左)

金沢21世紀美術館の周りにたくさんのユニークなオブジェもありました。

(写真右) 東茶屋街の光景

概要：人権課題からSDGsに関連した問題にも視野を広げ、自身の探究テーマを別な視点で捉え直し、視野を広げることを目的とする。各訪問先を訪問する際は、こちらが用意した問いについてバス車内で考え、訪問後考えた答えを共有しながら考えを深めた。

第1日目 ①

訪問先：福井県立恐竜博物館

目的：「恐竜は絶滅したが、人類は絶滅すると思うか」を考える。

活動内容：問いの答えを考えながら、博物館の見学

成果：恐竜が絶滅した原因についての展示を見ながら、人類と恐竜はどう違うかを考えた。恐竜はその最大の特徴である巨大さゆえに絶滅した、人類はその最大の特徴である知能ゆえに絶滅するかもしれないという考えも紹介した。

第1日目 ②

訪問先：敦賀原発、三国風力発電所・太陽光発電所

目的：「自然エネルギーは、人権とどのように関わっているか」について考える。

活動内容：敦賀原発はサービスエリアより確認。
問いの答えを考えながら、中部電力の講義を聴き、風力発電所・太陽光発電所を見学する。

成果：事前に視聴した『日本と再生』という世界の自然エネルギーを取り扱ったドキュメンタリー映画をもとに、問いの答えを考えていた。ひとたび原発事故が起これば故郷に帰れない人が出てしまうこと、二酸化炭素の排出が続けば地球に住めなくなることなどを考えていた。

第2日目 ①

訪問先：東尋坊

目的：「日本に自殺が多い原因」について考える。

活動内容：問いの答えを考えながら、東尋坊いのちの電話ボックスを見学し、東尋坊の自然を見学する。

成果：「自殺の名所」などと言われることもある東尋坊だが、そもそも日本に自殺が多い根本的な原因を探ることが大切であることを確認し、それぞれ考えを深めていた。とりわけ日本の文化では、完璧を求めすぎることや、困ったときに自分に責任を感じることも多

いことなど、このような根本的な原因を変えていかない限り、生きにくい社会が変わることではないことを考えていた。

第2日目 ②

訪問先：富山県立ガラス美術館

目的：「社会を変える力として、芸術にはどのような可能性があるか？」を考える。

活動内容：問いの答えを考えながら、富山県立ガラス美術館の芸術作品を見学する。

成果：問いの答えについては、翌日も引き続き考えることを確認し、芸術にはどのような力があるかを考えていた。

第3日目

訪問先：加賀伝統工芸村 ほか

目的：「社会を変える力として、芸術にはどのような可能性があるか？」を考える。

活動内容：問いの答えを考えながら、伝統工芸を体験する。

成果：日本では「芸術は趣味・娯楽」という風潮がある中、社会変革の力として芸術を捉え直すということを考えていた。たとえば心の病にかかるのを防ぐために、音楽など芸術の力が欠かせないのではないかといった意見が出た。社会のしくみや政策として、芸術のもつ力を積極的に考えなければならないことを考えた。

「蒼い地球を未来につなぐ」ゼミ 生徒：26名

概要：体験的に学習し、環境問題について深く考える機会をもつことを目的とし、各自のゼミテーマに応じた目的地を設定した。ゴミの分別の様子を見学したり、太陽光や風力発電また水力発電に関する学びを深めた。

第1日目

訪問先：三国太陽光・風力発電所

目的：太陽光発電と風力発電の仕組みや特色、また地球にやさしい再生可能エネルギーについて学びを深める。

活動内容：近隣の公民館で、北陸電力の方に地球環境と再生可能エネルギーに関する講座をして頂いた。その後、実際に三国太陽光発電所と風力発電所を訪問した。

成果：【生徒の振り返り】・地球温暖化の原因である温室効果ガスが、どれほど気温に影響を与えるかという実験を、北陸電力の方がしてくださったが、その結果に驚いた。普段使用している電気がいかに生み出されているかも学ぶことのできる良い機会であった。・実際に風力発電の風車を目の当たりにして、その大きさに驚いた。それと同時に、広大な土地が必要であり日本で普及させるにはなかなか難しいと感じた。



第2日目

訪問先：福井環境事業二日市リサイクルセンター

目的：ゴミの処理や分別の仕組みを知り、リサイクルの重要性や現実について学ぶ

活動内容：リサイクルセンターの方から、収集からリサイクルまでの流れに関する説明をしてもらった。その後、工場内を見学し、生徒からの質問に応じて頂いた。

成果：【生徒の振り返り】・私が住んでいる地域でも分別が促されているが、なぜ必要なのか理解出来ていなかった。ゴミがリサイクルされる一連の流れを見ることで、私自身の分別に対する意識が変わったと思う。・学校での分別の促進を探究のテーマとして取り組んでいたため、理解がさらに深まった。リサイクルセンターで分別はされるが、収集の時点で分別がされてリサイクルがしやすくなるような社会になればと思った。



第3日目

訪問先：黒部ダム

目的：水力発電所として広く知られている黒部ダムを訪問し、その歴史的背景と水力発電の利点について学ぶ。また黒部アルペンルートで風景を楽しみ、自然の尊さを感じる。

活動内容：ツアーガイドによる黒部ダム建設の歴史的背景の説明をうけた。その後、展望エリアを回りつつ、観光放水を見学した。

成果：【生徒の振り返り】・黒部ダムの建設の歴史を学ぶなかで、水力発電の利点を多く学ぶことができた。二酸化炭素排出量を抑えることで、地球温暖化防止につながることは間違いないので、環境に優しいエネルギーの使用が促進されれば良いと思う。・自然豊かな観光地として人気のある黒部ダムの水力発電所としての役割を、実際に見ることが出来たのは良い経験となった。日本の地形を上手く利用した発電の方法を考えることで、持続可能な社会の実現は可能になるのではないかと感じた。



概要：

「いのちと向き合うヒトに会う」
それぞれの探究にヒントをもらう旅。さまざまな場面・環境・立場でいのちと向き合う、また、保全に情熱を傾ける人々に出会い、今後の探究活動が豊かなものになることを目的とする。人生の先輩として生き方を学ぶ。

第1日目

訪問先：福井県自然保護センター

目的：訪問先である福井県自然保護センター（福井県大野市）は、白山山麓の自然と人間社会との共生に取り組む白山ユネスコエコパークの一角にある。この地域の自然環境保全に取り組む同センター職員の話や、自然の森を案内していただく。また福井県内有数の湿地性植物の生育地である池ヶ原湿原のヨシ刈りを行うことで、保全活動に参加する。

活動内容：

- ・自然の森内の動植物の観察
- ・自然保護センターの取り組み、福井県の自然保護について
- ・ヨシ刈り体験

成果（生徒感想）：

- 福井県の豊かな自然を守り、後世に伝えるために、絶滅危惧種の保全や里山での活動などたくさんの活動をしていることを知ることができた。
- 自然観察の森へ行って、直接自分の手で植物を触ったり、見たりしながら、ガイドさんの話を聞いてとても勉強になった。ヨシ刈りでは、ヨシがストローの代用品にできると聞いて、とても興味を持った。私たちのグループでは、プラスチックゴミ問題を解決しようとしているので、今後の参考にしたいと思っている。
- ヨシ刈りは、最初は驚きました。どこにヨシがあるのかもわからなかったです。しかしやっていくうちに楽しくなってきた、やり終えたときには少し達成感がありました。
- 普段なかなか自然に触れることができないので、今回の体験は良い経験となりました。匂いで自然を感じ、味で自然を感じ、はじめての体験だらけで思っていた以上に楽しかったです。自然の中にも応用されている木などがあって、とても勉強になりました。



第2日目

訪問先：能登千里浜レストハウス

目的：車で砂浜を走行できる千里浜なぎさドライブウェイに約50年前に開業した「能登千里浜レストハウス」は時代の変化で集客が激減、経営難になっていた。事業を受け継いだ地元大手旅館から一昨年より、農業と漁業に参入する若い経営者の会社「能登風土」が委託を受け、経営再建に挑んでいます。前職のピースボートでの国際交流、地域おこし協力隊での地域づくりの経験を活かし新たなツーリズムに取り組む、能登風土企画・PRマネージャー任田和真氏から、地域の生業を観光で支える「持続可能な観光」地域づくりや人を呼び込み、巻き込む取り組みなどの話を聞き、実際に行われている海洋ゴミSDGsワークショップを体験した。また体験後はグループワークとしてこの課題へのアプローチ方法を考える時間を持った。

活動内容：

- ・千里浜の現状と課題についての講演
- ・千里浜でのゴミ拾い
- ・ゴミを使ったアート作成
- ・ワークショップ「千里浜の魅力を世界に発信」

成果(生徒感想)：

- 私はボルネオの自然環境について探究しているのですが、任田さんのように問題と真摯に向き合っている人と一緒に努力するということが大切にしていきたいと思いました。
- 拾ったゴミの中に、外国語が書かれているものがとても多く驚きました。ゴミはネガティブな印象があるのに、アートにすることによって価値が生まれることが印象的でした。
- 千里浜は最初に見た時は綺麗だと思ったけど、実際にクリーンビーチ体験をしてみても、砂の中にはたくさんのゴミが埋まっていることがわかりました。どれだけ機械とかで掃除しても、やはり最終的には人が掃除してきれいにしていけないんだと知ることができました。
- 私は千里浜の観光アイデアを考えることがすごく楽しかったです。普段そんな大きなことを考えることがないので、貴重な体験をさせていただきました。
- 私たちはまだ高校生なので、仕事として様々な問題について考えているわけではありません。しかし今回働いておられる方の声を実際に聞かせていただき、本当に熱意を感じさせられました。私ももっと探究に熱意を持って、自主的に行動していきたいと改めて感じました。



第3日目

訪問先：能登千里浜レストハウス

ノトハツソ（大野製炭工場）は「生命が繋がる地域を共創する」という理念を持ち、「炭焼き」という伝統的生業を奥能登の里山の限界集落で行う。大野製炭工場は専門で行う炭焼き事業者としては石川県で唯一になる。「炭焼き」は挑戦と革新に満ちた地域創生ビジネスであるとともに、生態系を守り環境にも優しいサステナブルなものであることを実感するとともに林業の魅力を若い世代にも伝えていきたいという思いを持つ若き林業経営者、大野長一郎氏との対話と枝打ちやチップづくり作業を体験させていただきます。

活動内容：

- ・能登里山と炭作りについての講演
- ・炭火起こし体験
- ・枝打ち、チップ作り体験

成果(生徒感想)：

- 大野さんの話されている言葉から、炭焼きに対する姿勢にとっても覚悟と誇りを感じて、私もこれからの活動や人生で厳しい状況にあったとしてもコツコツと可能性を信じて頑張っていこうと思った。
- 安価な外国産の炭が多く流通している中で、高品質な国産の炭を作ることで、集落に活気を取り戻そうとする姿に感銘を受けました。
- 最初は、私たちの活動であるプラごみの抑制には直接つながることはないと思っていたが、大野さんの熱心さに惹かれ、問題意識が高まった。大野さんのように、誰かに影響を与える活動をしていきたい。



ゼミミーティング

毎日、活動終了後、宿舎に戻り、ミーティングを実施した。その日に学んだことを各ファミリーで話し合い、全体共有会を実施。生徒たちはその日を振り返り、ディスカッションしたり、メモにまとめたりしていた。また、この時間にデイリーチェックシートを記入した。共有会の後、その日のメモを回収、スタディツアー後に返却。



f 令和4年度 文部科学省委託「新時代の教育のための国際協働プログラム」
初等中等教職員国際交流事業 タイ教職員招へいプログラム

1. タイ教職員による日本の学校訪問

11月30日（水）15:00-18:00

-15:00	Zoom への入室
15:00-15:10	歓迎の言葉(代表生徒)
15:10-15:40	学校概要の説明(校長)
15:40-16:20	6つのゼミについて(各ゼミ代表生徒)
16:20-16:30	休憩
16:30-16:40	留学生からみた日本
16:40-17:00	書道部発表
17:00-17:10	休憩
17:10-17:50	交流会(質疑応答など)
17:50-18:00	タイの先生からの言葉(代表者) おわりの言葉(校長)

第2学年グローバル探究6つのゼミから各2名の生徒が参加し、それぞれのゼミでの活動や、自分自身の探究活動についてスライドを用いて紹介した。本校のタイからの留学生は、日本の学校とタイの学校との違いや自身の学びについて発表した。書道部の生徒は書道パフォーマンスでタイの先生がたを歓迎した。生徒たちの温かい歓迎でタイの先生からも笑顔が見られた。生徒との交流ののち、タイの先生と本校教職員7名での交流会が開かれた。それぞれが「Happyだと思う瞬間」の共有をした。また、タイの先生からは、本校でどのようなESDの実践をしているか、評価の仕方、生徒の進路などについての質問があり、グローバル探究の取り組みや教員それぞれの意識、観点別評価などについて説明しながら交流した。本校職員にとっても、ESDを話題にしてざっくばらんに話ができる時間は普段なかなか取ることができていないので、貴重かつ豊かな時間となった。



2. タイ教職員による日本の生徒（高校生）への授業

12月9日（金）9:50-11:40

-09:50	Zoom への入室 (最初から6つのゼミに分かれる) ・みんなで作る笑顔のコミュニティ ・いのちの輝きを未来に伝える ・蒼い地球を未来につなぐ ・先人の知恵を未来へ届ける ・グローバルが生み出す力 ・みんなちがうからみんなで支え合う
09:50-10:00	タイの先生の紹介
10:00-11:30	タイの先生の授業
11:30-11:40	生徒代表の言葉 おわりの言葉(各ゼミ担当先生)

タイ15名の先生が各ゼミにオンラインで訪問し、タイでの各ゼミテーマに関する取り組みなどを紹介した。「みんなちがうから、みんなで支えあう」ゼミでは、LGBTQやジェンダーについて話題にあがり、生徒とタイの先生との対話が生まれたり、「いのちの輝きを未来に伝える」ゼミでは環境問題に対する取り組みを紹介しあった。ヨシストーリーを制作している生徒たちの取り組みにはタイの先生たちも関心を示しておられた。タイの高校生が画面に映し出された時には生徒から歓声が上がり、盛り上がりを見せた。



3.2.4 グローバル探究Ⅲ

a 全体計画

【対象】 3年生
【時間】 火曜7限、金曜6・7限
【目的】 1学期 <ul style="list-style-type: none">● 探究のテーマを深めつつ、高校生国際会議に向けた準備を進める。● 論文作成に関わる、書き方や形式を身につける。 夏休み <ul style="list-style-type: none">● 高校生国際会議にて、宣言文を作成し未来へつなげる行動指針を共有する。● 各自論文の作成を進める。 2学期 <ul style="list-style-type: none">● 論文を完成させ、他者と共有することにより探究のさらなる深化を図る。
【計画】 1学期 <ul style="list-style-type: none">● 高校生国際会議に向けて、探究の成果を発表する。● 論文のてびきを配布し、論文の形式や注意事項について確認する。● たてにつなげる探究交流会（7月4日）<ul style="list-style-type: none">・ 各ゼミの代表生徒を選出し、発表を行う・ 1・2年生と発表に関するテーマでディスカッションをする 夏休み <ul style="list-style-type: none">● 高校生国際会議で、発表者だけでなく参加者全てを巻き込んだディスカッションを行い、未来につなげる行動指針を作成する。 2学期 <ul style="list-style-type: none">● 要旨とともに論文を完成させ、推敲を行う。● 論文の交流を通じて、他者の視点をふまえてさらに探究を深化させる。

b グローバル探究Ⅲ 研究テーマ一覧

3年生では、2年次より継続してゼミでの活動を行った。各ゼミで実際に生徒が設定したテーマの一部抜粋を以下に示す。

1-みんなで作る笑顔のコミュニティ

- へき地の中でより良い教育をするために
- 奈良の観光業の活性化
- 子供がのびのび成長できる環境づくり
- 誰もが安心して治療・療養できる医療現場実現のために
- オーストラリアの風を山添村に～海外から学ぶ へき地医療のカタチ～
- 大地震から身を守ろう！～地震に対する防災意識と対策～

2-先人の知恵を未来へ届ける

- 木造住宅を多く残すために
- 桃太郎は何故こんなにも長く語り継がれているのか
- ヘリテージツーリズムは奈良県の観光客をより増やすために有効か
- 古典文学の継承・学習方法について
- なぜ宗教は必要とされてきたのか

3-グローバルが生み出す力

- ジェンダーとLGBTQにおける雇用
- ハラルマップを通して奈良県で多文化共生を築く
- 外国人労働者が働きやすい環境のために
- 多文化共生をイスラム教徒への配慮から考える
- 奈良の多文化共生を実現させるために

4-みんなちがうから、みんなで支え合う

- ジェンダーレスファッション市場の可能性
- 部落問題について教育の視点から部落差別の教育を促すために
- 無名のセクシュアリティをどのようにして広めるか？
- 同性婚の偏見と差別をなくすために
- 障害理解を通して「思いやり」を学ぶ
- HSPについて～人の感情～

5-蒼い地球を未来につなぐ

- カーボンニュートラルと社会～私たち高校生にできること
- 黄砂の問題に対する砂漠化防止策について
- 海洋プラスチックゴミ対策への議論と考察
- 奈良の鹿とポイ捨て
- 微生物のもつ力とその活用

6-いのちの輝きを未来に伝える

- 殺処分をなくすために考えたこと
- ボルネオ島の環境問題に対する社会心理学的アプローチ
- 外来種から桜を守れ
- 私たちと野生動物の共存について
- ホッキョクグマと地球温暖化の関連性
- 海洋汚染の進行を防ぎ、海の生き物を守る

c ゼミの取組の成果と課題

「みんなでつくる笑顔のコミュニティ」ゼミ 生徒： 32名

概要：防災・教育・医療・福祉・経済などの視点から、だれもが安心して毎日を送ることのできるまちづくりについて探究を進めた。

- ・へき地の中でより良い教育をするために
- ・奈良の観光業の活性化
- ・子供がのびのび成長できる環境づくり
- ・吃音者のみんなが笑顔でいられるように
- ・誰もが安心して治療・療養できる医療現場実現のために
- ・オーストラリアの風を山添村に～海外から学ぶ へき地医療のカタチ～
- ・大地震から身を守ろう！～地震に対する防災意識と対策～
- ・医療従事者の方への感謝の気持ちを行動に～自分の趣味を活かして社会貢献～
- ・今後の地域医療に求められているものは何か
- ・在宅医療の機能
- ・身近に潜む若者の社会的孤立
- ・ストリートチルドレン
- ・車いすユーザーの住みやすいまちづくり

以上は、本ゼミにおいて生徒が取り組んだテーマの一部である。

いずれの探究活動も、生徒自身の関心に基づいてテーマ設定を行った。

WWL高校生国際会議では、1名の生徒が代表として発表を行った。

最終的な論文作成の段階において、規定の上限を超えて論述する生徒が多く、内容の精選や資料の選定に悩む生徒が少なくなかった。

生徒・教員の変容

このゼミで目指す「笑顔のコミュニティ」とは何かということについて話し合い、医療、福祉、経済、教育などさまざまな分野からまちづくりについて考えた。コミュニティを形成するという点に関して、高校生である生徒たちにとっては実感を伴わないことも多く、探究テーマが絞り込めない生徒も見受けられたが、論文の執筆を進めるにつれて「高校生の自分たちもコミュニティの一員である」という視点を持つことができるようになっていった。そこから、自分たちが目指す「笑顔のコミュニティ」の実現に向けてさらに考えを深めた。「笑顔のコミュニティをつくる」という大きなテーマを目指すためには、身近にあるささいなことにも目を向ける必要があることに気付き、また、さまざまなことに対して「自分事」として捉えられるようになったことは、生徒たちの意識の持ち方や行動変容につながっていると考えられる。

「先人の知恵を未来に伝える」ゼミ

生徒： 19名

概要：各自設定したテーマについて2年次より行った探究を3年次(グローバル探究Ⅲ)においても引き継ぎ、最終的に論文の作成を行った。生徒の探究テーマは多岐にわたる。

- ・物語の伝播と変容
- ・占星術や星と人間の社会生活の関わり
- ・木造建築の継承
- ・ヘリテージツーリズムの利用
- ・消滅言語の継承について
- ・世界遺産の保存
- ・神話の利用およびその継承について
- ・疾病の歴史とその対策について
- ・地方創生と地域の歴史の利用
- ・寺院減少を食い止める

以上は、本ゼミにおいて生徒が取り組んだテーマの一部である。

いずれにおいても、過去、人類が生み出したものを現在を生きる私たちがどのように利用するか、そしてどのようにすれば未来に繋いでいくことができるか、生徒は探究を深めた。最終的な論文作成の段階において、規定の上限を超えて論述する生徒が多く、字数の減少や挿入する資料の選定に苦戦する様子が見られたが、最終的には要旨も含め、全員が論文の完成に至った。

生徒・教員の変容

2年次より継続したテーマを扱う中で、自身の考察を批判的に見る力が生徒についたと考えられる。当初、先行研究の内容をそのまま受け入れ、それに賛同して論を展開するだけであったが、数度のゼミ内発表を経ることによって、組み立てた論を一度見直して再構成する能力が養われた。また、2年次は他者の発表を聞いて、基礎的な質問をおこなうだけであったが、3年次ではより踏み込んだ問いかけをおこなうことが出来るようになった。さらに、自身が立てた目標について、最後まで諦めずに証明しようとする忍耐力が生徒には身についたと考えられる。さらに、探究を深める中で必要な情報をどのように取得するか様々な方法を取捨選択する力を生徒は身につけた。

一方、教員側も多様なテーマに対応する中で教科を越えた新たな知見を得た。また、生徒各自が探究の中で何に躓いているか、何をアドバイスすべきかを見極め、適切に対応するために個別で対応を図る事を心がけるようになった。さらに、論文作成にあたっては生徒個人の特性や個性を尊重しつつも、論文としての体裁を整えるために、粘り強く改稿の指示を行い、複数の教員で連携を図った。

概要：各自設定したテーマについて2年次より行った探究を3年次(グローバル探究Ⅲ)においても引き継ぎ、最終的に論文の作成を行った。生徒の探究テーマは多岐にわたる。

- ・ 難民と戦争
- ・ グローバルと私たちの関係性
- ・ LGBTQとジェンダーの雇用
- ・ 外国人労働者の多文化共生
- ・ 貧困をなくそう
- ・ 奈良県の多文化共生を実現するために
- ・ 異文化理解
- ・ ハラルマップを通して奈良県の多文化共生を実現する
- ・ 外国人が日本で賃貸を利用するときの問題

以上は、本ゼミにおいて生徒が取り組んだテーマの一部である。

いずれにおいても、国際理解・国際協力・多文化共生をテーマに、1年半に渡って真剣に取り組んだ。3年生では、論文の執筆という大きな課題があったが、全員が無事に提出することができた。

生徒・教員の変容

2年次より継続して取り組み、ゼミの中で特に大切にしている身近なところからより良い社会の実現に向けての実践をどのファミリーも実践した。

例えば、奈良県の多文化共生をテーマにしたファミリーは奈良公園周辺のハラルマップを作成したり、異文化理解をテーマにしたファミリーは、企業での異文化理解を深める漫画を作成したりした。大きな成果を出せたファミリーもいれば、そうでないファミリーもあったが、探究のプロセスの中で全員が実践することができたのは、生徒の学びを深める良いきっかけになったように思う。

教員も生徒とともに実践していく中で、一緒に悩み智慧を出していく中で、ともに成長することができた。

概要：各自設定したテーマについて2年次より行った探究を3年次(グローバル探究Ⅲ)においても引き継ぎ、最終的に論文の作成を行った。生徒の探究テーマは以下の通りである。

- ・インクルーシブ教育の必要性～すべての人が輝く社会を作るために～
- ・LGBT問題の認識のズレ
- ・オタクの世界平和
- ・子どもに対するネグレクト
- ・安楽死がなぜ日本で認められないのか
- ・ジェンダーレスファッション市場の可能性
- ・文学作品から考える恋愛感情と尊敬感情の違い
- ・部落問題について教育の視点から部落差別の教育を促すために
- ・体育の男女共習、別習
- ・色の概念が及ぼす影響とジェンダーレス化
- ・制服と快適な学校生活
- ・親切-席を譲る人の勇気-
- ・義務教育課程における不登校児童・生徒の成長(発達)と高校生とのつながり方
- ・先行研究をまとめて高校生としてできることを考える
- ・無名のセクシュアリティをどのようにして広めるか?
- ・性・好みの多様性
- ・色と性別
- ・同性婚の偏見と差別をなくすために
- ・障害理解を通して「思いやり」を学ぶ
- ・自分らしさを表現できる制服とは
- ・保健室登校は不登校生徒にとって有効な手段といえるのか
- ・HSPについて～人の感情～
- ・虐待を受ける子どもとその親と地域の関わり方の理想
- ・メディアが及ぼす性の多様性社会への影響
- ・ジェンダーレスファッション
- ・性別欄の必要性
- ・『SNS上での誹謗中傷』～コメント欄を実名制にすべきかすべきではないか～

いずれの探究活動も、生徒自身の関心に基づいてテーマ設定を行った。人権に関する内容は、議論の分かれるテーマがほとんどであり、主観で論じないように指導を行ったが、主客の書き分けや論理構成を満たした論文の作成には至らない生徒が多かった。また、WWL高校生国際会議では、1名の生徒が代表として発表を行い、ゼミのメンバー全員を含めてディスカッションを行った。

生徒・教員の変容

3年次の取り組みとして、2年次に立てたテーマの問いに対する仮説検証を行った。探究テーマとしてふさわしい問いを構築する段階で壁にぶつかっている生徒が多く見られたが、指導教員との面談等を重ねて少しずつ明確な問いをつくることができるようになった。生徒は多様な価値観に触れることで「寛容さ」を身につけたと考えられるが、教員としては、生徒達の意見の「正しさ」に疑問を持つこともあり、個人の考え方に対してどこまで指導すべきか悩む場面が多く、最後まで結論は出なかった。

教員の立場として、次にゼミとして取り組むなら、「指導の体系化」「指導計画の作成」「論文や発表のルーブリック作成」を行うことで、生徒自身の「探究力」向上につながるのではないかと感じた。1期生ということもあり、手探りで進んできたが今年度の反省は次年度に生かしていくべきだと考える。

「蒼い地球」ゼミ

生徒：27名

概要：各自設定したテーマについて2年次より行った探究を3年次(グローバル探究Ⅲ)においても引き継ぎ、最終的に論文の作成を行った。

ファミリー（チーム）での取り組み

テーマ：ゴミの削減
取り組み：ゴミのポイ捨てをなくし、動物の命を守ることを目的に、奈良の鹿とゴミの問題について探究を進めた。
テーマ：カーボンニュートラル
取り組み：奈良の地域社会でカーボンニュートラルを達成する可能性を探ることを目的とし、水素自動車と奈良公園周辺のマイカー規制について探究を進めた。
テーマ：原子力発電
取り組み：原子力エネルギーでの発電量を、自然エネルギーで補うことができるのかということについて探究を進めた。
テーマ：海洋汚染
取り組み：海洋汚染を防ぐため、マイクロプラスチックや海洋ゴミについて探究を進め、その過程から奈良公園のゴミ問題について考えるようになった。
テーマ：資源の再利用
取り組み：身近な不要品を回収し再利用するポストを設置する他国の取り組みに着目し、その取り組みを身近な場所で実現するために、探究をすすめた。
テーマ：二酸化炭素排出量削減
取り組み：身の回りから二酸化炭素排出量削減を達成することを目的とし、奈良ストップ温暖化の会と協働したり、教室のチョークの再利用実験を行ったりした。
テーマ：節電
取り組み：カーボンニュートラル達成に向けて、自らができることを探究し、「節電」がどこまで有効かを実地調査し、今後も取り組む予定である。
テーマ：環境問題学習
取り組み：情報機器が身近な現代の学生が気軽に環境問題を学び取り組むことができるようなアプリを作成し、そして広めることを目的として探究を進めた。
テーマ：黄砂とその弊害
取り組み：砂漠化の進行による黄砂の飛来の影響について知り、黄砂に苦しんでいる人への対策を立てることを目的に、実験を行いながら探究を進めた。
テーマ：地震と防災

取り組み：防災活動や、実際に地震が起きた際に高校生の自分に何が出来るのかということについて真摯に考え、探究を進めた。

テーマ：再生可能エネルギー

取り組み：奈良県で取り組むことができる再生可能エネルギー発電について調査し、さらに地域性による再生可能エネルギー発電方法について探究していく予定である。

テーマ：微生物

取り組み：微生物が持つ物質を分解する力で工場などの排水を綺麗に出来るということを実証するために、川の水を採取し実験を実施しながら探究を進めた。

テーマ：防災とインフラ

取り組み：地震や台風などの自然災害から地域の重要なインフラである公共交通機関をどのように守るかということについて、探究を進めた。

テーマ：ファッションとSDGs

取り組み：ファッション業界がどのようにSDGsへの取り組みを行っているのかということについて、各企業を比較しながら探究を進めた。

生徒・教員の変容

1学期にはこれまで探究してきた内容を実践に活かし、データ等を収集するグループが多くみられた。2学期以降については論文を作成するにあたって、生徒はこれまで以上に文献を読み込み、理解しようとする姿勢が身についた。教員としては論文の作成指導に悩むことが多かった。論文の内容についてどこまで教員の手を加えるのかの見極めが難しく、来年度以降は指導の体系化を図ることが重要だと考える。

「いのちの輝きを未来に伝える」ゼミ

生徒：25名

概要：昨年度に引き続き、各ファミリーがさまざまないのちが輝ける社会、ともに生きる社会を目指し、活動を行った。動物もヒトもその命を精一杯輝かせることができる環境や社会を実現するために、高校生の自分たちにできることを問い、自らの生き方にも迫った。

ファミリー（チーム）での取り組み

テーマ：私たちと野生動物の共存について

取り組み：野生動物と人間の共存が難しくなった昨今、山と人々の暮らしが非常に近い奈良県でも獣害の被害が絶えず、シカやイノシシとの衝突が増えている。昨年度のスタディツアーで出会った「熊本☆農家ハンター」のみなさんの活動と地域を守るという熱い思いに動かされ、自ら生駒市や奈良市の農林課を尋ねるなどした。生駒市で市民農園に被害が出ていることから、その対策として防護柵の設置を手伝った。宇陀市と森商銘木株式会社が行う「かりつなぎ」という、森林を荒らす動物の駆除について知るプログラムを特別に実施していただき、当日の朝霞にかかったシカを止め刺し、解体、そのいのちをいただくところまでを体験させていただいた。個体数調整のために生きたかかった命を駆除しなければならない現実と向き合い、こういう状況を作り上げてしまった私たちはその責任をどう負っていくのか、被害対策だけでなく、今後のヒトとしての生き方を問うことができた。



テーマ：睡眠が脳に与える影響

取り組み：「人の健康」について考える中で、「睡眠と生活の関係性」について探究した。「十分な睡眠時間」「規則正しさ」「安定した眠り」がどのように影響するかについて、モニターを募り、実験を行った。参加者には登校後すぐにある一定のレベルに従って作成した単純な漢字や計算などのチェックテストに答えてもらう他、前日夜の睡眠の状況に関するアンケートに答えてもらう。対象人数が少なく、一定の条件を保つことも難しかったため、新たな問いも生まれたが、再度別の条件で実験を行うなどした。

テーマ：ホッキョクグマと地球温暖化の関連性

取り組み：地球温暖化のアイコンとなっているホッキョクグマを通して、地球温暖化の状況を周知する、温暖化を緩和する行動を起こすための一助とすることを目的として、文献調査をしたり、独立行政法人天王寺動物園を訪問し、ホッキョクグマの観察、担当者にお話を伺うなどした。「Polar Bears International」のHPも参考に現状を学んだ。このHPには子ども向けの学習教材（スライドなど）があったが、日本語版はなかったため、英語のスライドを日本語に直したものを作成した。ホッキョクグマが地球温暖化の現状を訴えるPOPを作成し、トイレの電気を消すことを促すなど、校内でも活動した。

テーマ：奈良県で海を守る

取り組み：「海のゴミを減らし、海の生き物を守ろう」を合言葉に、海のない奈良県で活動を行った。海につながる川の清掃を行いながら、どうすれば川にゴミがなくなるかを考えた。学校近くの「秋篠川源流を愛し育てる会」の活動に参加しながら、活動されているフィールドをお借りして実験・調査を行った。川の清掃に参加し、どのようなゴミが多いかを調べ、ポイ捨てによるゴミを減らすため、根本の原因である「ゴミを捨てる人の心を変える」方法を模索した。目の写真のポスターを貼り、見られていることを意識した場合、人はゴミを捨てなくなる、という仮説を立て、捨てられるゴミの数を調査した。



テーマ：牛乳に関わる命について

取り組み：私たちの命を支える食について考えた。私たちの命は多くの命をいただくことによって成り立っている。残食の多さが取り沙汰されることから、特に牛乳の飲み残しを減らすために、乳牛が育つまでの過程で乳牛が食べる飼料として使われる植物の量を示した。1つの命が育つのに必要とされる植物の量を見える化することでどれだけの植物の命が元になっているかがわかると考えた。奈良市の植村牧場を見学し、いただいた配合飼料の植物の割合からそれぞれの植物の量を計算した。

テーマ：外来種から桜を守れ！

取り組み：特定外来種クビアカツヤカミキリが奈良県でも問題となっている。日本の国花である桜を食害するため、その被害を拡大させないために、奈良県と協力し、秋篠川泉橋北詰周辺の重要監視地点調査を行った。また、被害の拡大を防ぐために外来種を見つければ捕殺するしかない現状にあるが、駆除だけでは解決にならないことにも着目し、本当の共存とは何か、を考え続けた。人が起こした問題であることを周知することなど、自分たちにできることを探った。



テーマ：学びを活かし、森を生かせ！ーボルネオ島の環境問題に対する社会心理学的アプローチ

取り組み：高校1年生で学んだボルネオ島の熱帯雨林の減少と自分たちの日常生活との関係について、知っているのに自分たちは解決しようと行動できているのか、ということに疑問を持った。人は学べば行動に移すのか。学校の手洗い場に皆が学んだ環境に配慮したRSPO認証のハンドソープとそうでないハンドソープを併設し、どちらを使うのかを実験した。学んだことを意識させるPOPを表示すれば使用量に変化はあるのかを半年間にわたり調査した。



テーマ：殺処分をなくすために考えたこと

取り組み：ペットの殺処分をゼロにすることを目指し、日本の各地域の行政の殺処分率、譲渡率などを比較し、殺処分率が低い行政の取り組みなどを調べた。さんてが低いからといって譲渡率が高いとは限らず、関係性を見つけることはできなかったが、譲渡会を実施する団体にボランティアに行く中で、新たな社会全体の問題点を見つけたり、自分たちに見えることを見出したりすることができた。マイクロチップの導入が今後の新たな問題解決の糸口になるのではないかと着目している。

生徒・教員の変容

2年間のゼミ活動を通して、「問題を自分ごとにする」「人に出会う」「生き方を問う（活動する）」を問い続けた。問題を解決するのは簡単ではなく、高校生も大人も悩み続けた2年間であった。探究は「生き方」を探る。壁にぶつかったり、仲間との考え方や温度差に苦悩したり、進んだ道がとんでもなく回り道だったりする。スタディツアーでは未来のために目の前の問題にタックルする大人たちに出会い、彼らに火をつけていただいた。「自分たちが行動しなければ」という意識が芽生え、行動し始めた。そんな彼らの熱意に周囲の大人たちが協力してくださった。常に真剣に問題と向き合い、熱い思いを持ち続けた生徒たちは、この先の見えない世の中も

しっかり歩いていけるにちがいない。
何を大切だと思い、何に価値を見出し、どう生きるか。高校生とともに担当者も悩みながら探究した。「私たちにも答えはわからないが、しっかり悩もう。必ずそばにいるから。」ゼミが始まってしばらくしてから生徒たちに声をかけたのを覚えているが、まさにそんな2年間だった。私たちも生き方を問い直し、彼らの問題を自分ごととして受けとめ、精いっぱい伴走した。



d 高校生国際会議

【高校生運営委員会】

拠点校（本校）と連携校に高校生運営委員会のメンバーを募り、国際会議の運営も高校生が担った。拠点校を中心に、連携校である畝傍高等学校、法隆寺国際高等学校、高取国際高等学校、奈良学園登美ヶ丘高等学校から生徒が参加し、どのような役割が必要であるか、といったところから議論した。また、「持続可能な社会の構築」を目指す国際会議であるために、私たちはどのような姿勢で会を運営し、会を作り上げるのか、などについてもワークを行い、運営スタッフが率先してあるべき姿を共有した。「環境整備」「受付」「ファシリテーター」「広報」「司会」のチームが結成された。「環境整備」は会場の設営やポスター展示、会場転換など、会場の設営を担った。「受付」は来場者の把握、ウェルカムボードの作成、来場者がわかりやすい案内板などを作成し、当日は笑顔で案内をした。

「広報」はチラシやポスターの作成、各会場サイネージ・横断幕（ボード）のデザインを考えた。チームからの提案で、各会場での発表案内とディスカッションで使える英語集を作成し、配布した。「司会」は全体司会と宣言文作成の場面においてのファシリテーターを担った。「ファシリテーター」は各会場においての議論がスムーズに進むことだけでなく、参加者全員が安心・安全に発言できる場づくりを目指し、何度も話し合いを重ね、練習を行った。英語での実施というハードルはあったが、全力を尽くして会を作り上げた。



【概要】

6つのテーマ、5会場に分かれ、「持続可能な社会の構築に向けて」各学校の参加者よりテーマごとの自分たちの取り組みに関する発表が行われた。その後、それぞれの発表で扱われた持続可能性を阻害する要因をフロア全体で共有し、それらの問題点が起こる原因を考えた。各会場ごとにファシリテーター2名と大学生のサポーターが会を進めた。持続不可能な要因を排除し、持続可能な社会を作るために必要なことは何か、高校生の自分たちにできることは何かを議論した。6つの会場から代表を選び、それぞれのディスカッションで話し合った内容を持ち寄り、この会の宣言文を作成した。さまざまな制服の高校生たちが集まり、議論を重ねた。

高校生たちにとっても大人たちにとっても初めての国際会議であった。コロナ禍、英語での開催、ハイブリッド方式とさまざまな困難が立ちちはだかったが、高校生の運営スタッフ、参加者、陰で支えた大人たちにとっても有意義な時間となった。特に準備段階においては誰もが自分ごととして捉え、会に参加する人たちが参加してよかったと思える会を作ろうと前向きであった。準備不足や練習不足、足りないことも多くあり、もっとこうすればよかったという反省は数え切れないが、高校生たちが初めての会を自分たちが作り上げる、という思いを込めた会になった。

運営委員生徒感想（一部抜粋）

- 会議が終わった時に、名古屋国際高校の先生が、「よくここまでスムーズに会議を進められましたね。英語という大きな壁があるけど、笑顔で最後まで挑戦しましたね。ここまで良い会議を作れたのは、本当に沢山準備され練習された事だと思います。本当によく頑張りましたね。こんなに最高の会議に参加できて良かったです。本当にありがとうございました。」と言って下さりました。私は泣きそうになるぐらい、嬉しかったです。本当にここまでやってきて良かった。みんなとがんばれて良かった。悩んだこともしんどかったことも沢山あったけれど、最後まで諦めずに続けて良かった。とても思いました。きてもらった人に笑顔を与えることもできたし、世界について考えることもできたし。本当に良かったです。みんなと会議を作れて幸せでした。もちろん、先輩にも同級生にも、後輩にも沢山助けられたし、沢山話し合ったし、この実行委員がいなければ会議を作ることはできませんでした。だけど何より、松本先生をはじめ沢山の先生方に助けられたからこそ、良い会議を作ることができたと思います。サポートして頂き、円滑に回るように準備等沢山して頂きました。だからこそ、この国際会議がスムーズに進み、無事に国際会議を終える事ができたと思います。本当にありがとうございました。（国際高校）
- これまで、自分の意見を言うのが苦手で、周りの意見に合わせがちで、自分の意見を言わないことが多く、みんなでするような活動には消極的だったのですが、この活動で自分で考え



て行動したり、自分の意見を言えるようになったりして、積極的に動けるようになったと思います。今回の活動でたくさんのはじめてのことに挑戦でき、成長できました。みんなで1つのものを作り上げると言うのがすごく楽しかったです。また参加して今回のリベンジをしたいです。（畝傍高校）

- ・1つの会を開催するのに沢山の労力が必要で、想像以上に大変だということ・役割はいくつもあるけれど、決して1つだけで成り立ってるわけではなく、それぞれの協力や思いやりによって上手く機能しているということ・準備として様々なことを予測していても、やはり本番は臨機応変さが必要ということ・人と協力し、1つの大きなことを成功に収めるのは達成感があって楽しいということ（国際高校）
- 違う学校の人と話すのにめっちゃくちゃ勇気と時間がいって焦ってたけど本番が近づいてくると共に団結して仲良くなってきてなんか人は必ずみんな仲良くなるものなんだなって感じる事ができ、第一回目の国際会議を作り上げたこの努力するってことを学びました！（法隆寺国際高校）
- 去年からの付き合いの子や、中には急遽参加してくれた子もいましたが、短い期間だったけど最高の仲間だと思っています！みんな本当にありがとう！！また機会があったら集まったり遊びに行ったりしたいくらい大好きです!! すぐ近くの学校なので、見かけたら話しかけてね♥♥（奈良学園登美ヶ丘高校）
- みんな本番に向けて、将来に向けて頑張る姿が凄くかっこよかった。努力は大事だなと思った。何事にも全力で取り組んだ。とりあえずやってみようというのがモットーになった。（高取国際高校）



e グローバル探究Ⅲ 論文作成

I. 論文形式

1. はじめに …… 研究動機
2. 序論 …… 目的、先行研究、資料と方法
3. 本論 …… 結果と分析・考察
4. 結論 …… まとめ（要約）、今後の課題
5. おわりに …… 自分自身の変容、これからの生き方など
6. 参考文献・出典・引用

II. 各章を書かせるねらい

・「はじめに・おわりに」は、通常の論文では作成しない部分であるが、国際高校では生徒自身が探究を通じてどのように変容したか、振り返らせることを重視しているため、このような項目を設けた。また、ファミリー（グループ）協働研究を行っているゼミもあり、メンバー個々の成長を振り返らせるねらいもある。

・「序論・本論・結論」については、一般的な論文に必要なリサーチクエスションから研究方法をふまえた探究の手順に準じている。なお、国際高校における探究活動は、生徒個々人がそれぞれその後のキャリアにおいても継続していくことを念頭に置いているため、「結論」部分では、今後取り組んでいく予定のことを明確に記述させた。

III. ファイル管理・提出方法について

- ・ Google classroom を活用し、Google ドキュメントにより論文を作成させる。
- ・ 各ゼミのクラスルーム上で課題としてテンプレートを送信し、編集および提出をさせる。
- ・ クラスルーム上で管理することでオンライン上で、添削や助言を行うことができる。

IV. 要旨作成について

- ・ 以下の項目について、卒業論文の内容に基づいて要点をA41枚にまとめさせた。
目的：序論より、問い・仮説に基づいて、何を解決するか・明らかにするか。
方法：序論より、どのような方法で、探究を行ったか。
結果：本論より、探究の成果、得られた情報や分析した内容のまとめ。
結論：結論より、最初の問い・仮説に対する答えを書いている。

V. 成果と次年度以降への課題

[成果]

- ・ 論文の作成手順や形式、データの管理方法について、大筋について次年度に引き継ぐことができる手引きを作成できた。
- ・ ある程度、生徒に論文の形式や決まりを学ばせることができた。

[課題]

- ・ 特に個人で探究を行わせていたゼミは文章や内容のチェックに膨大な時間を要するため、セルフチェックシートを活用したが、自己評価が甘く、効果が薄かった。論文作成途中から、文章内容に関するセルフチェックおよび相互チェックを行う習慣づけと回数を増やすことで、生徒自身の文章作成能力の向上と教員の負担軽減をすることが必要。
- ・ 1学期は高校生国際会議の準備と平行して論文作成を行うことが難しい状況であった。夏休みは直接指導することが難しく、なかなか作成が進まないのが実態であった。2学期には論文を英語化するためにも10月中頃には本文を完成させなくてはならず、添削も含めてスケジュールがかなりタイトであった。次年度以降は、夏休みの活用方法や、添削の分量を減らすために綿密な事前指導が必要となる。
- ・ 指導教員の教科的特性もあり、文章の内容指導はゼミにより程度に差があった。論文作成指導に関しては、教員研修も行っていく必要がある。

3.2.5 グローバル探究の評価

本校の教育目標は、探究力、創造力、協働力、寛容さ、挑戦力、キャリアデザインカの6つの力を身につけることを教育目標としており、これら6つの力を身につけるためには、課題探究型の学習を進めていくことが必要であると考えます。そのため、学校設定科目「グローバル探究」（全学年週3単位必修）を教育課程の中心に据え、学校全体で取り組みを進めている。「グローバル探究」では、生徒自身と教員が共に毎時間の振り返りを行うことで生徒の成長を見とる。生徒は6つの力を常に意識できるよう、デイリーチェックシートの項目を毎授業ごとに確認し、その時間の自分自身のふりかえりをメモに残す。月に一度、担当者はチェックシートのフィードバックを行う。また、年に6回（学期の始めと終わり）成長チェックシートで生徒が6つの力のうち、今の自分ができている力は何かをチェックする。

【チェックシート】

教員は「評価」とは呼ばず、チェックシートという名称で統一している。生徒が「評価」を意識しすぎず、自分自身の成長を見とれること、チェックの数が増えることによる喜びを感じられることを意識した。また、このチェックシートはACCU「変容を捉え、変容につながる評価のカタチ」

(<https://www.unesco-school.mext.go.jp/wp-content/uploads/2021/03/henyou2021.pdf>) を参考に、ESDの視点と6つの力を統合させた形で作成した。

(https://www.accu.or.jp/cms/wp-content/uploads/2022/03/jissen10_senior.pdf)

2021年度「グローバル探究」セルフチェックシート		実施月 〇 月	
ゼミ	学年・クラス・番号	名前	
	〇 年 〇 組 〇 番		
1. 【今月の目標】グローバル探究で意識して活動したい力を〇で囲みましょう（いくつでもOK）			
「活動チェックシート」や前月のセルフチェックシートを参照しながら考えてみましょう			
探究力 知識を活用し課題を解決する力	創造力 新たなアイデアを生み出す力	協働力 協力・貢献して互いに高め合う力	寛容さ 文化や考えの違いを大切にする力
挑戦力 困難を克服し前進する力	キャリアデザインカ 進路に向けて行動を起こす力		
2. 【各時間における振り返り】自分が発揮できたと思う力とその具体的な場面を書きましょう			
日付	曜日	自分の記録（発揮できた力には〇をつける、いくつでもOK）	
月 日	発揮できた力 どんな場面で 何ができただか その時感じたこと	探 〇 創 〇 協 〇 寛 〇 挑 〇 力 〇	
月 日	発揮できた力 どんな場面で 何ができただか その時感じたこと	探 〇 創 〇 協 〇 寛 〇 挑 〇 力 〇	
月 日	発揮できた力 どんな場面で 何ができただか その時感じたこと	探 〇 創 〇 協 〇 寛 〇 挑 〇 力 〇	
月 日	発揮できた力 どんな場面で 何ができただか その時感じたこと	探 〇 創 〇 協 〇 寛 〇 挑 〇 力 〇	

2021年度 グローバル探究 成長セルフチェックシート		年 組 番号	名前	ゼミ	
ルーブリック		グローバル探究の授業の中で、自分ができたと感じる活動にチェックを入れよう			チェック数
身につけたい力	レベル	レベル内容			
探究力	1	生活や社会について考え、改善したほうが良いと考えられていることがある	<input type="checkbox"/>	積極的に考え、動くことができた	/8
	2	地域や社会で解決したい課題を見つけて、その原因や背景を考察することができる	<input type="checkbox"/>	筋道を立てて考えることができた	
	3	地域や社会のよりよい未来に向けて、改善すべき課題を見つけ、その原因を追究して、未来のあるべき姿を考察することができる	<input type="checkbox"/>	根拠を捉え、考えることができた	
	4	グローバルな視点から、世界的な課題の問題点やより良い未来の理想的な姿を示し、その実行可能性について検討することができる	<input type="checkbox"/>	自分のできることを考え、共有し、伝えることができた	
創造力	1	与えられた情報を整理することができる	<input type="checkbox"/>	情報を取捨選択できた(倫理観を持って情報を取り扱うことができた)	/8
	2	地域や社会の課題について情報を集め、分析・評価しながら改善すべき点を提示できる	<input type="checkbox"/>	情報を読み取ることができた	
	3	地域や社会の課題やその解決のための内容を批判的に思考し、解決に向けた案を提示することができる	<input type="checkbox"/>	さまざまなものの関連性を理解できた	
	4	自己の考えに固執することなく、グローバルな視点から創造的に考え、斬新なアイデアを生み出すことができる	<input type="checkbox"/>	得た情報を生かすことができた	
協働力	1	他者と積極的にコミュニケーションをとることができる	<input type="checkbox"/>	一つの問題に含まれる多様な要素のつながりを理解できた	/8
	2	目標達成のために、集団の中で他者を助けたり、支えたりできる	<input type="checkbox"/>	与えられた課題だけでなく、自分の課題として捉えることができた	
	3	課題解決に向け、集団の中で自己の責任を果たしながら、他者と協力して行動することができる	<input type="checkbox"/>	自己の考えを持ち、伝え合うことができた	
	4	課題解決に向け、対話を通して、自己の主張や他者の意見を調整し、集団として士気を高めることができる	<input type="checkbox"/>	自分の考えをもち、伝え合うことができた	
寛容さ	1	相手の立場や考えを気づかえる	<input type="checkbox"/>	自分の考えをもち、伝え合うことができた	/8
	2	相手の立場や考えを常に想像し、共感することができる	<input type="checkbox"/>	安心・安全の場を作り出すことができた	
	3	文化や考えの違いを相手にもたたくことなく、相手の考えを尊重し、違いを認めようとする意欲と態度を持つことができる	<input type="checkbox"/>	自分の気づきを他者へ反映できた	
	4	自分とは違う意見や考え、経験と共有し、社会をより良くしていくための重要なものと考えられることができる	<input type="checkbox"/>	自分の役割に責任をもって取り組むことができた	

ルーブリック		グローバル探究の授業の中で、自分ができたと感じる活動にチェックを入れよう			チェック数
身につけたい力	レベル	レベル内容			
挑戦力	1	与えられた指示に従い、自分の作業をすることができる	<input type="checkbox"/>	日常の小さな実践を積み重ねていくことができた	/8
	2	指示を待たず、課題を自ら発見し、取り組むことができる	<input type="checkbox"/>	自分で考えて判断できた	
	3	課題に取り組む中で、失敗しても強い意志をもって、新たな挑戦を続けることができる	<input type="checkbox"/>	疑問(問い)を醸成し、問い続けていくことができた	
	4	高い目標や志をもち、困難なことに向き合いながら、意欲的・積極的・継続的に取り組むことができる	<input type="checkbox"/>	判断するために複数の情報から取捨選択し、自らの意思や決断に責任を持つことができた	
キャリアデザイン力	1	自己の適性について考えることができる	<input type="checkbox"/>	困難なことがあっても回復していくとする力(レジリエンス)を持つことができた	/8
	2	自己の適性を理解し、進路に関する情報を自ら集めることができる	<input type="checkbox"/>	どんな環境でも課題を見つけ、解決に向けて取り組むことができた	
	3	希望する進路を実現するために、自己が直面している課題を把握することができる	<input type="checkbox"/>	成功も失敗も、最初から最後まで全て受け入れ、自信をもって発信することができた	
	4	希望する進路を実現するための課題を的確に把握し、解決のために行動を起こすことができる	<input type="checkbox"/>	課題を解決する際に、新たな問題にも気づくことができた	
+αの力	-		<input checked="" type="checkbox"/>	客観的に自分を捉えることができた	* * * * * * * *
	-		<input checked="" type="checkbox"/>	自分がわかっているかどうかを認識できる	
	-		<input checked="" type="checkbox"/>	自分を見つめ、向き合う課題を認識して、自分の気持ちをコントロールできた	
	-		<input checked="" type="checkbox"/>	持続可能なライフスタイルを自分で考えることができた	
	-		<input checked="" type="checkbox"/>	自分と進路とつなげ、課題の要素をきめて検討できた	
	-		<input checked="" type="checkbox"/>	自分の言動を客観視でき、自分で改善することができた	
	-		<input checked="" type="checkbox"/>	課題解決のアイデアやプランを持ち、将来実行しよう計画を立てることができた	
	-		<input checked="" type="checkbox"/>	将来の自分のキャリアに経験や考えを反映して言うことができた	
-	グローバル探究では、これらの方も少し意識してみましょう	<input checked="" type="checkbox"/>	今の自分が立っているところは世界と地続きであることを知っている		
-	どの方も「持続可能な社会」をつくるために欠かせない力であり、これからの未来を生かすために持ち合わせてほしい力です	<input checked="" type="checkbox"/>	一人ひとりが大切な存在であることを実感できている		
-		<input checked="" type="checkbox"/>	不平等な状態に気がつくことができる		
-		<input checked="" type="checkbox"/>	自分と他人の人権を通じた公平性の理解がある		
-		<input checked="" type="checkbox"/>	国際社会とのつながりを意識できる		
-		<input checked="" type="checkbox"/>	その人らしく生きていくための価値、平和を守り続ける大切さを理解している		
-		<input checked="" type="checkbox"/>	「公平」や「平等」に関する歴史的出来事や現代社会の課題への理解ができている		
-		<input checked="" type="checkbox"/>	ころなど、目に見えないものを想像することができる		
-		<input checked="" type="checkbox"/>	「公平」や「平等」に関する知識を得た後に考え、議論していくことができる力がある		

--	--	--	--	--	--

3.2.6 世界の言語 I

a 全体計画（シラバス）

「世界の言語 I」では、1年次に中国語、韓国語、フランス語、ドイツ語、スペイン語の5カ国語を「聞く」「話す」言語活動を中心に8回ずつ学習する。

英語以外の第二外国語の学習は、複数の言語やそれを使用する多様な他者への気づきと寛容な態度の形成、複数言語の比較によるメタ言語能力（自他の言語の相対性、類似性、相違性などを意識化、言語化する能力）の向上、個人の複言語能力の言語レパートリーの拡大といった成果が期待される。

1年次の「世界の言語 I」では、5カ国語を少しずつ学ぶことで、その言語の魅力や楽しさを知り、2年次で学習する言語を決定するためのきっかけとすることを目的としている。考査は実施せず、評価も点数ではなく、文章で行う。言語の違いや特徴はあるが、どの言語においても共通する学習内容は①言語の歴史、②使用地域、③発音・文法の特徴、④数字、⑤文字、⑥方言である。授業の構成は言語によって若干異なるが、概ね以下の通りである。

《授業の構成》

	内容	指導者
第1週（2時間）	挨拶や日常会話	日本人
第2週（2時間）	自己紹介などの対話	日本人
第3週（2時間）	身近な内容について話す	日本人
第4週（2時間）	実践 実際に会話をしてみる 文化について知る	日本人+ネイティブ教員

《年間スケジュール》

	1組	2組	3組	4組	5組
4/15	オリエンテーション（奈良教育大学吉村教授）				
4/20-5/27	フランス語	ドイツ語	中国語	韓国語	スペイン語
6/1-6/24	韓国語	スペイン語	フランス語	ドイツ語	中国語
6/29-9/30	ドイツ語	中国語	韓国語	スペイン語	フランス語
10/5-11/2	スペイン語	フランス語	ドイツ語	中国語	韓国語
11/4-12/2	中国語	韓国語	スペイン語	フランス語	ドイツ語
12/7	これまでの振り返りと言語の選択について（奈良教育大学吉村教授）				
1/13、20、2/3	課題研究	課題研究	課題研究	課題研究	課題研究
1/18、25、2/8	吉村先生の特別講義	吉村先生の特別講義	吉村先生の特別講義	吉村先生の特別講義	吉村先生の特別講義
2/10	手話講座				
2/15	次年度に向けてのオリエンテーション				

各言語は8時間（週2時間×4週間）実施。最終日はネイティブ教員とのTT

b. 3学期の課題研究

デジタルポスターの作成（1月13日、20日、2月3日）

「外国語が話されている国・地域の文化についての理解を深める」「マナーについての表現を調べる中で、これまで学習してきた英語・日本語と違っている点、似ている点などを知る」の2点を目的とし、ポスターの作成に取り組んだ。

ポスター作成時は日本人教員とネイティブ教員の2名で指導にあたった。生徒はインターネットで情報を調べるだけでなく、気になることや、マナーに関する表現を直接ネイティブ教員に尋ねることで、より言語や文化についての知識が深まったと考えられる。



奈良教育大学 吉村雅仁教授による講義（1月18日、25日、2月8日）

奈良教育大学吉村教授と名古屋外国語大学Kevin Ottoson先生にお越しいただき、全3回の講義を受けた。

まず、世界各国のことわざを調べ、日本語・英語のことわざとの類似点や相違点、表現の違いなどを分析した。各国のことわざがどのような価値観をあらわしているかを見たのち、生徒は自分自身のことばで新しいことわざを制作した。

c. 手話講座

2月10日（金）に、奈良県立ろう学校の小林由季先生にお越しいただき、1年生全員を対象に手話講座を行った。世界の言語では、5つの外国語を学んだが、「手話も一つの言語である」という観点から、言語に対する理解を深めるのがねらいである。

まず、聴覚障害についてのお話をしていただいた。聴覚障害者が生活の中で困っていること、どのような工夫をしているか等について話していただき、会話のためには手話が必要であることをお話いただいた。

そして、実際に手話を体験した。基本的な挨拶から始まり、名前の表し方を学習した。

d. 韓国文化体験

1月11日（金）に、本校にて「令和4年度近畿地区英語・国際関係科等設置高等学校校長会 秋季研究協議会」が開催された。その中で公開授業の1つとなったのが、6限目の「世界の言語Ⅰ」であった。当日、韓国語の授業については、奈良韓国教育院の方をお招きし、1年2組の生徒を2つのグループに分け、「韓服（ハンボク）体験」と「テコンドー体験」を実施いただいた。

韓服体験では、生徒は色鮮やかな韓服を着て、礼儀作法も共に学ぶことができた。またテコンドー体験では、どの生徒も生き生きと身体を動かし、足技を中心とした韓国の武道を学

ぶことができた。今回の韓国文化体験が、生徒の言語や言語学習に対する興味をより一層喚起する機会となったようであった。

3.2.7 世界の言語II

a 全体計画

2年次より始まる世界の言語IIでは、それぞれの生徒が選択した言語を1年間継続して学び、基礎的な「読む」「聞く」「書く」「話す」4技能のコミュニケーション能力を身につけるとともに、言語を介して他者と意見交換を交わし、積極的に関わろうとする寛容さや挑戦力を身につけることを目標としている。言語により、細かい達成度は異なるが、共通する点としてCEFRのA1相当を目標とした。各言語共通の4技能の具体的な目標は以下のとおりである。

- ・話すこと：短く、定型的な表現を使い、自分自身の身近なことについて表現する。
- ・聞くこと：身近で日常的な内容や短く簡単な質問や発言を理解する。
- ・書くこと：身近で日常的な事柄について、簡単な語句や文を書くことができる。
- ・読むこと：よく知っている単語や基本表現を用いたテキストを理解できる。

また、学習内容や評価の方法は言語により異なるが、以下にスペイン語の概要を記す。

協働 力					寛容さ・挑戦力
	話すこと	聞くこと	書くこと	読むこと	
<p>【学習内容の概要】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・初級文法、よく使われるフレーズを使い、読み、書き、話す、聞く力の育成 <p>【評価の方法】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ワークシートの取り組み状況 ・授業内テスト ・小テスト 	<p>【学習内容の概要】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日常会話 ・プレゼンテーション <p>【評価の方法】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業中の会話練習(観察) ・インタビューテスト ・プレゼンテーション 	<p>【学習内容の概要】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教室スペイン語 ・身近な話題の聞き方 <p>【評価の方法】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業内テスト ・インタビューテスト 	<p>【学習内容の概要】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分自身や身近なものを紹介する文 <p>【評価の方法】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業内テスト ・ワークシートの取り組み状況 	<p>【学習内容の概要】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教科書で扱っている、日常的なテーマの会話文の読み取り <p>【評価の方法】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業内テスト 	<p>【学習内容の概要】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・クラスメートと日常的なテーマで意見交換をし、多様な意見があることを理解する。 ・スペイン語圏の文化、言語(方言)、価値観を学ぶ <p>【評価の方法】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業中の取り組み(観察) ・ワークシートへの取り組み状況

b 多言語学び合い交流会

2年生の世界の言語IIでは、それぞれの言語に分かれて1年弱、言語や言語圏の文化、文法、音声など、より詳しく実践的に学んだ。前述のとおり、複数の言語を学ぶことはそれを使用する多様な他者への気づきと寛容な態度の形成、複数言語の比較によるメタ言語能力（自他の言語の相対性、類似性、相違性、などを意識化、言語化する能力）の向上、個人の複言語能力の言語レパートリーの拡大といった成果が期待される。

1年間の各言語の学習を振り返り、他の言語を選択している生徒に学びを共有することで、より深い外国語学習の習熟を目指すために、「多言語学び合い交流会」を3学期に実施した。

昨年度は、新型コロナウイルスの感染者急増を背景に、生徒1人ひとりの個人ワークとし、1人2分程度のミニプレゼンテーションの実施に変更したが、今年度は4人～6人程度のグループで、5分ほどのミニワークショップという形で実施することができた。今まで学習してきたことを振り返り、自分が選択した言語の文法、発音、表現、文化、日本語や英語との類似点や相違点など興味深い点や他の言語選択者に伝えたい魅力を考えさせた。また、1グループ5分間の短いワークショップではあるが、ただ単に説明で終わることなく、必要に応じてスライドやペアワーク、グループワークなどを交え、他の人が考えたり、参加者同士でやりとりができる内容にするよう促した。

3年生では選択制になるため、すべての生徒が履修するわけではないが、2年間の中で、「世界の言語」は単に第2外国語の言語能力の向上させるだけでなく、異文化理解や寛容さ・挑戦力など国際高校が目指す、生徒に身につけてほしい能力の向上に貢献できたと考えられる。

3.2.8 世界の言語Ⅲ

3年次より始まる世界の言語Ⅲでは、2年次にそれぞれの生徒が選択した言語を継続して学び、基礎的な「読む」「聞く」「書く」「話す」4技能のコミュニケーション能力を身につけるとともに、言語を介して他者と意見交換を交わし、積極的に関わろうとする寛容さや挑戦力を身につけることを目標としている。言語により、細かい達成度は異なるが、共通する点としてCEFRのA1～A2相当を目標とした。各言語共通の4技能の具体的な目標は以下のとおりである。

- ・ 話すこと：①趣味・部活動などのなじみのあるトピックに関してやりとりができる。
②身近な事柄について複数の文で意見を言うことができる。
- ・ 聞くこと：身の回りの事柄に関連した内容や要点を理解することができる。
- ・ 書くこと：日常的・個人的な内容について手紙、メモ、メッセージなどを書くことができる。
- ・ 読むこと：簡単な語を用いて書かれた人物描写、場所の説明、文化の紹介などの説明文を理解することができる。

3年次では、履修する生徒数も少なくなるため、ペアワークやグループワークなど、より実践的な活動を行うことができた。今年度は3年生でも積極的に海外の高校とのオンライン交流を実施し、普段の授業で学んだことを実践する機会に恵まれた。

学習内容や評価の方法は言語により異なるが、以下にスペイン語の概要を記す。

協働力					寛容さ・挑戦力
	話すこと	聞くこと	書くこと	読むこと	
<p>【学習内容の概要】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・初級文法、よく使われるフレーズを使い、読み、書き、話す、聞く力の育成 <p>【評価の方法】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ワークシートの取り組み状況 ・授業内テスト ・小テスト 	<p>【学習内容の概要】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日常会話 ・プレゼンテーション <p>【評価の方法】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業中の会話練習(観察) ・インタビューテスト ・プレゼンテーション 	<p>【学習内容の概要】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教室スペイン語 ・身近な話題の聞き方 <p>【評価の方法】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業内テスト ・インタビューテスト 	<p>【学習内容の概要】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分自身や身近なものを紹介する文 <p>【評価の方法】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業内テスト ・ワークシートの取り組み状況 	<p>【学習内容の概要】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教科書で扱っている、日常的なテーマの会話文の読み取り <p>【評価の方法】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業内テスト 	<p>【学習内容の概要】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・クラスメートと日常的なテーマで意見交換をし、多様な意見があることを理解する。 ・スペイン語圏の文化、言語(方言)、価値観を学ぶ <p>【評価の方法】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業中の取り組み(観察) ・ワークシートへの取り組み状況

3.2.9 Immersion Science

a. 学習到達目標

英語による「聞くこと」、「読むこと」、「話すこと」及び「書くこと」の言語活動を通して、自然の事物・現象に関わり、科学と数学の見方・考え方を働かせ、見通しをもって観察、実験を行い、自然の事物・現象を科学的に探究し、根拠を示しながら考えや判断についての確かな説明をして他に理解を得るために必要な資質・能力を育成する。

b. 学習方法

- 英語を用いて実験・観察を行う。また、その結果について英語でディスカッションする。内容をまとめて英語で発表することで、海外大学で活用できる思考力と表現力を身につける。
- 英文で書かれた学术论文を読み、その内容を理解する。また、論文内に記された引用文献を読むことで、周辺の知識も得る。読解した学术论文の内容をスライドにまとめ、英語で発表する。英語による質疑応答もおこなうことで、科学の見方、考え方を養う。
- 海外の研究者の講義を英語で受け、その内容についてディスカッションを行うことで、海外大学で活用できるコミュニケーション力を身につける。

c. 年間学習内容

1 学期	Orientation	Immersion Scienceの学習内容の説明。科学を英語で学ぶ意義とは。
	Find Your wonder	校内を散策し、身近にある不思議を見つける。文献を検索して見つけた疑問に対する答えを調べ、発表する。
	Plant Cell	植物細胞を顕微鏡で観察する。与えられた問いから、新たな問いを自らを見つける。
	Eye	ブタの眼球の解剖を行う。問いを立て、その問に対する答えを見つける実験を考え、実施する。
	Reading the Data	統計資料を用いて、データの読み方を理解する。
	海外研究者との交流	7月4日にコロラド州立大学 境放射線保健科学学部 准教授 加藤宝光先生に、対面形式で研究内容の紹介と質疑応答を英語でおこなった。
	大阪公立大学訪問	7月8日に大阪公立大学を訪問し、留学についての意義や日本と海外の違いなどについて、留学生と英語で交流をした。
2 学期	Find Your wonder2	校内を散策し、身近にある不思議を見つける。文献を検索して内容を調べ、発表する。実際にデータを用いて説明することを心がける。
	Slime	ホウ砂とPVAからスライムを作る。スライムの硬さを決める変数を調べるために、適切な実験を考案し、データとしてまとめる。数値で示す意味を理解する。
	Light Speed	光速についての、思考実験を行う。科学技術の可能性と限界を理解する。
	Science Paper	英文で記された専門的な科学論文を読み、その内容をまとめる。
3 学期	Transplanting	ヒトの脳死と臓器移植について考える。科学技術の応用と倫理のバランスについて考える。

d. 生徒の感想

- 普段のただ座って話を聞くスタイルではなく、実験やグループでの話し合いが多かったので楽しく学べました。
- 基本的に「自分で考えて行動」することが多かった授業だったので、自分の授業に対する主体性が伸びたと思います。
- 座学のみでなく、多くの人と会話をを行い、一つの物を導き出すことは高校の授業としては面白く、貴重だと感じた。

3.2.10 英語

a 概要

本校英語科ではそれぞれの学年において以下の科目を設定している。

学年	科目名	単位数	類型
第1学年	総合英語Ⅰ	4	全
	総合英語Ⅱ	2	全
第2学年	総合英語	3	全
	ディベート・ディスカッションⅠ	2	全
	EAPⅠ	2	海外進学コース
第3学年	総合英語	3	全
	ディベート・ディスカッションⅡ	2	全
	エッセイライティング	2	全
	EAPⅡ	4	全

総合英語

1クラスを2つに分けた少人数制で授業を行っている。

4技能をバランス良く学習するために、教科書（Qskills for Success）を中心に授業を進めている。

1年生の総合英語Ⅱはネイティブ教員が担当し、プレゼンテーションやディスカッション、ライティング指導を行っている。

ディベート・ディスカッションⅠ・Ⅱ

1クラスをネイティブ教員、日本人教員のチームティーチングで指導している。

様々なテーマについての個人の経験やグローバルな話題について聞き、それに対して自分の考えを賛成・反対・提案などのスキルを使って話すことを目標としている。授業内ではディベート・ディスカッションだけでなく、個人やグループでのプレゼンテーションを行っている。

EAPⅠ・Ⅱ

海外進学コース選択者を対象として、4技能の更なる向上を目指し、海外の大学での授業の受け方やTOEFLの対策について指導している。また、様々なテーマについてディスカッション、プレゼンテーション、ディベート、スピーチ、エッセイライティングなどを行い、生徒が英語でアウトプットする機会を多く設けている。

エッセイライティング

1クラスを2つに分けた少人数制で授業を行っている。

1学期には英語での論文の書き方を学び、2学期にはグローバル探究で作成した日本語の論文を英語にする指導を行った。

b EAP I (2年生)

週2回 (木曜日・金曜日) 2単位

生徒人数：15人 留学生：5人 計：20人

EAP (English for Academic Purposes)は海外へ進学をしたい生徒のための英語コースです。一年間で英語4技能を鍛えながら、アメリカやイギリスの大学での授業の受け方を学んだり、TOEFLなどの英語テスト対策を行いました。また、海外文化や日々の授業の中で留学生5人との交流も行いました。「教育」、「情報」、「場所」、「生産」のテーマからディスカッション、プレゼンテーション、ディベート、スピーチ、エッセイライティングなど幅広い活動を行いました。

1学期では、「教育」のテーマについて学び、大学で使われる文章の書き方(レポート、雑誌の記事、教科書、講義のスライド、論文)について話しました。「ロールモデル」についてのスピーチ発表では、アイコンタクト、身振り手振りなどのプレゼンテーションスキルを活用しました。Unit1の最後に、推薦書の書き方を学び、生徒が自分の推薦書を書きました。その為に、グループでお互いの推薦書を読みながら、編集の時間も作って、よりよい推薦書を書くことを目指しました。Unit2では、ウェブサイトの特徴を勉強し、1分間でお気に入りのウェブサイトについて発表をしました。夏休みの課題では、生徒が図書室から英語の本を借りて、本を読んでからブックレポートを書きました。

生徒が好きな大学のウェブサイトの情報をスクールタクトに記入し、クラスに発表しました。



Summary

This story is about Chocolate factory's owner Willy Wonka and five children's adventure in chocolate factory. There are lot of temptations in the factory and children have overcome temptations.

The image shows the cover of the book 'Charlie and the Chocolate Factory' by Roald Dahl. The cover features the title in a stylized font and an illustration of the main characters.

Conclusion

I read most of Roald Dahl's books but this "Charlie and the chocolate factory" is my favorite story. I recommend it very much!!

The image shows a collection of Roald Dahl's books, including 'Charlie and the Chocolate Factory', 'Matilda', 'The BFG', and 'Willy Wonka & the Chocolate Factory'.

生徒がスクールタクトでスライドを作り、2学期の最初の授業で夏休み中に読んだ本について発表しました。

2学期では、生徒が場所、宿泊施設、スポーツ施設、交通機関などのことを考えながら、グループでオリンピック候補国や市の発表をしました。グループでipadを使ってオリンピックに必要なことを調べながら、比較級・最上級の文法を使った発表をしました。発表した後、全員で投票し、選ばれた候補場所にメダルを贈りました。



Basic information	
Age since 1869	
Population 1,952,000	
Average temperature of August 18-26 °C	
Sport facility: Maruyama Stadium	
Transport link: New Chitose Airport	
Ship	
Three subway lines (the Namboku Line, Tozai Line, and Toho Line)	
Shiden (streetcar)	
Bus	

生徒が作成したオリンピック発表スライド

2学期の後半では、海外の大学に関する図や表を分析し、「Similarly」「On the other hand,」などの使った用語で比較論文を書きました。

	University 1 UNIVERSITY OF MALAYA (UM)	University 2 TAYLOR'S UNIVERSITY
location 	Kuala Lumpur	Subang Jaya, Selangor
age 	1949 (73 years)	1969 (53 years)
number of students 	30,568	15,000 ~ 19,999
costs 	Bachelors: RM 16,600 / \$3,600 / ¥ 514,000 Masters: RM 19,900 / \$4,300 / ¥ 616,200	Foundation : RM5,000 ~ RM 23,000 / \$1,100 ~ \$5,000 / ¥153,000 ~ ¥704,000
travel links 	International Airport (Sultan Abdul Aziz Shah Airport)	International Airport (Kuala Lumpur International Airport)

生徒が2つの好きな大学を調べ、スクールタクトに図を作りました。グループでこの表を使ってディスカッションをしました。

3学期では、図を見ながら、様々な国の生産物と数字の使い方について勉強しました。percent、length、numbersなどの表し方を考えて、生徒がオリジナル図を作り、グループで発表しました。最後に、グループでお気に入りの会社を選び、生産物、売り上げ、歴史などを発表しました。




Unit 4 Production

P.50 (3) Work in groups.

- Think of two more countries in these regions.
- Decide which countries/ regions are famous for certain products.





Country 1 Canada	Country 2 Australia
famous for... Maple syrup Salmon 	famous for... Meat pie Tim Tam  

スクールタクトのスライドに二つの国の生産物を書いて、グループでディスカッションを行いました。

Slide content: Fairtrade Discussion (P.55)

Question: Do you think the Fairtrade system is a good idea? Why or why not?

Good Idea 😊	Bad Idea ☹️

First opinion: _____

Due date: Thursday, January 17th

The Unfinished Fairtrade System

The text from 2011 says that The Fairtrade label means that the food producers receive a fair price for their products. I think that it is a good idea for food producers to get fair incomes, however I suppose that these products do not always sell well and make a lot of profits every time. First of all, the price of Fairtrade products is never lower than the world market price and it is usually higher. For example, the price of The Fairtrade chocolate that is sold in Japan is three times higher than normal one. I asked my mother which chocolate would she buy if there were an expensive one and a cheaper one at the supermarket and she responded that she would buy a cheaper one. Consumers seek cheaper products. I guess that high price products tend to remain unsold in Japan. Also, if The Fairtrade products would not be sold, farmers and food producers would not gain extra payments. The text says The Fairtrade minimum price for cocoa is \$ 1,600/tonne. In addition, producers receive a Fairtrade premium of \$ 150/tonne. If The Fairtrade products would not sell at all, producers could not invest this money. They will not be able to use this system well. Overall, this system would cause twice as much

生徒がフェアトレードの良いところや悪いところのディベートを行った後、エッセイを書きました。

冬休みの課題として、SNSの良い点、悪い点を考えながら、ウェブサイトの記事を比較するエッセイを書きました。

The increase of SNS users

I think more people use SNS for news now compared to 2015. The article shows that the majority of users over 35 answered that SNS is not the important way to get news, while nearly half of those under 35 said they're the most important or an important way to get news. I believe this difference in number is from the difference in the way to perceive the Internet. Young people are familiar with technology and how to use SNS as a news source because they have been using SNS since they were little. But in contrast, most seniors are accustomed to using newspapers, news on TV, or radio, because these things existed in their childhoods. However, with the growth of technology and the prevalence of SNS, more and more people started to use smartphones these days, and also SNS users over 35 have dramatically increased. A data from ICT Research & Consulting Inc. shows that about 1,800,000 people created their SNS account between 2015 to 2022. What this means is that more people both juniors and seniors nowadays are accustomed to using SNS, and it is becoming even more a big part of news sources.

c EAP II (3年生)

週3回(月・水・木曜日) 3単位

留学した生徒: 2人 留学中: 1人 帰国生: 1人

生徒人数(留学中の生徒を含む): 14人

English for Academic Purposes 2 is the continuation of E.A.P. 1, wherein students learn skills at an advanced enough level to prepare them for possibly attending universities abroad. These skills include, but are not limited to taking notes, giving presentations, writing essays, listening for key information during a lecture, participating in group discussions, as well as collaborating with their peers. All of these skills and more are honed while attempting to learn about collegiate level subjects such as marketing, sociology, science, media studies, and linguistics.



At the beginning, about half of the students felt uneasy about the new forms of formative assessment. These assessments consisted of vocabulary quizzes where students read the definition of a word and filled in the necessary terminology, as well as times when students were given the term and had to write the definition. Students also participated in a graded Discussion Test, that was used to assess if they were able to use the discussion strategies mentioned in the section. For



example, phrases used for entering a discussion, contributing to a discussion, interrupting and asking for clarification, as well as terminology used to help a group come to a consensus. Lastly, with regards to the unit test, these

consisted of a video lecture that tested the students' ability to use listening strategies to gather information. The video would only be played once or twice, and after that, the remainder of the test would assess whether the students were able to comprehend key concepts from the unit.

Finally, as a form of summative assessment, students were informed at the beginning of the school year that they would have to plan, prepare, and execute a group presentation about the topic of English education in Japan, near the end of their last term. Although



the presentations were initially planned to take place in front of teachers within the school, a great opportunity presented itself as an English Teachers Conference on November 11th, 2023. As our schools' principal was the head of the Teacher's Association within our region, our school hosted the event, and we were able to host nearly 100 teachers during the event. In the end, not only did the students plan, prepare, and execute their group project/presentation exceedingly well, many of the teachers that observed their presentations and participated in the Q&A, were pleased and impressed by our students' English fluency and presentation capabilities. It was through the students' final presentation that it was evident that they had grown throughout the course, and they are able to go out into society to perform, present, and discuss a variety of different topics in English, well-above most English standards.

3.3 授業外の学び

3.3.1 イングリッシュイマージョン

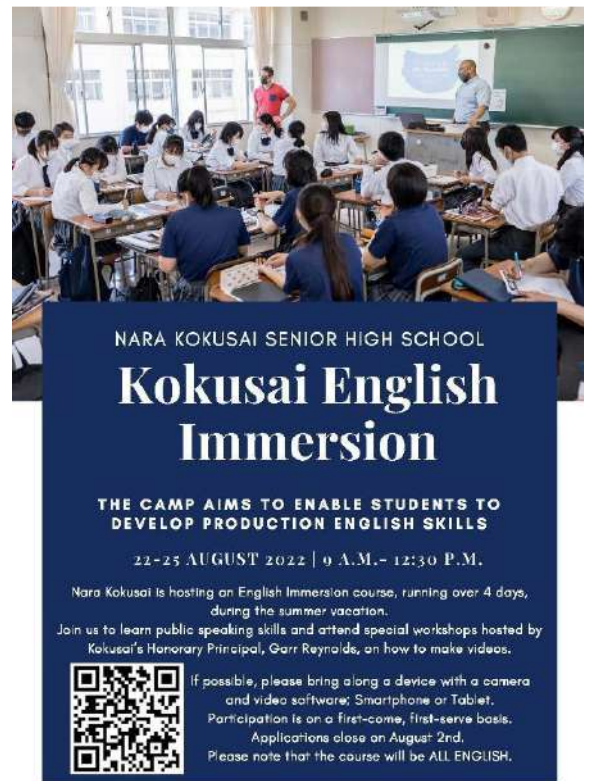
日付 令和4年、8月22日～25日（9時～12時30分まで；）

他校の生徒：1名 留学生：4名 3年生：1名 2年生：4名 1年生：5名

参加者（合計）：15名

As our school entered its first year as a completed school (with first, second, and third year students), we wanted to start things out by hosting an English camp that incorporated our previous Summer Seminar program with Professor Garr Reynolds.

This event would cater to students that were interested in being immersed in an all-English speaking environment, as well as assist in developing their speaking and presentation/production skills. The Board of Education even offered to contact our local WWL schools (*Nara Kokusai, Nara SHS, Unebi SHS, Seisho SHS, Takatori Kokusai, Horyuji Kokusai, Nara Women's University Secondary School, and Nara Gakuen Tomigaoka Junior & Senior High School*) in order to share and collaborate resources with any other interested students and parties.



The participants consisted of students from every grade, including exchange students, and one student from Takatori Kokusai High School. As a means to ensure that the student from another school didn't feel out of place, her school's ALT (assistant language teacher) was invited to be one of three ALTs selected to assist in the event. There was also full participation from the foreign exchange

students, which helped to add to not only assist in the diversity of the participants, but also the English level and capabilities, as well.

The scheduled event took place over four (half) days. Each day began with a morning meeting with all of the participants, three 40-minute workshops, a refreshment break, and then a final gathering at the end of the day. For the workshops, students were split into two separate classrooms to create smaller class sizes, as well as to divide students up by English ability.

Unlike all of the other workshop days, the entire morning of the third day was dedicated to Professor Reynolds' seminar on video production skills. Students not-only learned about the basics of all of the work that goes into the making and planning of a video, but students were also given



hands-on experience by working in groups and applying everything they learned by creating a 1-minute video that showcased their school.

Lastly, on the final day of the program, students revealed the culmination of what they learned in their workshops through solo presentations and an original group skit. After several public speaking workshops, students are asked to give a

presentation on any topic of their choosing (preferably with visuals) with a maximum time limit of 4 minutes.

Later that same day, students then performed their skits with their



classmates, which were about 8-10 minutes long.

In the end, it was impressive to watch the students let their creative juices flow through their presentations, skits, as well as interactions with one another. At the very end of the event, all participants were presented with a Certificate of Completion for all of their hard work and dedication. Overall, this was a great opportunity for all of the students involved. They not only fortified the bonds that they already had with their classmates, but they were also able to work alongside of their peers, their juniors, teachers, get to know their fellow exchange students, as well as befriended an English-learning peer from another school.



For more details about the logistics of this event, please find the information via the link provided:

<https://docs.google.com/document/d/1J8ZCBG3ckdPVN-2WO3Gcb8B6UEy0AADkvv2df2mmupE/edit?usp=sharing>

3.3.2 国際教養大学（AIU）イングリッシュビレッジプログラム

目的：国際教養大学（AIU）で実施される、中高生を対象とした英語で英語を学ぶ研修プログラム「English Village」に参加し、教室での講義や、AIUの留学生や学生との交流を通して実践的な英語力を養う。

日時：令和5年3月24日（金）から3月26日（日）

場所：国際教養大学（秋田県秋田市雄和椿川字奥椿岱）

参加者：1.2年生32名

プログラム内容：

Day1

- ・ Activity1: Icebreaking Activities 「ウォームアップしよう」
- ・ Activity2: Guess What 「英語で説明してみよう」
- ・ Activity3: Say It in English 「英語で言ってみよう」
- ・ Lecture1: Learn to read IPA in 75 minutes 「75分で発音記号をマスター」

Day2

- ・ Activity4: Health Volleyball 「ヘルスバレーボール」
- ・ Activity5: A Quick Look at QuickLook 「QuickLookを使いこなそう」
- ・ Activity6: Ask Plus Answer Plus 「一言添えて広がる英会話」
- ・ Activity7: Interview with Conversation Partners 「留学生にインタビューしよう」
- ・ Activity8: Presentation Skills 「プレゼンはこうやろう」
- ・ Activity9: Keys to Keep Your Presentation Going
「キーワードでスムーズなプレゼンテーション」
- ・ Activity10: Preparation for the Final Presentations 「プレゼンテーション準備」

Day3

- ・ Activity11: Preparation for the Final Presentations 「プレゼンテーション準備」
- ・ Activity12: Final Presentations with Q&A 「プレゼンテーション」

参加した生徒の感想

・ 私は元々英語を覚えて表現することが苦手で、このEnglish Villageに参加するにあたり、良いプレゼンができるか凄く不安でした。しかし、AIU生に文章の簡易化する力や発音、より分かりやすく興味を惹きやすくするプレゼンの仕方を教わり、これまでになく笑顔で楽しんでそしてミスを恐れることなくプレゼンをすることができました。『No mistake No improvement』そして『変身して新しい自分を見つけ出す』この言葉は私が自信を失いそうになったとき、不安になったとき、一生助けてくれる言葉だと確信しています。AIU生の本気の授業、それだけでなく沢山の本気の催し物を本気で楽しんでいる姿が本当にかっこよかったです。3日間という本当に短い時間ではありましたが、英語のスキルだけでなく、人間的にすごく大切なことを学ばされました。参加して本当に良かったです。これからもこのEnglish Villageでの経験を活かし、AIU生のような素敵で刺激的な人間になりたいと思います！！

・ 高校に入ってから周りの英語力の高さについていけず、英語を学ぶことが嫌いになってしまっていたのですが、今回のEVで久しぶりにまた英語を学ぶことを楽しいと感じられました。どの講義もすごく分かりやすくて為になって、これからもこのEVで学んだことを使っていこうと思いました。本当に勇気を出してこのEVに参加して良かったです。

・ 自分は英語で話すことに抵抗は無かったけれども「頭の中では間違えたらどうしよう」「どういう風に答えたら良いだろう」などいつも緊張感を持っていました。しかし、今回のEnglish Villageでは「いっぱいミスをしよう！」と言ってもらったり、発表する時に間違っ

てしまっても「ナイストライ！」と沢山言ってもらえたので積極的に発言をする事に達成感を感じました。また、グループの中に留学生が居たのでネイティブスピーカーとすぐ話せる環境にあったので自分の中でもそれが大きく、完璧ではないけれども沢山話す事ができました。活動中に分からない事があってもアドバイザーの方に優しく教えてもらったのでアクティビティーなどグループでの活動でも、より自信を持つ事ができました。短い時間でプレゼンを作って、覚えて、発表するという事に最初は不安を感じていたけれど、グループで協力しながら進めていく事ができたのでチームワークが増していったように感じました。

・授業に多くの工夫がされていて、どうしたら私たちが楽しんで学べるかをすごく考えてくれてるなあと思いました！学生の方々は本当に明るくてコミュニケーション力があって、自分から話しかけることに緊張を感じなかったです！時には友達のように話せたり、時にはプレゼン作成を手伝ってくれたり、本当に素敵な人柄の方々ばかりだなあと思いました。帰るのが寂しかったです。ここで習得した英語力を今後活かしていきたいと思います。本当に3日間ありがとうございました！

・どんなことをするのか正直あまり知らずに始まったEnglish Village。こんなに濃い三日間になって、心の底から尊敬できるような人に出会えるなんて想像していませんでした。アクティビティーが始まった瞬間からまるで以前から知っているような距離感で話してくれてすぐに絆が生まれました。ひとつひとつの活動が普段している英語の授業とは真逆で、文法や単語を新しく学ぶんじゃなくて今の自分の力でどこまでトライできるかというのが驚きでした。勇気を出してみたら、今の自分の英語力をここまでレベルアップすることができるのだなと、厚い殻を破れた気がしました。キラキラ輝いて、今まで出会った人の中で一番素敵な人たちでした。あっという間の3日間でまだ夢のようです。今の私の夢はADさんみたいになることです。

・とっても楽しかったです！！オンラインの時も楽しかったから絶対に楽しいだろうと思っていたけれどその予想を超えてとても楽しかったです！！しかも、滅多にしない人前で話すことが出来て自分としてもとても成長できたと感じています。また、30人近くの人の中から自分を選んでいただいて人前でスピーチをしました。その経験は自分から進んではしないものだったのでとても経験として良いものになりました。また、大学スタッフのみなさんがとても優しく自分の素で、たくさんお話することが出来ました。ありがとうございました。大学スタッフの方たちが戸惑って居たら声をかけてくれたり、とても優しく接して下さって嬉しかったです。大学スタッフのみなさんが恋しくて今すぐにでも秋田に戻りたいぐらいです。でも、このEnglish Villageをうけて、まだ数日ですが、人前で喋ることが頑張れたからなんでもできる！というふうに考えてなんでも頑張れるようになりました。これは大学スタッフの皆さんのおかげです。本当にありがとうございました。



3.3.3 立命館アジア太平洋大学（APU）異文化理解研修

目的：立命館アジア太平洋大学は、学生の約半数が約90か国・地域から集まる国際的環境が特色の大学である。国際学生との交流を通し、異文化理解を深め、地球的な課題について英語で協議する力を身に付ける。

日時：令和4年11月16日（水）から11月18日（金）

場所：立命館アジア太平洋大学（大分県別府市十文字原1-1）

参加者：2年生14名

実施内容

- ・異文化理解・交流研修
 - 奈良県および国際高校の紹介
 - 国際学生の生活、出身国の文化を知る
 - 質疑応答
- ・「持続可能な社会を目指して」発表
 - グローバル探究ゼミ内容、テーマ内容発表
 - 質疑応答

研修時間内は、全て英語でコミュニケーションをとる。

生徒感想（抜粋）

- APUの国際学生と交流をして、文法が間違えていても、しっかりと相手に伝えることができるかと改めて感じることができた。話す大切さを改めて感じることができたプログラムだった。
- 一番印象に残ったのは日本のたこ焼きに似た食べ物がミャンマーにもあったことです！ミャンマーについて初めて色々知りもっと英語で気になることを聞いてみたいと思えたことが自分の中での1番大きな成長だったかなと思います。
- 自分のゼミの発表での質問で、アジア地域の神様についていいことを聞くことができました。例えば、タイでは、日本と一緒に仏教文化が広がっているけど、日本の日本仏教とは違い、1柱の神様を信じていて、友達によって、違う神様を信じている人もいることがわかりました。
- 様々な国の国際学生にプレゼンをして、グローバル探究の事について説明してそれぞれの意見をもらうことができるととても貴重な体験になった。
- 今まで、「文化が違うと自分の当たり前は相手にとって当たり前では無い」と意識して外国の方と接する事が多かったのですが、今回の研修で凄く親切にして頂いて「人間として大切な部分は文化が違って相手にも伝わらんだ」ということを感じました。
- 臓器移植をすることが良いとされていて当たり前な国もあると聞きました。日本ではまず臓器移植についての意識がとっても低いのでそこを改善していけるといいなと思いました。
- 女性が幸せに働ける環境づくりについて、ミャンマーでも女性が幸せに働けるような政策はあるらしいが、日本と同じで、女性の給料は男性よりも低く、働きにくいことを知った。ミャンマーでは女性全員働いている訳ではなく、8割が外へ働きにいったいて、2割は専業主婦をしていることもわかった。
- グローバル探究の話をしました。そのときに国際学生に言われたのはアイコンタクトの重要性です。目を見るのが嫌な場合や目を見るのがあまり好きじゃない人は頭を見るのも良いと言うのも教えてもらいました。プレゼンは相手との対話なのでわかってもらいやすいようにジェスチャーや身振り手振りで伝えるのも必要と言われました。
- 英語を話せたらこんなにも楽しいんだとかたくさんの人とコミュニケーションをとれることってやっぱりいいなと思えたので良かったです。

- 日本文化に興味を持っているAPU国際生が多く、プレゼンを通して奈良に興味を持ってくださり、「行きたい!!!」と言って頂けたプレゼンをすることができてよかったです。
- さまざまな国の学生がいるからこそ、自分がこれまで知らなかったことを学ぶことができて、良い体験になった。カフェテリアでムスリム対応のタイカレーや、茄子の揚げだしなど色々な文化を体験することができた。
- 英語だけでディスカッションをする場面は今まで体験したことがなかったので、英語で意見を聴き英語で意見を言えたことが自信に繋がりました。
- 意外と自分って話せるんだなと分かり自信と英語を学ぶモチベーションが上がり、やっぱり将来は、留学や、せっかくなら英語、中国語を使った仕事をしてみたいので、これからの授業の受け方をもっと大切にしようと思いました。
- 国際学生は旅館でアルバイトをされていて、その際、ふぐの「あら」というワードの意味がずっと分からなかったけど今あなたが英語で教えてくれたおかげでやっと分かりました!とってくださいました。その時、自分の探究が他の人の勉強、知識に繋がったような気がしてとても嬉しかったです。
- 1番嬉しかったのは、中国人のアンドレスさんに中国語で自己紹介して、通じたことだった。APUに来る前から、中国人の方がいたら自己紹介しようと思っていたので、実際にできて、わかってもらえてすごく嬉しかった。
- プレゼンをすごく真剣に聞いてくれて、相槌をたくさん打ってくれて、不安にならず、すごくプレゼンしやすかった。プレゼンのアドバイスの丁寧さ、正確さ、わかりやすさに言葉が出ないくらいすごいと感じた。



3.3.4 大阪公立大学との連携 プログラミング講座

- 1、概要：情報Ⅰの授業において二学期からプログラミングの分野が扱われるため、プログラミングに興味のある生徒を募って夏休みに講座を行った。
- 2、講師：大阪公立大学太田正哉先生
大阪公立大学大学院学生二名
- 3、日時：令和4年8月3日（水）、5日（金）、8日（月）
13時～16時
- 4、場所：本校ICTルーム
- 5、参加者：一年生8名
- 6、生徒の感想：
 - ・難しかったけど、とても楽しくて勉強になりました。自分の力で何かを生み出すということの楽しさを学びました。貴重なお時間をいただきありがとうございました。
 - ・興味があったので楽しくできました。難しいものも時間を掛けたら理解できました。来年もあれば参加してみたいです。
 - ・一日しか参加出来なかったのですが、とても楽しかったです。元々プログラミングには興味があったので、学べて嬉しかったです。より「情報」について学びたいと思いました。大学でも情報を学びたいと改めて思いました。



3.3.5 ESD旭山動物園研修

【8月9日】

- ・ 8:20 関西国際空港集合
- ・ 15:00 ホテルチェックイン
- ・ 15:30 ホテル玄関集合、解散 旭川市内自由散策
- ・ 20:00 打ち合わせ

【8月10日】

- ・ 8:50 朝食を済ませて集合
- ・ 9:20 路線バスで出発
- ・ 10:00 旭川市旭山動物園到着
坂東園長と佐賀さん（スタッフ）に迎えていただく
- ・ こども牧場：蚕の展示とコットンプロジェクト
蚕のいのちと私たちの衣服
蚕・家畜・いのち
蚕の繭から糸を取る体験
- ・ エゾヒグマ館：知床財団との協力、エゾヒグマ館で伝えたいこと（佐賀さん案内）
とんこが伝える共存
知床財団との共同展示
- ・ 動物園自由散策
- ・ オランウータンもぐもぐタイム：オランウータンの生態・特徴
オランウータンのふるさと、ボルネオで起きていること
私たちにできること
オランウータンの空中散歩見学
- ・ 飼育スタッフの海外経験のお話：大河原沙織さん（青年海外協力隊でペルーへ、小中学校で環境教育）
フィジーへの語学留学体験
ペルーでの環境教育、本当に現地で必要な支援とは
- ・ 旭山動物園の環境教育（旭川市の小学校でのボルネオ環境教育）：
佐賀さん（教育普及担当）
旭川動物園の環境教育の一環として、ボルネオの森と私たちの暮らしをつなぐ小学校での取り組みと、学習効果
- ・ カバ館バックヤードツアー
- ・ 夜の動物園自由散策 20:30 こども牧場集合、佐賀さんのまとめ、記念写真
21:10旭山動物園発路線バスでホテルへ



【11日】

- ・ 8:50 朝食を済ませて集合
- ・ 9:10 路線バスで出発
- ・ 10:00 旭山動物園到着
 - ・ 「ととりの森」みんなで散策
 - ・ 「カバ館」・ダチョウの親子みんなで見学
 - ・ 自由散策・昼食
- ・ 13:00 坂東園長と合流、園のコンセプトやそれぞれの施設の説明
 - ・ おらんうーたん館：「ボルネオへの恩返しプロジェクト」のお話
動物たちの能力を活かした展示
旭山動物園が展示を通して伝えたいこと 坂東園長
 - ・ えぞひぐま館：ヒグマとヒトの衝突の現状、とんこ（ヒグマの名前）が伝える現状
知床財団との関わり、動物園の役割
 - ・ シマフクロウ：シマフクロウを絶滅させないために、巣箱の取り組み、ヒトがどうかかわるか、シマフクロウの生態
 - ・ シンリンオオカミ：日本で人間が初めて絶滅させた生き物、オオカミ
 - ・ レッサーパンダ：身体能力を活かした展示
- ・ 16:00 「保全」に関心があり、ボルネオ島でボランティアを経験して、旭山動物園に
来た獣医師篠原さんのお話、マレーシアでのボランティア、高校時代の進路選
択と受験勉強、旭山動物園での仕事 について
坂東園長・篠原さん・マツモト・高校生の対談（質疑応答）？
私たちが保全に関わる意味、何を大切だと思い、何に価値を見出し、どう生き
るか
- ・ 18:00 自由散策
- ・ 20:00 キリンのナイトウォッチング 坂東園長
- ・ 20:30 オオカミの遠吠え 坂東園長、まとめ
- ・ 21:10 旭山動物園発路線バスでホテルへ



【12日】

- ・ 9:30 ホテルチェックアウト
- ・ 9:45 空港バスで旭川空港へ
- ・ 10:15 空港でふりかえりと今後の打ち合わせ
- ・ 17:00 伊丹空港で1年生保護者と帰宅、3年生はそれぞれ空港バスで帰路に

全行程無事終了しました。

今回は旭山動物園のスタッフの皆さまにとっても丁寧に、親切にプログラムを進めていただくことができました。若いスタッフ（海外研修やボランティアを経験した）のお話を聞いたことも、進路を考える3年生にとってはとても良い経験になったと思います。

ボルネオのプログラムを経験している生徒たちはオランウータンを見たのも初めてで、スタッフのお話や園長の説明にもとても熱心でした。共同開発中の分断ゲームについては、関西の動物園でもぜひ実施したいと計画を進める予定です。その際にはBCTJの協力のもと、佐賀さんにも来ていただくことになっています。ボルネオに何か恩返しをしたいという生徒たちが作成したステッカーについても、9月に動物園で実施する環境保全のイベントで扱っていただけるというお話いただくことができました。

また、GCCでコットンと衣服について学習していたこともあり、蚕の展示についてもお話いただき、生徒たちはとても興味を持っていました。私たちが毎日着ている衣服が何でできていて、どのようにして作られているのか、はとても興味深く、今後も協働で学びを進めていこうというお話もさせていただきました。

どの場面においても生徒たちは（特に3年生は）とても熱心に質問したり、話を聞いたりしていました。スタッフの皆さんも丁寧に答えてくださいました。坂東園長のお話はどれをとってもとても心に響く、私たちの生き方につながるお話で、生徒は動物園という場所への考え方が180度変わった、いろいろ考えた、と話してくれました。

【参加生徒感想】

(1)

北海道フロンティアリーダー養成アカデミーで分断ゲームを初めて、国際高校生以外に行きました。オンラインという形での実施も初めてで、とても戸惑いましたが、どんな形でも自分たちが作った「分断ゲーム」があればボルネオのことを自分ごととして理解してもらえることができると感じました。



コットンプロジェクト繋がりで、蚕の飼育をみさせてもらいました。人間がいないと生きられない生物になった蚕から、恩恵を受けながら生活していることに心を打たれました。今では、蚕の需要が低くなりほとんど飼育されていないにしろ、衣服や日常で使う布が当たり前でないことに気付かされました。

エゾヒグマ館では、新しい学びができました。旭山での野生動物との関係性は奈良での野生動物との関係性と似通っている部分がありました。私は、動物との共存を考えたときに動物園のように動物と人間が当たり前と一緒にいるものを想像していましたが、本当は野生生物との共存はどこに一線を引くかであって人間の生活圏と動物の生活圏をしっかりと棲み分けてお互いが干渉しないのがいいのではないかと考え始めました。

佐賀さんのガイドのもと、カバ舎のバックヤードを案内してもらったとき、本当に生活してる！とワクワクしました。イメージとしては、芸能人の生活をテレビの外でみたような感じです。カバが使っているプールに入ってみたとき、下り坂が凸凹していることに気づき尋ねたところ、カバが陸に上がってくるときに足を引っ掛けるためだそうで、人間でいう階段のようなものだそうです。こういったことを聞くとやっぱり動物もひとつの命であり、生きているものなんだなと思いました。

そして、お目当てのボルネオオランウータンは、ようやく自分が守っていかうと活動していたものを見れて、とても感動的でした。坂東園長のお話の中で、ボルネオオランウータンは動物園にはいて、野生にはいなくなる未来がもうすぐそこまできている存在であることを知り、ものすごく申し訳ない気持ちになりました。私たちの幸せで快適な生活の裏には、動物の絶滅がある。改めて、誰かの恩恵を受けながら生活していることを考えさせられました。旭山で行われている動物保全の取り組みは、今まで動物と共生してきた歴史はもちろん影響していると思うが、旭山動物園の影響も大きいと思う。研修を通して、今も大切だけどそれ以上にこれからどう社会を続けていくかを改めて知ることができた。国際高校も奈良県で、旭山動物園のような存在にして行きたいです。



高校生活3年間を通して、ボルネオ島の探究活動を行ってきました。写真や動画ではなく、動物園で生きている動物を見て、私たちが動物のために環境保全を行う意味というものを肌で感じる事ができました。2日目に職員の方からお話のなかで「SDGsは社会貢献としてではなく責任としてやっていく」とおっしゃっていました。動物のことだけでなく、私たちが生活する社会には多くの課題が存在して、一つでも多くのことを解決するためには社会に生きる「責任」を強く持つことが大切であると思います。

(2)

北海道フロンティア養成アカデミーでは、分断ゲームを使用して私達が学んできたボルネオに関する知識や課題を楽しんでもらいながら広めることが出来たのではないかと思います。「知ること」はとても重要なことだと探究をしていく中で感じる場面が沢山あるので、北海道の学生さん達



に知識をインプットしてもらいつつ、私達もアウトプット出来たいいい機会になったと思います。

それから旭山動物園。私自身、動物園に足を運ぶのはとても久しぶりだったのですが、本当にどれだけ見ても飽きなかったです。動物達も私たち人間と同じように生きていますから、全く同じ動きというのは絶対にあり得ないことです。そこに可愛らしさと命を感じました。動物達が展示されている場所には、その動物についての知識や、私達が動物の為に出来ることが書かれていたり、時には動物の骨格標本や足形が飾られていることもありました。動物達に癒されるだけでなく、沢山の動物・生物達について知ることが出来たと思います。

蚕についてのお話も興味深かったです。個人的には蚕は成虫になっても空を飛ぶことが出来ないというのが1番衝撃的でした。蚕は人間が改良して生み出された生き物で、一生は約50日とのこと。豚や牛や魚など、私達が命を頂いている生き物は沢山いますが、どこかやるせない気持ちになります。また保全活動や海外青年協力隊への参加などの経験をされていて、自分自身の芯を持って活動されている方々のお話を聞くことが出来たのも凄く良い経験だったと思います。普段は学校やオンライン学習会など比較的小さなコミュニティの中で、同じように世界の課題について考え取り組む仲間たちと活動することが多いです。時々外部の方達と意見交換をしたり私たちの持つ知識を広めたりということもありますが、中々同じ様に世界の課題等について取り組んでいる方のお話を生で聞く機会というのはありませんでした。でも今回直接お話を聞くことが出来て、私が大学生、社会人になっても、もっともっと沢山の経験や活動をしていきたいと更に思えました。



(3)

授業で習った内容よりもっと深いことについて知りたかったので、参加しました。特に授業でオンラインで旭山動物園と繋がって、お客さんの真上を渡っているオランウータンを見た時、生で見たいなーと感じました。また、私自身、世界の問題や人権問題などに興味があるので、行けるなら行ってみたい！！と感じたからです。旭山動物園に行って、自分がすごく小さく感じました。勉強をやりたくない、と思うことがあるけれど、そう思うことができるのは人間中心の世界だからなのだろうなと思います。ヒグマのところで説明を聞いたときに「子供の頃、親は人間に殺された。」と話されていました。すごく悲しかったです。それが人間のことだったら、大事件となりテレビニュースになると思います。でも、それが動物の世界では普通に起きていて、犯人は人間だと思うと、同じ人間として悲しくなり、恥ずかしいなと思います。ヒグマがそんな人間と毎日顔を合わせていると考えると、私がヒグマだったら人間が怖くなると思います。でも、飼育員さんがヒグマに檻ごしに行くと、すぐ



に飼育員さんのそばに走ってきていました。普通なら人間が怖いはずなのに、飼育員さんのことは信用していて大好きなのかなと思うと、飼育員さんは本当にすごいと思います。動物と人間は、言葉が通じないけれど感情が伝わることはやっぱりあるんだなと感じた瞬間でした。また、旭山動物園にいた動物たちはみんなイキイキとしているように見えました。てながざるが少し動くとおこって、ヤギが橋を渡ると拍手されて、シロクマのところには常に人が多い、、、人間と動物が繋がっているようですごく嬉しくなりました。

「オオカミは人間が絶滅させた」と聞いて何十匹、何百匹と人間の手で亡くならせてしまっていると考えると悲しいです。これは絶対許されることじゃないと思います。でもその一方で蚕は人間の手がないと生きていけないことと知りました。悲しいことに目を向けてばかりいたので、人間は動物に許されないことをしてしまっている、という考えが私の中での動物に対するイメージでした。でも、いいことに目を向けると人間が他の命をたくさん救っています。なので、そこはちゃんと目を向けて今後も続けていくべきだと思います。

旭山動物園のステキだなと感じた事は、1匹の動物に対して、色んな角度から見えるようにしてあることです。わたしの行ったことのある動物園は1つの角度からしか見ることができないことが多かったけれど、旭山動物園は飽きる事なく見ることが出来ました。1匹の動物をずっと見ていると、すごく面白かったです。カバを見ると同じ動きを繰り返して、私が見た時は同じところをグルグルまわっていました。フンをしている姿も見れたので良かったです。

動物が少しでも暮らしやすいように努力しているのが、テナガザルのところを見て1番強く感じました。親が子どもを育てられるように、など目では見えない努力がたくさんあるんだなと思います。動物は話すことが出来ないから、感情が分かりにくいのに、見ているだけで「楽しそう」と思うことが出来ました。

持続可能な社会として、動物園をまわっていて、小中学校の人のポスターなどが貼ってあって、子どもたちも世界の色々な問題について知る機会があるんだなと感じました。私はボルネオ島について高校生になって初めて知りましたが、小中学生で知識として一度入れることは本当に大切だと思います。なぜなら、この問題について知らない人が増えれば増えるほど、世界は人間中心になっていき、動物たちは残酷な世界に包み込まれていくと思うからです。

旭山動物園は、今までの動物園と大きく違うところがたくさんありました。動物が生きやすい環境づくりをされているのが伝わってきました。バックヤードで見せていただいたカバの部屋も、カバの足への負担を減らすための工夫など、見えないところでの努力がすごいなと思います。カバとはコミュニケーションがとれないのに、カバの視点に立って考えることは簡単なようでとても難しいと思います。そういうところが私が尊敬したところです。

3.3.6 地域とのかかわり

a 登美ヶ丘わいわいフェスタ2022

目的

登美ヶ丘地区社会福祉協議会主催の本イベントにボランティアとして参加することで地域との関わりを深め、貢献する。主催団体を初め、地域の様々な団体、店舗、近隣の幼・小・中・大と連携することで堅固なネットワークを形成し、地域に根ざした学校を目指す。

日時

令和4年10月23日(日) 10:00~15:00

場所

中登美ヶ丘近隣公園

概要

当該イベントにおいて本校生徒は、ボランティアとして主に1) フードバンク奈良のブース担当、2) 当日の様々なブースの手伝いを担当した。

1) フードバンク奈良については、事前に奈良市フードバンクセンターを訪問し、概要説明を受けた。同センターではフードバンク奈良の小南昌紀理事から本事業や、フードドライブといった活動についての説明を受けた。生徒たちは実際にどのような食品が集められているのか、それがどのように分別されているのか、そしてどのように食品を必要としている人々に届けられるのか、などの話を伺い、熱心に聞き入っていた。(写真1) ボランティアの方の作業も実際に見ることができ、当事者の体験談は臨場感に溢れており、大変良い経験となった。今回の事前訪問を通して生徒たちは、実際に支援を必要としている人々を身近に感じることができ、自分たちも何らかの形で貢献したいという思いが醸成されたようであった。このような動機付けができたので、この事前訪問は有意義であったと言える。

当日イベントではフードバンク奈良のブースで持ち寄られた食品の受付、分別などの作業を手伝った。(写真2) フードバンク奈良における今回の目的は、フードバンク奈良の周知・宣伝も1つとして挙げられていたので、それを達成するために声かけ、ビラ配りなど主体的に行っている姿が見られた。

2) イベント会場内での多種多様な出店ブース等の手伝いとして参加した。(写真3) 各場面で生徒たちは積極的に行動しており、このフェスタにおいて貢献したいという気持ちが見て取れたのが印象的であった。後述の生徒の声から分かるように、来場していた幅広い年齢層の地域住民の方と直接触れ合うことで、自分たちはこのコミュニティの一員であるという意識が芽生えたと考えられる。地域とのつながりを意識することで、まずは高校生活で長い時間を過ごす学校の周辺から自分たちが貢献できることを模索したい。

また、イベントの運営側として参加することで、参加者の視点からは得られないような気づきを得られたように思う。今回得られたような気づきを生徒主導でイベントを運営する際に参考にすることで、より円滑にイベントを進めることができると推察される。このようなトライアル&エラーを実際に体験できたことは生徒にとってプラスになった。

生徒の声(抜粋)

- ・地域の人と関わることに温かさを感じ、それだけ人との関わりは大切なのだなと思われました。
- ・地域のあたたかさに触れられた。もっとフードバンクを広めたい。
- ・もっとフードバンクを広めたい。小さな団体じゃなくて大きなことをやっていることに気づいてほしい。

・自分の住んでいる地域以外の人とたくさん関わることができたので、とても良かったです。小さい子にもう少し声を沢山かけてあげたら良かったなと思いました。ボランティアに参加する人を増やすことと、地域と関わることの大切さを伝える。

・地域の方々と一緒に活動することができ、お話や協力をすることで仲が深まったかなと思う。みんなが楽しめると思うことだけでも、より良いフェスタが作れる。

・地域の方々と関わり、イベントの受付などを手伝って自分から話すようになり、少しは積極性・社会性がついたと思った。ステージにお客さんを呼び込む時にあまり大きな声を出すことができなかったこと。

・地域の人たちがとても暖かく接してくださって嬉しかったです。ボランティアに参加していた人たち同士が知り合いであったり友達だったりして、良いコミュニティだなと思いました。また参加したいです。参加者は全員、人数確認のために黄色のリストバンドをつけることになっていただけど、つけない人もいたので、なぜ必要なか気になりました。食べ物はすぐ売り切れてしまって、後から来た人はあまり買えないのが改善点かなと思いました。また、コロナなので仕方がないけれど、公園内で食べれるようになったら良いなと思います。

・老若男女関係なく地域の人が参加するイベントなんだと思った。それと同時に、全員が楽しめるイベントだと感じた。外国人の方が来ると想定しておらず、対応が少し曖昧になってしまっていた。感染対策もしつつ、食べ物の屋台を出してもっと地域の人を呼び込めれば良いと思う。

・地域の人と関わってよかった。もっと登美ヶ丘を身近に感じられた。去年も募金してくれて今年も募金してくれている人がいてすごいなと思った。フードバンクの仕事が少なかったので、役に立っている実感がなかった。でも事前学習はとても勉強になりました。

写真1：奈良市フードバンクセンター訪問



写真2：フードバンク奈良ブース



写真3：受付の様子



b いこま未来Lab

生駒市が開催する、高校生を対象にしたプログラムで、生駒市をフィールドに、地域の資源や課題を題材に、自分たちで企画したプロジェクトにチャレンジする実践型ワークショップである。全5回を通じて、自分たちで企画立案し、支援者の募集からプロジェクトの実践までを行った。

本校からは、グローバル探究II「いのちの輝きを未来に伝える」ゼミに所属する2名の生徒が応募し、参加した。

「食」と「森林の衰退」に関心を持つ生徒2名が他校の高校生2名と大学生や地域の大人とチームを組み、プロジェクトを開始した。ゼミにおいても、「獣害対策で駆除されたいのちを『ジビエ』として活用したい」という思いを持ち、生駒市でも獣害が問題となっている二人の思いに賛同していただき、「ジビエ」を広めることで需要が増えるという考えのもと、さまざまな取り組みを計画したり、支援者を募るための発表をしたりした。生駒市のくらしの文化祭に参加し、ジビエ試食会の参加者を募るためのチラシを配布したり、子ども向けの射的で資金を調達しようとしていたりしていた。最後のイベントでは、地域で猟師をされている方やプロジェクトマネージャーのカフェオーナーの方など、多くの方の協力と、学校の枠組みを超えた仲

第2期
いこま未来Lab

いこま未来Labとは、生駒市在住に高校生と地域の大人の一組になって新しいプロジェクトを企画・実践するプログラムです。現在、高校生メンバー6人のチームを募集募集中。四年生の仲間と協力してワクワクするプロジェクトをはじめませんか？

まちとつながる、仲間とはじめる

メンバー大募集!

実施日時 2022	毎日 10:00-16:00
DAY 1 7.31 (日)	チームビルディング 高学年
DAY 2 8.21 (日)	プロジェクトの企画立案 高学年
DAY 3 9.11 (日)	企画のブラッシュアップ 高学年
DAY 4 9.25 (日)	中間発表会 生駒市発表
DAY 5	プロジェクト実践後・成果発表会! (1月開催)

募集① 高校生	募集② メンター
2022年度において 高校1年-3年生の方	2022年度において 大学1年-修士2年生の方
全5回とも生駒市まで通える方 定員:14名	全5回とも生駒市まで通える方 定員:8名
お申込みは QRコードから	お申込みは QRコードから
募集がけ 7月15日(金)	募集がけ 6月30日(水)

主催 生駒市 / お問い合わせ 地域コミュニティ推進課 0743-74-1111 (内線 2081)



間との協働により、ジビエ試食会も実施することができた。参加した生徒は、「何かひとつの目的に向かって、皆で協力しながら進んでいく過程がとても楽しかった」「今回の探究活動を通していろいろな人とのつながりができ、そのつながりがあったからこそ、実現できたものがたくさんあった。多くの方の協力に感謝したい」と感想を述べている。

c 登美ヶ丘マミーズ保育園

10月18日(火)、家庭クラブ代議員1年生10名と希望者16名(うち5名欠席)、引率教員1名で登美ヶ丘マミーズ保育園へ訪問した。参加した21名が3グループに分かれ、4歳児Aチーム、4歳児Bチーム、5歳児チームをそれぞれ担当させていただき、事前に考えていたプログラムを実施した。当日までに、事前説明会、準備委員会を開き、各グループがプログラム内容を考え、必要な物品をそろえた。主な活動内容は以下の通りである。

【屋内】

- ・ 英語での絵本よみきかせ
- ・ お絵かき
- ・ ハロウィン工作
- ・ スライム作り
- ・ 粘土遊び



【屋外】

- ・ だるまさんが転んだ
- ・ 砂場遊び
- ・ おにごっこ



国際高校家庭クラブとして登美ヶ丘マミーズ保育園への訪問は初めてのことであったが、園児、生徒ともにいきいきとした笑顔で活動している様子が印象的であった。この数年間、コロナ禍で叶わなかった対面交流が実現できたことは大変喜ばしいことである。今後も様々な形で連携していきたいと考えている。



最後に、快く受け入れてくださった登美ヶ丘マミーズ保育園の園長先生、職員の方々にお礼を申し上げます。

d 韓国文化体験

実施日： 2022年12月14日（水）15:00~16:30

内容： 奈良韓国教育院の協力により、奈良市立登美ヶ丘小学校生の児童を対象に実施した。K-POPのダンス体験と、韓服の試着と伝統音楽体験の2つについて、奈良韓国教育院から講師を招いて実施した。企画と運営は本校の有志（コネチュニティー実行委員会）が担当した。

参加者： 本校生徒10名、登美ヶ丘小学校生徒（4～6年生）13名、保護者7名
参加した児童の感想

- 難しかったけど、楽しくて面白かったです。ダンスはちょっとだけ習っていたので覚えられました。先生がおもしろくてよかったです。
- 友達と一緒にK-POPをおどれてうれしかったです。先生もおもしろくてわかりやすかったです。とても楽しかったので、3学期もやりたいなと思いました。

アンケートの結果、「今日の体験で、韓国の文化に興味を持ちましたか？」という質問に対し、すべての児童が「持った」もしくは「まあまあ、持った」という肯定的な意見を持った。

韓国のごともっと知ろう！
奈良韓国教育院による

韓国文化体験

時間：15時～16時30分
場所：国際高校(格技室・作法室)
企画：奈良県立国際高校
コネチュニティー実行委員会
※国際高校生が小学校までお迎えに行きます

韓国の楽器・衣装体験 (定員15名)

韓国の楽器・チマチョゴリの体験ができるよ！

K-popダンス体験 (定員20名)

K-POPダンスを“プロ”に習うチャンス!!
みんなで楽しく踊ろう！

あのTWICEのミナを教えたこともある先生に習える！

対象：登美ヶ丘小学校4～6年生
定員：上記の通り(35名)、先着順です。

【その他】

- ・申込は11月28日までです。ただし定員になり次第締め切ります。
- ・参加の可否や、当日の詳細は、12月2日までにメールでお知らせします。
- ・当日の保護者の方の見学はできません。
- ・障りにお子様を国際高校までお迎えに来て頂けることを応募条件とします。
- ・お申し込みの際は、メールアドレスや緊急連絡先の個人情報を入力をお願いします。

お申込みはこちらから！ →



活動の様子

生徒が作成したパンフレット

3.3.6.e 登美ヶ丘東小学校 英語教室

On December 14, 2022, Nara Prefectural Kokusai High School and Higashi Tomigaoka Elementary School English Event held a special Christmas English event. The purpose of the event was to provide elementary school students the opportunity to communicate and study English with the English teachers and students from Kokusai High School. As this was around the Christmas holiday, the lessons included Christmas songs, games, and activities.

Six teachers and 23 members from the E.S.S. club participated in the event. The teachers and students were divided to four different classrooms. Each classroom was led by 1-2 teachers along with 4-5 high school students. The classrooms included: 24 first grade elementary school students, 32 second grade students, 14 third grade students, and 19 students from the fourth, fifth, and sixth grade. The students from Kokusai were there to support the elementary school students if they didn't understand any of the instructions in English.

My classroom had 24 first graders and four students from Kokusai High School. The first year students were split into four different groups led by one student from Kokusai High School. Most of the lessons were conducted all in English, while the Kokusai students acted as facilitators. In my class, students practiced listening to directions (left, right, up, down) in English and did Christmas games and activities. Through the event, I think that the elementary school students were able to enjoy studying English with the students and teachers from Kokusai High School.



f 登美ヶ丘南公民館

1. 英語で国際サロン

実施日： 2022年10月2日（日）10:00~12:00

内容： 本校への留学生（カンボジア、タイ、マレーシア、インドネシア、スウェーデンより各1名）が、各国の文化などを紹介する各10分程度の企画をする。公民館に地域の方20名程度をお招きし、企画を体験して頂く。また、地域の方と交流し、国際理解を図る。

参加者： 留学生5名、本校生徒8名、地域の方15名（10代3名、20代2名、30代2名、40代2名、70代5名、80代1名）

参加した地域の方の感想

- 地域の学校へ通っている留学生さんと交流ができる貴重な機会に参加することが出来て、とても楽しかったです。
- 外国の状況や習慣等、違う点を直接聞くことができた意義深い講座であった。世界には色々難しい問題が生じていますがこのような交流を続けて多様な文化をお互いに理解できるようになればいいと思った。



2. 地域若者作品展

実施日： 2023年1月24日~29日

内容： 本校生徒の作品を登美ヶ丘南公民館で展示していただく。

出品作品： 写真作品（写真部）、絵画作品（美術部）、心のメッセージ作品（1・2年生生徒、GCC）

地域の方からのメッセージ：

- 若者たちよ頑張れ！私たち大人も一緒に頑張ります。
- 自分の感性をいつまでも大切に！
- 今の経験はむだになりません。力強く生き抜いていってください。ガンバレ！！



g 秋風のコンサート

社会参加活動の一環として、マミーズ保育園や登美ヶ丘北中学校といった地域の教育機関との連携を図ること、さらに地域の方々に観て頂くことで、教育活動について地域の方々の理解を深めていただき、生徒たちにも地域社会との関わりを感じ、地域に貢献できる人材を育成することを目的としている。また、生徒が自主的に企画・運営を行ってPDCAを行うことで主体的・対話的な学びを深め、生徒の達成感を育むことも目的としている。さらに、生徒たちが国際問題を考えるきっかけになるよう、ウクライナへの募金活動も行った。



本校生徒が、地域の構成員の一員として、自らの学舎で義援金活動を行う場としての発信力が感じられることが一番の成果である。参加した生徒に感想を聞くと、「新型コロナウイルスの影響により、限定した方ではあるが、地域の方、並びに本校の保護者の方に本校の活動や地域の学校の活動を見ていただくことがなにより嬉しかった」「普段の感謝の気持ちを伝えられた発表になった」と答えてくれた。

今後は、入場制限が無く地域の方々に観て頂くことで、さらに地域の方々に対する理解も深まり、生徒たちも地域の一員であることが感じられるように思う。また、地域にある大学や一般団体と連携を行っていくことができれば、さらに地域の連帯感が醸成されるように感じた。

h ならism (奈良商工会議所青年部との連携)

地域未来プロジェクト ならism ミックス奈良 – マザッテハジケロー (以下、ならism)
目的

少子高齢化や市外県外への人口流出からくる奈良の人口減少という課題に加え、コロナ禍による経済構造の変化や打撃を受けた産業の復興という新たな課題も生まれてきた。奈良に関わる人を増やそう、奈良を作る主役になろう、奈良について考えようというこれまでの開催目的を引き継ぎ、アフターコロナを見据えた今こそ奈良の미래の元気を生み出そうという思いのもと、高校生、公務員、青年経済人が対話する。

日時

令和5年2月11日(土)

場所

ならまちセンター

概要

奈良商工会議所青年部との連携として、1年生の地域探究発表会において、寺西壮平理事から講評を頂いた。同商工会議所青年部が主催する、ならismに本校生徒も参加した。当日、高校生は事前に希望してあったセクションに分かれ、各自活動した。各セクションのテーマは以下のとおり。

セクションA: 「もっと奈良をよくしよう! 高校生選挙」奈良をよくするために、高校生のオリジナル制作をアピール。選挙、投票を行う。

セクションB: 「どこで働く? どこで稼ぐ? ~奈良が働きたい街になるためには~」稼ぐこと、働くことについて考える。そして奈良が働きたい街になるためにはどうなるべきか考える。

セクションC: 「奈良から盛り上げる! これからの奈良のお祭り」どんな祭りがやりたいか、祭りに必要なものは何かを考え、理想の祭りを提案する。

セクションD: 「どんどん論破! 奈良って実は、、! ?」奈良はどんな街なのか。県に関わる様々な人とディベートを行う。

当日の会では、高校生がいきいきと、普段あまり関わることのないような大人と活発に交流している姿が印象的であった。このような産学官が平場で議論することのできる機会を創出することができれば探究活動をより円滑に進められると感じた。特に高校生は大人との議論の中で、建設的な意見を出し議論に貢献することの重要性や、意見をまとめて1つの形にしていくことなどを肌で感じる事が出来た。

また、産・官それぞれの専門家から直接話を聞くことができたことも大きかった。そして、このような場でコネクションが構築出来れば、今後の探究活動においても話を伺ったり、アドバイスを求めたりしやすくなるので非常に有益であった。時間的な制限はあったものの探究プロセスが凝縮された会であったので、生徒も大きな学びを得ることができた。

ならism セッションの様子



3.3.7 図書館の取り組み

a 大阪大学ビブリオバトル

目的

お薦めの本を持ち寄ってその魅力を語り合い、一番読みたい本を決める「ビブリオバトル」の実施を通して、生徒同士の交流を深め、より読書のよさを認識し読書習慣の定着を図る。

日時

令和4年10月18日（火）13時から

場所

本校図書館

テーマ

SDGs関連本

対象

大阪大学ビブリオバトル部 今坂朋彦氏

甲南女子大学 堀内八衣乃氏

本校生徒3名（本大会開催に先立って本校生徒内で同テーマに関するビブリオバトルを開催し、代表者を3名決定した。）

当日の様子

上記5名以外に、本校生徒、司書、教員が参加した。生徒の感想については後述する。人前で自分が推薦する本を紹介するためには周到に準備をする必要があり、本校の発表者は練習を繰り返し行っていた。本番では緊張しながらも堂々とした振る舞いでプレゼンテーションを行っていた。ビブリオバトルでは口頭のみによって5分間、本の魅力について話をするので、聴衆の興味を引くために工夫を凝らすことが求められる。その点では、今回の大会に参加した大学生2名の発表は大変参考になったと思われる。

本校からの発表者の中には、原稿を念入りに作成したものの、それをそのまま暗唱しているだけの発表になってしまっている生徒がいた。一方、大学生の発表は、発表する本に対する熱意が感じられ、それが聴衆に伝わるようにプレゼンテーションを展開していた。発表本とそれに関する教養をいかに5分間に凝縮して聞き手に伝えるか、というプレゼンテーションの構成において、良いモデルを提示してもらった。この技能についてはビブリオバトルのみに留まらず、本校の様々な教育活動の中で活かすことができると考えられる。

生徒の感想（抜粋）

- ・SDGsにそった本がたくさんあったので興味深かった。いろんな問題について考えていこうと思った。
- ・やっぱり先輩方は人を引きつけるスピーチをされてらっしゃった。すごく引き込まれた。
- ・間の取り方や質疑応答に対する対応力に、さすが全国レベル!と感動しました。生徒の方もそれぞれ自分なりに本の魅力を工夫して伝えられていて、とても楽しかったです。
- ・大学生のビブリオバトルを聞ける良い体験をさせてもらった。SDGsを中心にしている本を紹介するわけではなく少し関係のある普通の本を紹介していて、参考になった。
- ・大学生や院生の発表を聞いて、こんなに面白い発表とかできるんだというふうに感じました。
- ・大学生の方の発表は、聞き手があきずに話を聞いていられるような内容だったので、これからプレゼンで発表する機会に参考にさせていただこうと思いました。

- ・どの本も興味深く聞いていて楽しかった。自分の知らないことや感覚が得られるので、すごく良い時間になったと思う。5人に刺激をもらったので、これから色々な本を読みたいと思う。
- ・大学の方々は日常の体験などをまじえた内容で私自身も聞いていて読んでみたくなりました。また、結構身近に感じる部分がどの本にもあって、とても面白かった。
- ・大学生の方はプレゼンを話すようにしていらっしゃったので、すごく聞き手も楽しかったし読書が苦手な私でも本を読みたくくなりました。一方的に話すだけではお互い楽しくないと思うので問いかけや共感を求めると、より楽しいなと感じたので次に活かしたいです。
- ・次は自分も出てみたいと思った。発表者さん達全員がとてもハイレベルだった。
- ・ゲストの方の話し方が上手だったし、面白かったのでまたビブリオバトルで呼び出して欲しい。
- ・今までSDGsテーマの時は、エッセイとかが多かったけど上手く課題と関連付けて小説をだしてすごかった。

本校生徒の発表の様子



b 「多言語・特別コーナー」展示

本校は、特色のある学習として、国際≠英語 英語だけじゃない真の国際人を目指し授業では世界の言語（中国語、韓国語、スペイン語、フランス語、ドイツ語）を学んでいる。

図書館の取り組みとして、奈良県立国際高校開校前に世界の言語を教えてください先生方に推薦図書をいくつかあげていただき、本を購入した。言語の文法本だけでなく、文化や社会が学べる本、漫画本など様々なジャンルにわたる本の選定をしていただき、「LANGUAGES OF THE WORLD」コーナーを設置した。新高校一年生や教職員に世界の言語（5カ国語）をより知ってもらおうきっかけになった。

そこで、生徒や教職員に5カ国語以外にも多言語を知ってもらい、興味を持ってもらいたいという思いから、「多言語・特別コーナー」を展示することになった。

最初、多言語になっている本『はらぺこあおむし』を奈良教育大学教授 吉村雅仁氏に教えていただき調べてみると、国立民族学博物館が47言語に翻訳されている本を集められていることを知り、連絡を取り本のデータを提供してもらえることとなった。その後、大手書店に注文したところ24言語を取りそろえることができた。移動式のラックに展示しているので多くの人に知ってもらえる良い機会となった。

高評価を得て、『はらぺこあおむし』以外にも集めたいと思い国立民族学博物館所蔵の『星の王子さま』に着目して27冊を展示している。

他には留学生が来る度に留学生の母国語関連本を収集し紹介している。その本を使用して、留学生の母国語でウェルカムボードや名札を作成し、生徒や教職員は英語だけでなく多言語を学び、留学生との交流を深めている。また、留学生の文化講座にも関連本が役立っている。

外国語＝英語と思いがちだが、多様な言語や文化に触れることで国際的な価値観を学んで欲しい。そのためには、図書館から世界へ発信していきたい。

「LANGUAGES OF THE WORLD」コーナー



展示『はらぺこあおむし』、『星の王子さま』



3.3.8 GCCの取り組み

GCCはGlobal Citizens Clubの略称。3年生10名、2年生3名、1年生15名で活動している。

1. 環境学習教材「分断ゲーム」の開発

昨年度より引き続きのプロジェクト。認定NPO法人「ボルネオ保全トラスト・ジャパン」、旭川市旭山動物園の支援を受けて、小学生も学べる体感型ボードゲームの開発を行った。本校では1年時、ボルネオ保全の学習を行う。自分たちが毎日食べたり使ったりしているもの（パーム油）が、遠い海の向こうにある島の環境を破壊し、そこに暮らす動物たちの命を脅かしていることを知る。世界の問題は自分たちとつながっていることを実感し、自分たちの暮らしを見直すことが目的である。その遠い森で起こっていることをさらに実感できるボードゲームの開発を行った。

ボルネオ保全トラスト・ジャパンのスタッフや旭川市旭山動物園の教育普及担当の方と何度も打ち合わせを繰り返し、その度に改訂した。2・3年生の有志がグローバル探究Iの授業に参加し、ファシリテーターとして1年生全クラスでボードゲームを行った。



8月には中高生対象「北海道フロンティアリーダー養成アカデミー」の、旭山動物園での研修にファシリテーターとしてオンラインで参加し、分断ゲームを実施した。本校でも1組が1セットを用いて比較しながら、ファシリテーターが進め、旭山動物園では教育普及担当のスタッフが支援しながら行った。目で見てわかるので実感しやすかったという感想をもらった。



12月には小学生を対象に本校図書館で学習会を実施した。旭川市旭山動物園よりスタッフを招き、ボルネオ島のお話をしていただき、その後に分断ゲームを行った。小学生が24名参加した。

【小学生の感想】

- 動物の暮らしやすい自然などを破壊しないためにどのように行動に表していけばいいのか考えたい
- ゲームで森のことを知れて楽しかった
- ボードゲームでは使っているものを並べると、動物たちが住めなくなることを実感して、自分自身の欲求で動物たちを殺しているということがわかったので、日頃の生活でもオランウータンやテングザルのことを思い出してみたい

【保護者の感想】

- 小学生にもわかりやすいゲーム内容で、いろいろとしかけもありとてもよかったですと思います。また子供ともいろいろ考えてみたいと思います。
- 高校生の皆さんがとてもイキイキしているのが印象的で、進行役の方の話方がとてもわかりやすく素敵でした。子どもたちもこの問題をはじめ、他のことに関しても深く考え、行動するきっかけになったと思います。
- 小学生にとってもわかりやすい内容で、小学校にも来て身近に環境問題の1つとして取り組む意識づけになるとと思います。



12月、神戸どうぶつ王国、認定NPO法人ボルネオ保全トラスト・ジャパンの共催で、神戸どうぶつ王国において、一般の家族を対象に、分断ゲームで環境学習のイベントを開催した。午前・午後の2回の実施で、約30名が参加、ボルネオに住む生き物を飼育する王国で保全のワークショップを開催することができ、また多くの人に現状を知っていただくこともできた。



2. ウクライナ支援

ロシアのウクライナ侵攻が始まって数ヶ月経ったが、おさまる様子がなく、胸を痛めている部員たちが、全校生徒にも知ってもらいたいと、2つの国の情報を掲示した。ロシアにルーツを持つ生徒もおり、2つの国の中で起こっている戦争ではあるが、それぞれの国に住む人々やルーツを持つ人々すべてに問題があるわけではないし、敵対するのは違う、ということで、ウクライナとロシアの両方の国や文化などを伝えるボードを作成し、昇降口に展示した。また、青と黄色の四葉のストラップを作成し、募金活動も行った。武器を購入する用途として用いないところに寄付したいという部員の希望から、UNICEFへ寄付することになっている。

3月には奈良新聞社の協力により、ウクライナから日本へ避難してこられた方を招き、現状を聞かせていただいたり、ウクライナの若者たちや子どもたちと連帯することができないか、「心」の支えになることや必要な支援を高校生としてすることができないかについて話し合った。この交流は継続して実施する予定である。また、GCCの活動を通して、学校全体にも連帯の輪を広めていきたいと考えている。



3. 世界手洗いの日キャンペーン

「世界手洗いの日」の10月15日に、地域の方々を招いて行う学校行事「秋風のコンサート」が実施されたこともあり、手洗いの大切さや少し薄れてきた手洗いの習慣を周知しようという取り組みを実施した。手洗いをしている国際高校生や教員の写真を撮影し、展示した。3週間前に教室にポスターを掲示し、参加の呼びかけを行なった。多くの生徒が協力し、写真のガーランドを作成することができた。ユニセフからも手洗い啓発のポスターやチラシの協力をしていただき、持ち帰っていただいた。また、サラヤ株式会社からは「100万人の手洗いプロジェクト」のボードをお借りし、さまざまな取り組みの一環として掲示した。地域のイベント「登美ヶ丘わいわいフェスタ」においてもブース出店し、「世界手洗いの日」の展示を行った。



4. ニュージーランド「マオリ」に学ぶ

ニュージーランドから来日し、先住民の文化や歴史を継承していくための

教育についてアイヌの方々和交流されているマオリのグループに来ていただき、交流会を実施した。マオリの紹介、今回来日されたみなさんのンガティ・マニアポト部族についてお話しいただいた後、3つのグループに分かれて交流を行った。英語での交流であったが、マオリの文化や言語について教えていただくだけでなく、ニュージーランド全般についての質問にも答えていただき、1時間ほど交流した。



3.3.9 生徒会の取り組み（異文化交流）

生徒会役員は前期2年生5名、3年生10名、後期1年生3名、2年生7名で構成される。

国際的な感覚を養うことを目的とし、異文化をより身近に感じるために様々な異文化に触れる機会を作った。

まずは、前期の生徒会役員による「イースター」を校内で取り組み、聞き慣れていない文化に触れることから始めた。

6月に開催し、多くの生徒が参加した。



続いて10月に「ハロウィン」を実施した。身近にある文化を各国ではどのように取り扱っているのかを対比し、異文化に対して理解を深め、多様性を持つ足がかりにするとともに、様々な生徒が参加できる形態をとり、協働力を身につけることを目的とした。



3.4 成果の発表

3.4.1 全国プレゼン甲子園

全国プレゼン甲子園は、課されたテーマについて深く考察し、高校生が自分の考えや想いを伝えることで論理的思考力、表現力、創造力等を養い、互いの発表を通してプレゼンテーションスキルの向上を目的として、2021年より開催されている。

第2回となる2022年の夏に、「地域社会の持続可能性を実現するには」というテーマのもと、本校の3年生の代表生徒3名が3分間のビデオ投稿による、予選に参加し、全国441チームから決勝に進んだ10チームのうちのひとつに選ばれた。

本選では、英語のconnectとopportunityを組み合わせた「コネチュニティー」をキーワードに、高校生が主体となって「国際映画祭」「花火大会」「秋風のコンサート」など学校行事に地域の方を巻き込んで、世代を超えてつながる社会の実現に貢献する取り組みを紹介した。また、ただ単に縦のつながりだけでなく、各行事がSDGsにつながっている点も強調した。例えば、5月開催のフリーマーケットでは「貧困をなくそう」「つくる責任、つかう責任」、7月開催の清掃活動は「住み続けられるまちづくりを」「海の豊かさを守ろう」「陸の豊かさも守ろう」とつながっている。何か大きな行事を年に数回するのではなく、毎月小さな行事をすることで、継続性やつながりを持たせることも大切な要素である。

このような取り組みを発表し、本選では、本校参加生徒の3名が第2位となる「優秀賞」を受賞することができた。今後は、コネチュニティーの促進のために、下級生にこの取り組みを継承し、探究を続けていく。



3.4.2 高校生フォーラム

概要：12月19日にオンラインで、文部科学省、筑波大学主催の全国高校生フォーラムに参加した。海外の高校も含めて120校が参加し、ポスターやスライドなどを用いて発表を行った。また、専門家を交えてグループディスカッションを行い、活発な意見交流をおこなった。進行や発表、ディスカッションはすべて英語で行われた。本校からは、2年生で「いのちの輝きを未来に伝える」ゼミで、獣害対策で駆除されたいのちを「ジビエ」として活用したいという思いを持ち、「ジビエ」を広めるプロジェクトに取り組んでいるグループが発表した。



発表の様子 1



発表の様子 2

発表内容：発表内容についての英語と日本語の要旨を以下に掲載する。発表は英語でおこなわれた。今回発表を行ったグループは、校内で選考を行い選抜した。英語による発表は、本校に在籍するネイティブスピーカーの教諭による指導を受けた。なお、本研究は、生駒市が実施した「いこま未来ラボ」で生徒が行った活動であり、生駒市の全面的な協力で行われた。

日本語タイトル：未来の食物：ジビエ

日本語要約

いま、日本中でシカやイノシシが畑を荒らしている。彼らは生きるために農作物を食べているだけである。しかし我々は農作物の被害を抑えるために、罠を作って彼らを捕らえて殺している。そして、そのまま埋めたり焼却したりしている。捕らえられたシカやイノシシの命を無駄にしないために、我々は彼らをジビエとして利用する活動を推進している。現在、生駒市長や地域の起業家などに働きかけ、ジビエの試食会の実施を企画している。

英語要約

Deer and wild boars are now destroying farming fields all over Japan. They are simply eating crops to survive. However, to control their damage to crops, we make traps to catch them and kill them. Then we bury or incinerate them. In order not to waste the life of captured deer and wild boars, we are promoting the use of these animals as gibier. Currently, we are planning to hold a gibier tasting event by approaching the mayor of Ikoma City and local entrepreneurs.

3.4.3 甲南大学リサーチフェスタ

概要：12月18日にオンラインで、甲南大学主催のリサーチフェスタ2022に参加した。リサーチフェスタとは文系・理系を問わず、高校生と大学生、大学院生が自分たちの「研究」や「調査」「活動」について、発表、議論する甲南大学独自のイベントである。全国から非常に多くの高校生が参加し、ポスターやスライドなどを用いて発表を行った。また、発表のあとは質疑応答にて活発な意見交流をおこなった。本校からは2年生が3名参加し、各自の探究活動の発表を行った。学生の質問だけでなく、他の高校の教員や大学教授からアドバイスを受けることができ、良い経験になったのではないかと思う。



発表の様子 1



発表の様子 2

発表内容：本校から参加した3名の発表タイトルと要旨を以下に掲載する。

①「サステナブルスクール～地球温暖化と学校のあり方をデータで紐解く～」

地球規模の問題である地球温暖化を学校規模で考え、高校生の視点で問題点を探り、解決策を探究している。地球温暖化の主な原因とされる温室効果ガスの排出を削減するため、学校のエアコン及び電力の使用量のデータを分析し、解決策を考えている。またそれを可視化することで生徒の環境に対する意識向上を目指している。

②「食べ物と神様」

世界中で問題視されている食品ロスの改善を目指し、人々の食に対する意識に着目した。現代では食材の入手がしやすく、食へのありがたみが薄れているが、昔の日本では食べ物には神様が宿ると考えられ、また人々は農業の大変さを知っていた。先人たちの考えを取り入れることで、食に対する意識改革を目指して探究をしている。

③「言葉の壁～Let's communicate easily～」

日本では海外からの移民が増加している。その中には日本での日常生活の中で、言葉が理由でコミュニケーションが出来ずに、困難を抱えている人が沢山いる。言葉の壁による困難を少しでも減らし、誰もが日本で快適に暮らすことができる方法を探究するため、学校での留学生を対象に聞き取りを実施し、校内マップの作成をした。

3.4.4 京都大学との架け橋

1. 令和4年度京都大学と奈良県との協定に基づく高大連携事業

開催日時：令和4年10月2日（日）
 場所：京都大学国際科学イノベーション棟

研究発表会「京都大学への架け橋」

奈良県と京都大学との協定により、県内4校から1組ずつが参加し、各校で取り組んでいる探究活動の成果を高校生が発表し、学校の枠を超えて取り組みを共有した。高校生と京都大学の若手研究者との交流の時間には高校生の質問に大学院生などが回答したり、大学院生の研究を聞いたりした。本校生徒が奈良県代表として選出され、3月に行われた京都大学ポスターセッションに参加した。

2. 京都大学ポスターセッション2022

開催日時：令和5年3月18日（土）
 場所：京都大学百周年時計台記念館

全国より35組が参加し、ポスターセッションを行った。本校からは「『魚のあら』に着目した食品ロスの解決」というテーマで生徒1名が参加した。

6 魚のアラに着目した**食品ロス**の解決
 奈良県立国際高等学校 2年

現状と課題

- 魚は漁獲量のうち**10.8%**が廃棄または**食用以外**（堆肥、サプリメント、魚油など）に利用されている（年間漁獲廃棄量は910万トン）
- 年間約**4.6億人分**の魚が廃棄！
- 魚の獲りすぎ問題
- 持続可能な漁業が困難

課題解決のための取り組み

『アラを食べる。』

栄養たっぷり 旨味たっぷり 圧倒のお得

- アラに対する需要高まる⇒漁獲量減る
- 食べる部位が増え、廃棄量も減る

「いのち」をおいしくありがたくいただいてこそ、命は循環する

実践

- 今日までの私のアラ人生**
 5歳⇒17歳
12年間
 1か月に12回直車に出た⇒約7kg
 つまり！ 1080kg
 1年に144回⇒86kg⇒90kg
 ※魚生目はもったい！
 これらを私はリサイクルという形ではなく**食料**として命を美味しく頂いてきた
- 切り身と比較比較！ アラの可食部はどのくらい？**
 魚を取り出す
 595g → 234g
 39%
 全体のうち39%が可食部！
- 奈良県中央卸売市場へ！**
 ・アラ専用の大きなゴミ箱
 ・リサイクルは？⇒ほとんどしていない
 ・ここで出たアラは商品として出すことはない
- 隔々まで美味しくいただろう！ 計9品**
 実際に調理◎
 茹でる、焼く、煮る
 彩りがいい！安心する
 食べやすそう
 アラアパッツァ
 もほろふりかけ
 目玉が付いているお寿司の部分などは見た目が少しグロテスクなどの理由からどうしても避けられてしまいがち

今後の取り組み

SNSやチラシなどで私の魚のアラに対する愛を発信する（レシピ動画、魚のアラについての情報、探究の取り組みについて）
 アラを食べてもらうにはアラの魅力を知ってもらう

アラは調理も食べるのも手間？？
 調理はサンプルでいい！
 手間こそ魚のアラを食べる醍醐味
 アラアパッツァレシピをチェック！

3.4.5 奈良県高等学校英語弁論大会 (ESS)

The 73rd Nara Prefectural Speech Contest took place on November 5th, 2022. Two second year students, Haruka Ueda (2-1) and Miku Goto (2-2) took part in the contest with the former winning third place. Azu Maruta (2-1) was the facilitator of the entire event. The students spent weeks practicing for the contest which resulted in Haruka Ueda winning third place. While Miku Goto didn't place, she was able to memorize her whole speech. This was a victory in itself because she didn't have her speech memorized the night before. The students, along with Kengo Yoshida and I stayed until 8 PM the night before practicing hard so they could memorize their speeches.

The 4th Nara Prefectural Recitation Speech Contest took place shortly after. Two first year students, Saaya Yamashita (1-4) and Waka Yamamoto (1-4) took part in the event. Saaya Yamashita won first prize performing an excerpt from "I Have a Dream" by Martin Luther King Jr. The judges and crowd seemed moved by her performance. Waka Yamamoto also performed well and earned third place performing "The Fall of Freddie the Leaf." The event was hosted by first year student, Uta Kataoka from class 1-4.



3.4.6 韓国語スピーチコンテスト

- 1 目的： 韓国語選択者が授業内でスピーチを作成し、奈良韓国教育院主催の大会に参加することで、韓国語のコミュニケーション能力の向上を目指す。
- 2 日時： 令和4年11月19日（土）
- 3 場所： 奈良県韓国人会館
- 4 参加者： 2年生韓国語選択者及び3年生韓国語選択者のうち希望者15名
- 5 結果： 金賞1名、銀賞1名



3.4.7. Let's 防災での発表

概要

災害時通訳・翻訳ボランティア養成研修を奈良県と共催し、災害時に通訳や翻訳を通して外国人支援をできるような体験・発表を行った。

奈良県では、災害時に外国人被災者を支援することを目的に、避難所などで通訳等のサポートを行ったり、多言語で情報を提供したりする「災害時通訳・翻訳ボランティア」制度を設けている。

この研修会を共催することで、生徒たちは災害の備えや災害時の行動、災害が発生した場合の注意点だけでなく、それらの通訳・翻訳方法について学び、外国人の方々への対応についても知ることができた。

また、事前に震災について学習し、参加者の前で震災の映像等を英語の字幕付きで発表した。参加していた外国人に、日本の震災について紹介することができた。

生徒・教員の変容

生徒会長の 大西 理文 は、震災について学習を進め知識を深めることができた。来年度は本校全生徒に対して発表を行うことを予定するなど、今回学んだことを積極的に発信するようになった。

また、英語の字幕を付けることにより、災害の英語表現についてより理解が深まっただけでなく、震災を通して日本と世界をつなげることができ、グローバルを意識した探究をするようになった。

そのほか、多数の生徒が参加し、防災についての意識だけでなく災害時の外国人の方々に対する英語による対応の仕方も学習することができた。

特に、災害が発生した時の「水」や「トイレ」について、大変貴重な話を聞くことができ、災害時の対応の仕方を学べた。災害発生時の対応は、とても簡単なことであったが、知らないと実践できないことであったため、生徒たちは、この会で学んだことを実践、広く共有するようになった。



3.5.1長期留学

a 長期留学生リスト・生徒の現況感想

長期留学生リスト			
クラス	出発日	留学先	帰国日
1-2	R4 8月	フランス	R5 6月
1-2	R5 1月	イタリア	R5 6月
1-3	R4 7月	カナダ	R5 6月
2-2	R4 10月	フランス	R5 7月
2-3	R4 8月	アメリカ	R5 6月
3-1	R4 8月	アメリカ	R5 6月

“毎日使うフレーズは聞き取れるようになった。前よりは積極的に話しかけたりするようになった。生活に慣れてきた。”

“日本と全く違った文化や価値観を知る機会になってる。全授業みんなと受けていて、テストも受けているのでイタリア語で勉強する機会が多い。英語のレベルがすごく高くて、留学生がたくさん来るので、英語を話す力がついた。口答テストとかプレゼン、ディスカッションがたくさんあって、人の前で話す力が身につく。自分の意見を言ったり、比べ合ったりする機会が多い。”

“ご無沙汰しております。お元気にされていますか。そして、かなり遅くなりましたがあげましておめでとうございます。今年もどうぞ宜しくお願い致します。”

年末のお休みは、家族にいろいろな場所に連れて行ってもらって、新たな出会いもたくさんありました。休み明けも、これまで話したことがなかった人とも話せるようになり、充実した毎日を送っています。お昼間はかなり暖かいのですが、朝晩の冷え込みはまだ強く、その温度差に体調を崩してしまった日もありますが、なんとか元気に頑張っています。この2か月で、久しぶりに会った人やホストファミリー、現地の友達などから「フランス語、上達しているよ!」と褒められることも増え、これまで一切聞き取れなかった会話の内容が、ちょっとずつ分かるようになってきました。それでも、まだまだ意味が分からないことの方が多いのですが、このペースでどんどん話せるようになっていければいいな、と思っています。

いよいよ春ですね。自分が最高学年に上がるという実感もあまりないまま4月を迎えてしまうことになりそうですが、先輩方がこれまで教えてくださったことや、残してくださったことを胸に、春も頑張りたいと思います。

それでは、くれぐれも体調にはお気をつけてお過ごしください!”

“主に、家事、料理、庭の手入れ、プール掃除をして、暇があれば友達とお昼ご飯を食べに行ったり、友達とジムに行ったり、英単語の勉強をしたりしています。先月は、ホストファミリーとサンディエゴとドイツニーランドに行きとても楽しい時間を過ごしました。”

“自分から行動する力がついたと思います。留学前までは人に頼ってしまうことが多かったけれど、アメリカに来て行動力がつきました。また、日本にいたときには知らなかったことを沢山学びました。アメリカの文化や、習慣、アメリカで暮らしてみないとわからないことが沢山あると感じました。”

無事に帰国した長期留学生リスト

クラス	留学期間	留学先
2-1	R3 6月～R4 8月	アメリカ
2-1	R3 1月～R4 7月	フランス
2-2	R3 9月～R4 6月	アイスランド
3-1	R3 7月～R4 6月	アメリカ
3-2	R3 9月～R4 7月	カナダ
3-2	R3 6月～R4 7月	カナダ
3-2	R3 5月～R4 8月	アメリカ

b 帰国生の講演

10月26日（水曜日）1学年（3限のホームルーム）

目的：先輩から後輩へ、異なる文化や習慣を経験することで得た新たな価値や視点を共有する。「留学」の経験から学んだことなどを紹介し、「留学」への関心を高める。

担当生徒：3学年4人の生徒

長期留学をした先輩から話を聞く機会がなかったので、後輩の生徒と経験を共有する場を作るためにこの講演会を開きました。留学を経験した3年生の生徒4人は1学年のホームルームで5分間ずつ発表をしました。クラスで1人の生徒が発表をした後、各クラスを回りました。今まで留学に行きたいと言う生徒がいましたが、普段一緒に学校生活をする先輩の話の聞いたら安心して、話が出来たようでした。発表のスタイルは様々でしたが、留学をする動機付けの為に、クイズ、質疑応答、写真の説明などの交流をすることが出来ました。アンケートからは、様々な国の文化や習慣への驚きや、「恐れず、挑戦をする精神を持つ」という声が生徒から出てきました。生徒の経験を聞いて、実際留学に行かなくても今後、生徒が海外に行けるチャンスを作っていくと思います。

所属クラス	留学先
3年1組	イリノイ州、アメリカ
3年1組	ウィスコンシン州、アメリカ
3年2組	バンクーバー、カナダ
3年2組	ビクトリア、カナダ



講演の様子

3.5.2 留学生の受け入れ

This year we accepted 5 students from abroad during the year. Chayanun Jongsureeyapat (Thailand), Aleeya Natasha (Malaysia), Shofiya Rahmat (Indonesia) and Sokunviphou Visal (Cambodia), and Smilla Frisell (Sweden). It was our first time to accept as many students at once. Chayanun, Smilla, and Sokunviphou were added to our first year overseas classes while Aleeya and Shofiya became part of the second year classes. As expected for first-time study abroad students, it took some time for them to get adjusted with Japanese culture, the language, and school life. I felt that all five students became close as they took Japanese language classes 6 times a week together. However, because of this, they took a little longer to warm up to the Japanese students in our school.

During the year, the foreign students were able to participate in school activities like bunkasai, sports festival, and other school events. During these events, the students could have more time to go out and talk with other students. Also, they joined various after school club activities. Smilla and Jene joined the volleyball club, Shofiya and Sonkunviphou joined tea ceremony. And Aleeya briefly played basketball with the basketball club. There, they were able to meet more students and pick up Japanese. Our school conducted some special events that surrounded the exchange students. In the first semester, Jene led the first ever Thai cultural exchange where she taught how to write and greet in Thai. Our students seemed very interested in the differences between Thai school. For example, students are able to buy ice cream at a school cafeteria where as in our school there is no such thing.

In October, the five students led a community cultural exchange at the Minami Tomigaoka Community Center. Each student came up with an activity that was related to their country and taught a small group of students for ten minutes each. We had a large crowd of people from the community and from their comments, the exchange was a resounding success. We conducted the second cultural exchange for our own students in November. Similarly to the cultural exchange in October, all five students led a small group and did activities such as Cambodian origami, Malaysian dance. Through these various cultural activities, our students were able to get a taste of traditional cultures and languages as well as broaden their view of what cultural understanding is.

In December, Aleeya, Jene, and Shofiya joined the Nara Prefectural Speech Contest for foreign exchange students. In preparation for the speeches, Ms. Nitani (Japanese teacher) and I translated their speeches from English to Japanese. Then, we spent some time after school and during Japanese class to practice the Japanese speeches. Aleeya was able to place in first for her speech about learning different dialects. She compared Japanese to a milfeu cake with many layers upon layers to it. In all, the foreign exchange students could meet others from different schools in Nara prefecture and challenge themselves to speak Japanese more. As a result of their effort in studying, Sokunviphou, Aleeya, and Shofiya could pass level 5 in the Japanese proficiency exam.

In January, Sokunviphou, Aleeya, Smilla and Shofiya led the 1st year homeroom pertaining to the theme of cultural differences. They all gave speeches and presentations about their experiences in Japan. Because this event was held during the day and not after school, the exchange students were able to reach a wider audience.

In terms of taking care of the exchange students, I (Tokutake Jun) was in charge of scheduling and other daily school matters. Maki Matsumoto was in charge of contacting AFS and other outside events related to exchange students. Finally, Yuki Nitani led Japanese classes. She also gave input on how students were doing during the day and assisted in our

school events. Overall, I believe that this year was a success. My goal for this year was to create cultural awareness through exchange and challenge myself to do something different for the school. We were able to hold three cultural exchange events at school and one at the community center. And most importantly, our students were able to learn about different perspectives while on the other hand, the foreign exchange students could have a fulfilling time in Japan. I hope to continue this goal for next year and years to come for the Kokusai Exchange program.

Exchange Students

Chayanun Jongsureeyapat	Thailand	YFU	May~December
Aleeya Natasha	Malaysia	AFS	July~March
Shofiya Rahmat	Indonesia	AFS	July~March
Sokunviphou Visal	Cambodia	AFS	July~ March
Smilla Frisell	Sweden	AFS	September~ July



Japanese class



Congratulations Aleeya! Nara Prefectural Speech Contest

3.5.3 オンライン国際交流

a.概要

昨年から引き続き交流の4校に、新規交流の4校が加わり海外8校と交流。

放課後や授業時間を使ってオンライン 同期型交流／ZOOM、授業内にてオンライン非同期型交流／Fripgrid(ビデオ)、Padlet(文書投稿)を行った。

フランス語クラス、ドイツ語クラスでは郵送にて手紙、カードやお土産の交換も行い一年間を通じてより親密な交流を行う事ができた。

また、交流校2校が来日し、当校を訪問。生徒達と対面による交流も実施することができた。

フランスのサンテレーズ高校との更なる交流発展を展開するために本校初の姉妹校協定を締結した。

<交流校>

スペイン語クラス	メキシコ	日本メキシコ学院 ひまわり日本語学校
中国語クラス	台湾	嘉義高級中学
フランス語クラス	フランス	サンテレーズ高校
ドイツ語クラス	ドイツ	ハンブルグ市民大学 KTS Köln／CJD Königswinter／Gymnasium Rodenkirchen
韓国語クラス	韓国	忠清南道 K-POP高校
EAP II クラス	NZ	リットン高校

<ZOOMオンライン交流>

2022年 5月	中国語クラス	台湾嘉義高級中学校
	3年スペイン語クラス	日本メキシコ学院
6月	フランス語クラス	サンテレーズ高校
9月	2年スペイン語クラス	ひまわり日本語学校
10月	EAP II	リットン高校
	3年スペイン語クラス	日本メキシコ学院
11月	EAP II	リットン高校
12月	フランス語クラス	サンテレーズ高校
	中国語クラス	嘉義高級中学校
2023年 2月	2年スペイン語クラス	ひまわり日本語学校
	ドイツ語クラス	CJD他2校のドイツの高校生

<非同期型オンライン交流>

スペイン語クラス	日本メキシコ学院	Flipgridでビデオ、コメント交流
ドイツ語クラス	CJD他ドイツの2高校	ビデオ、お土産交換。コメント交換
	ハンブルグ市民大学	Flipgridでビデオ、コメント交流
中国語クラス	台湾嘉義高級中学	Padletにて文書交換、添削の共同作業
EAP II	リットン高校	ビデオ、コメント交流
フランス語クラス	サンテレーズ高校	クリスマスカードの交換

<対面交流>

韓国 忠清南道訪問団とK-POP高校教員、生徒達計17名が本校を訪問し、対面での交流を行った。

フランス サンテレーズ高校の教員2名、生徒15名が本校を訪問。
ホームステイ2泊と授業参加2日間を行い、生徒達と更なる交流を深めた。

<姉妹校提携締結>

2月13日 フランス サンテレーズ高校とオンライン調印式を行い姉妹校提携締結を行った。

b ニュージーランド

Zoom Meeting with Lytton High School

日付 令和4年10月19日、11月2日、11月9日

参加人数 ニュージーランド：12～18人 本校：13人（3年生）

10月19日（水曜日）

9：50～10：05 (15 minutes)

- In English
 - Kokusai students:
 - Conversational
 - Q&A about...
 - Students
 - Life in New Zealand
 - The New Zealand Education System
 - Lytton High School, etc...

10：05～10：20 (15 minutes)

- 日本語で
 - Lytton students:
 - おはようございます！
_____です。
 - 私の一番好きな科目は_____です。
 - _____が好きですから、_____になりたいです。」
 - Kokusai student:
 - （例）自己紹介に関して質問する***

10：20～10：25 (5 minutes)

- Q&A形式

11月2日（水曜日）

9：50～10：05 (15 minutes)

- 関西弁を教えること

10：05～10：20 (15 minutes)

- 日本語で質問すること

10：20～10：25 (5 minutes)

- Q&A形式

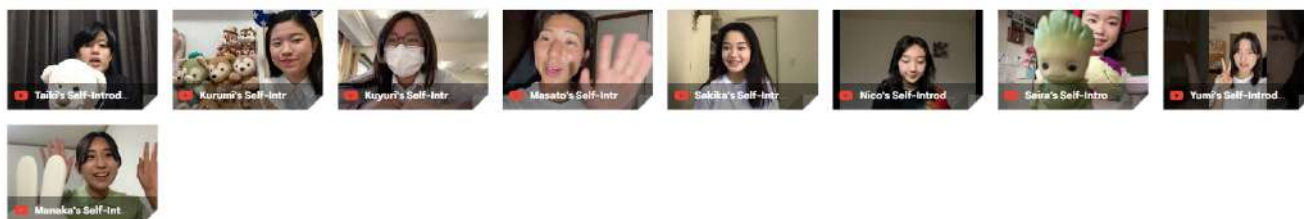
11月9日（水曜日）

9：50～10：25 (40 minutes)

- Breakout Roomsに分けて、好きな話や、質問等を聞き取りすること

In the spring of 2022, our school applied for the KAC (Kizuna Across Cultures) Program that would give our E.A.P. (English for Academic Purposes) students the opportunity to interact with a Japanese-learning classroom in America. Unfortunately, in June, we learned that our school was not accepted into the program. Shortly thereafter, however, our WWL coordinator (Izumi Naka)

was contacted by a Japanese/Foreign Language teacher from Lytton High School in New Zealand, about a possible online exchange. After our coordinator helped us to get in touch via a Zoom call meeting, (despite our schedule and time differences) we were able to schedule several days during the fall term where our students would be able to interact with one another online.



It was decided that prior to the students meeting via Zoom that it would be great if they could send video messages (self-introductions) to one another prior to summer vacation. This not only gave students the chance to get a sense for who they would be interacting with in the fall term, but also helped them to feel a little more comfortable with one another. On the day of their first online meeting, after they reintroduced themselves and the students began a quick Q&A, they found a lot of common interests in hobbies, sports players, and even anime characters/TV shows.



At the end of the first meeting, Lytton High School's teacher (Mr. Ryan Majstrovic) praised our students for their high level of English-speaking ability and recommended that our next meeting be conducted in English, as his students' Japanese ability was not at a level high enough to converse, listen, or engage in non-scripted questions. Taking this into consideration, our students came up with a great idea. During the second online meeting, the E.A.P. 2 students decided that they wanted to teach the Lytton High School students some simple/easy phrases in the Kansai

dialect. They used Japanese to share set phrases, but also used English to explain them to the students online.

During the last and final session, E.A.P. students sat in pairs, logged into Zoom, and were separated into breakout rooms where they were able to personally interact with the Lytton High School students in small groups. The students talked about their hobbies,



interests, tv shows, and even shared cultural differences such as the Zodiac signs/system and even Japan's Blood-trait system. As a means to make it more comfortable for the Lytton High School students, everything was conducted in English and all participants were able to interact with one another freely. On the occasion that the Lytton High School students had any questions in Japanese, the EAP students were glad to oblige. Overall, the online interaction between Kokusai and Lytton High School students went well and was a success to all that were involved.

c ドイツ

ドイツ/Hamburger Volkshochschule: 「Flip」でビデオ交流

日時 令和4年5月～6月,11～12月

参加人数 相手校：7人 当校11人（3年生）

交流内容

- ① 5月 自己紹介のビデオを作って、Flipでアップロード
- ② 6月 ビデオを見てから、コメント書く
- ③ 11月 学校/大学/職業のビデオを作って、Flipでアップロード
- ④ 12月 ビデオを見てから、コメント書く

Hamburger VHS・国際高校のFlip



感想 3年生にとっては、先輩からドイツ語やドイツに関わる将来の可能性のある職業について聞いたことがよかった。

改善点 Hamburger Volkshochschuleの学生は夜間授業しかなく、Zoomでリアルタイムに会うことができなかったので、生徒/学生同士のつながりができにくかった。

ドイツ/KTS Köln/CJD Königswinter/Gymnasium Rodenkirchen:ビデオ交流

日時 令和4年9月～12月

参加人数 相手校：20人 当校35人（2年ドイツ語選択者）

交流内容

- ① 9月 ドイツからの動画を視聴(2・3年生)
「自己紹介、学校生活、ドイツ人は日本について何を知っているのか」
- ② 10月 グループで両言語の動画作成 (2年生)
「自己紹介、趣味、食べ物、衣服、学校生活など」
- ③ 11月 メッセージカード(3年生)・動画(2年生)をドイツに送付
- ④ 1月 ドイツの生徒から感想やコメントの伝達

KTS Köln/CJD Königswinter/Gymnasium Rodenkirchen作成動画



国際高校から送った感想



国際高校作成動画



ドイツから寄せられた感想



ドイツ/KTS Köln/CJD Königswinter/Gymnasium Rodenkirchenオンライン交流

日時 令和5年2月9日16時00分～17時00分

参加人数 相手校：18人 当校13人（1年生4人、2年生9人）

交流内容

- ①あいさつ
- ②学校紹介 国際高校（ドイツ語で）
- ③学校紹介 KTS Köln/CJD Königswinter/Gymnasium Rodenkirchen(日本語で)
- ④ブレイクアウト・ルームへ
「両言語での自己紹介」
「ドイツ語、日本語（と英語）のフリーチャット」
「ソーシャルメディア情報の交換（希望者のみ）」
- ⑤集合写真
- ⑥最後のあいさつ

集合写真



感想 ドイツやケルンについての知識を増やして、異文化を実感できる会だった。ビデオ、郵便、ソーシャルメディア、そしてZOOMの利用を通して、1・2・3学年のすべての生徒に、国際的なつながりを作り、異文化について学び、外国語のスキルを向上させる機会を提供できた。

改善点 ドイツと日本の時差は8時間なので、ZOOMで会えるのは放課後だけだ。また、国際交流には、授業時間や準備時間がかなりかかる。この後、対面の交流を実現したいが、このデジタル交流を続ければ、どんな生徒でも国交流に参加することができる。

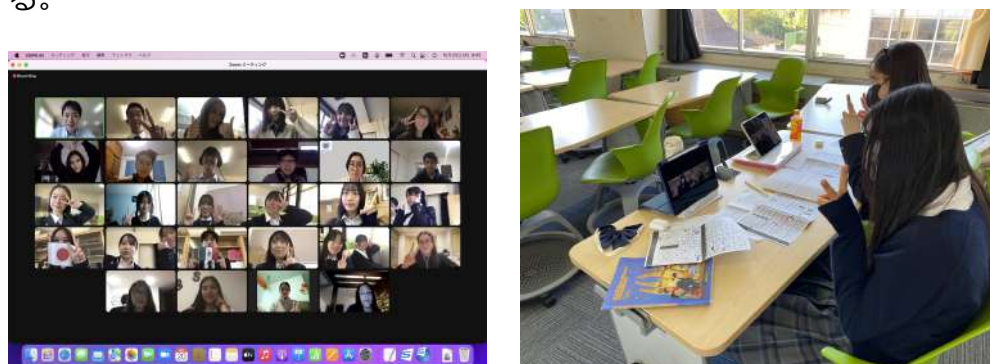
d メキシコ ひまわり学園

今年度より2年生スペイン語選択者（40名）はメキシコ・グアナファト州にある、ひまわり日本語学校と9月と2月にオンライン交流を行った。第1回目となる9月の交流では、ひまわり日本語学校の学生が主導となって、日本語とスペイン語を交えて自己紹介やいろいろなキャラクターになりきってのロールプレイなど楽しく交流に取り組むことができた。両校の参加人数もちょうどよい数になり、1グループ5人程度でブレイクアウトセッションを利用し、少人数で深い交流を行うことができた。スペイン語ネイティブとの初めての交流ということもあり、事前指導ではメキシコ特有のスペイン語などを紹介し、交流当日に積極的に使うように促した。

2回目の2月の交流では、国際高校の生徒が主導となって、オンライン交流の企画と運営を行った。交流内容の企画を行う「実行委員」の生徒6名が主体となって、交流の2カ月前から準備を開始した。1回目の交流では交流中にさまざまなアプリを使って行ったが、使い方など短い時間で慣れるのが戸惑った生徒も多かったことから、今回はできるだけデジタルを使わず、アナログで取り組むことに決めた。その結果、好きな食べ物や趣味など日常的な内容について両言語を使ってサイコロトークを行った。また、事前にメキシコ人の生徒に紙を用意してもらい、国際の生徒がリアルタイムで折り紙を教え、一緒に完成させた。



3年生スペイン語選択者（15名）は、5月と10月にメキシコシティにある、日本メキシコ学院とオンライン交流を行った。相手校の提案もあり、当日のリアルタイムの交流だけでなく、「Flipgrid」というビデオ投稿アプリを活用し、自己紹介やお互いの学校紹介など個人やグループでビデオを作成、投稿し、それに両校の生徒が日本語とスペイン語を用いてコメントし合い、事前に交流を開始した。そのため、当日のオンライン交流では、簡単な自己紹介の後、トピックに基づいたフリートークなど生徒同士の自由なやりとりにより多くの時間を削ることができた。生徒たちは、事前にビデオ投稿とコメントし合うことにより、リアルタイムの交流時にはより緊張感が少なくリラックスした雰囲気で行うことができた。交流が終わった現在も、3年生はインスタグラムなどのSNSを通じて日本メキシコ学院の生徒とプライベートの交流を継続している生徒もおり、とても有意義な交流になったと感じている。



e 台湾 国立嘉義高級中学

日時：2022年12月13日（火） 13:20～14:10

参加人数：相手校21名（日本語クラス1年生）、本校17名（2年生中国語選択者31名中）

交流内容

- ①あいさつ（各校代表生徒による）
- ②ブレイクアウト
前半：中国語タイム（自己紹介、質問）
後半：日本語タイム（自己紹介、質問）
※補助言語として英語の使用可
- ③集合写真撮影
- ④終わりのあいさつ



感想：初めて実際に中国語話者と会話をした生徒がほとんどで、中国語タイムでは単語を言うのがやっとというレベルだったが、お互いの趣味や、双方の食べ物の話題などで盛り上がっていた。

改善点：探究週間の午後ということで、生徒の集まりが悪かった。ブレイクアウトでは学習した文型を活用できる内容にすることで、生徒たちにさらに充実感や達成感を味わってもらえるように工夫したい。

f サン・テレーズ

サン・テレーズ高校（Lycée Sainte-Thérèse）はフランス西部の町カンペール（Quimper）に位置する高校である。生徒は選択授業として日本語を選択することができ、現在は約50名の生徒が日本語を学習している。

今年度は2度のオンライン交流を実施した。さらに、2月にサン・テレーズ高校より訪問団が来校し、姉妹校協定の締結および生徒同士の交流を行った。

1 オンライン交流1回目 2022年6月8日（水）

今年度1回目の交流は、3年のフランス語選択者4名、2年のフランス語選択者のうち希望者4名が参加した。両校カメラを1台ずつ設置し、クラス全員での交流となった。簡単な言語表現を用いて身の回りのものを紹介することを目標に、「これは～です」という表現を使いながら奈良の名所や自分の好きなものについて話をした。

2 オンライン交流2回目 2022年12月1日（木）

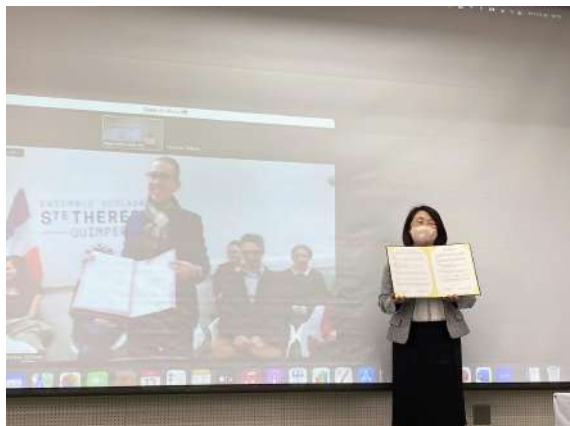
2回目の交流は、3年のフランス語選択者4名、2年のフランス語選択者のうち希望者2名が参加した。1回目とは異なり、2回目は各自のiPadをZoomに接続し、グループに分かれて交流を行った。学習した表現を用いて、学校のスケジュール、好きな科目、将来の夢、奈良について話すことを目標とした。少人数でお互いの文化について話すことができ、相互理解につながった。

3 クリスマスカードの交換（2022年12月～2023年1月）

オンラインによる交流だけでなく、今年度はクリスマスカードの交換をすることができた。本校生徒はフランス語を使って、サン・テレーズ高校の生徒は日本語を使ってカードを作成し、教員がとりまとめて発送した。

4 サン・テレーズ高校訪日団受入れと姉妹校協定締結（2023年2月13日～15日）

2022年2月13日から15日にかけて、サン・テレーズ高校の生徒15名と教員2名を受け入れた。サン・テレーズ高校の生徒たちは分かれてクラスに入り、日本の高校生活を体験した。放課後は本校生徒の家にホームステイし、それぞれの家庭での生活を体験した。また、2月13日には本校とサン・テレーズ高校の姉妹校協定調印式を開催した。オンライン会議を通して両校校長が協定書に署名し、姉妹校協定を締結した。



g. 忠清南道（K-POP高校）

1 忠清南道

忠清南道は奈良県と友好提携を結んでいる。第67回百済文化祭が令和3年9月25日～10月3日に韓国忠清南道で開催され、奈良県と韓国忠清南道の友好提携10周年記念事業の一環として、奈良県が参加した。10周年記念共同広報館では、県立国際高校の生徒が作成した動画「県内にある韓国（百済）とのゆかりの地紹介」が上映された。記念事業の一環として忠清南道にある「K-POP高校」（韓国初のK-POPを専門的に学ぶ高校）とのオンライン交流が昨年度実現した。

2 K-POP高校との交流

オンライン交流に続き、本年度は実際にK-POP高校の生徒が本校を訪問した。

日時：2022年12月20日（火）13:30-15:00

場所：奈良県立国際高等学校 プレゼンテーションルーム

対象：忠清南道訪問団 17名 本校韓国語選択者 20名

内容

- ・開会及び国際高校校長歓迎挨拶 ・K-POP高校校長挨拶 ・忠清南道代表者挨拶
- ・国際高校学校紹介（韓国語）・K-POP高校の紹介
- ・学生間交流（K-POP披露含む）

生徒の感想

- ・国や学校は違うけれど、同じアーティストが好きだったり、趣味が一緒だったり共通点があるということに気付いて、嬉しかったです。
- ・自分をもっと韓国語を話せるようになりたいとより強く思えた。
- ・オンラインなど画面を通しての交流よりも対面の交流は、相手の雰囲気をよく感じることができ、良い時間を過ごすことができた。また、自分から駆け寄って話しに行くことで自分の韓国語でのコミュニケーション能力があることに気づくことができ、自信を持つことができた。
- ・日常会話は話せると思っていたが実際喋ってみると全然喋れなかった。アウトプットすることが大事なのと思った。
- ・韓国語を理解出来ても、その返答を素早く韓国語ですることが難しいなと感じた。次はちょっとでもスムーズに話せるように勉強を頑張りたいなと思った。
- ・今の時代は翻訳機とかあるし、韓国語が出来なくてもちょっと使える英語でも交流できるから会話がどんどん広がっていくのは自分の中の世界が広がってるように感じた。
- ・もともと韓国に興味があったが実際に韓国の方と会って話す機会がなかったので嬉しかった。韓国語の授業は一年生からずっとやっていて、独学でも勉強したのが発揮できて良かった。



h.今後の計画

EAPⅡクラス、各言語クラス共に現在の交流校と継続して年間交流を行う予定。
新規交流校として 韓国世宗国際高校とオンライン交流、MOU締結に向けて進行中。
交流校の3校が、来日し本校を訪問予定。

<オンライン交流予定>

ドイツ語クラス	CJD他2校 ハンブルグ市民大学	ビデオ、お土産を郵送交換、ZOOM交流1回 Fripgridでビデオ交流
フランス語クラス	サンテレーズ高校	ZOOM交流を2, 3回
中国語クラス	嘉義高級中学校	ZOOM交流を2回
スペイン語クラス	ひまわり日本語学校	ZOOM交流を2回
韓国語クラス	日本メキシコ学院	ZOOM交流を2回、Fripgridビデオ交流を2回
EAPⅡ	世宗国際高校 リットン高校	ZOOM交流 ZOOM交流複数回、ビデオ交換

<来校予定>

ドイツ	CJD高校他2校の日本語クラス生徒6名が4月に奈良訪問。 休校期間のため来校は出来ないが、ドイツ語クラスの希望生徒達と共に 1日奈良観光予定
メキシコ	メキシコ日本語学院の生徒18名が6月に来日。本校に1日体験入学予定
NZ	リットン高校の生徒が2024年5月頃来日予定。来校時期により交流 受け入れ可否を検討していく

3.5.4 国際理解講座

a タイ文化講座

6月29日（水曜に） 15:00~16:00 図書室 全学年対象

目的：タイ語の文化やタイの書き方を知ること

講演の担当：Chayanun Jongsureeyapat (タイからの留学生)

タイからの留学生、ジェインが放課後タイ文化とタイ語の書き方について第一回の文化講座で教えました。ジェインはタイと日本の学校の違いと日本での経験について話しました。ジェインが日本に来て2カ月しか経っていませんでしたが、日本語で喋るのにチャレンジしました。その後、ジェインはタイ語の書き方を紹介し、参加した生徒がカードにタイ語で自分の名前を書きました。書いた後、ネームカードを使って、タイ語で挨拶や自己紹介をしました。アンケートから「タイには青いお寺があって驚きました」、「タイ語は複雑」と言う反応がありました。また、タイについてもっと知りたいという言葉もありました。



流れ

- 1 自己紹介
- 2 タイ文化について
- 3 タイ語について
- 4 タイ語で名前を書こう！
- 5 タイ語で自己紹介
- 6 アンケート

自分の名前をタイ語でネームカードに書いている生徒



1学年の生徒にもタイ語の書き方を教えているジェイン



日本語でタイ文化について語る



ジェインが使ったパワーポイントスライド

b 2学期の講座

11月22日(火曜日) 16:00~17:00 会議室 対象：全学年

目的：様々な国の伝統を考えながら母国の違いに気づく

担当留学生：スミラ(1-2)、ジェイン(1-2)、ソフィア(2-2)、アリア(2-1)、フィプー(1-1)

留学生5人が母国のゲーム、作り物、ダンスなど様々な活動を担当して、国際の生徒に教えました。5つのグループを作り、留学生が10分間母国の活動をした後、国際の生徒が時計回りに各グループに移動しました。生徒は5カ国の文化を経験しながら、違う学年や先生と交流をすることもできました。外国の文化を身近に体験できたことで、自分の国との共通点も分かりました。



流れ

- 1 自己紹介
- 2 グループ活動(10分x5)
- 3 終わりの言葉
- 4 アンケート

会議室の前で各国の写真をホワイトボードに張り、図書室から本を借りて、生徒の興味を引くために展示しました。生徒は自由に読むことが出来ました。



活動

- スウェーデン：ヘッドバンド作り
- マレーシア：伝統ダンス
- インドネシア：じゃんけん
- カンボジア：船のクラフト
- ジェイン：像の折り紙作り

グループで10分間ずつ5カ国の活動をしました。様々な活動があったので幅広く物事を味わうことができました。



マレーシアの伝統的なダンスを踊りました。生徒も先生も一緒にいろんな活動ができました。身体からでも外国の文化を体験することが出来ました。



留学生ビブーがカンボジアの折り紙を教えてくれました。カンボジアの船の折り紙を作り、カンボジアと日本の旗を最後に船に張り付けました。

3.6.1 連携の広がり 概要

WWL事業2年目となる本年度は、新規に連携先を増やすことができたほか、これまで連携していた大学や関係機関とも、連携の回数や中身を充実させることができた。

今後は、単位認定につながる高大連携について、関係機関と調整を行っていききたい。

	令和3年度（事業1年目）	令和4年度（事業2年目）
延世大学	・MOU締結	・1期生1名合格 ・アドミッションオフィス来校
国際教養大学	・イングリッシュビレッジ オンライン実施 (令和元年連携協定締結)	・イングリッシュビレッジ 対面実施 ・出前講義（内田教授） 対面実施
大阪公立大学	・連携協定締結 ・大学招待事業 ・吉田教授講演会	・吉田教授がカリキュラムアドバイザーに就任 ・吉田教授講演会 ・大学招待授業 ・プログラミング講座 ・データサイエンス講座 ・情報TAの派遣 ・研究室訪問
同志社女子大学	・連携協定締結 ・研究室訪問	・大学での講義受講 ・1期生が進学
立命館アジア太平洋 大学	・異文化理解研修 ・教員研修参加	・1期生が進学 ・異文化理解研修
畿央大学 福島教授		・英語のワークショップ
東京都市大学 佐藤教授		・職員研修 ・1年生でのプログラム実施
コロラド州立大学 加藤教授		・講演会 ・探究活動への指導助言
名古屋国際中学校 ・高等学校	・連携協定締結	・高校生国際会議（奈良県） ・WWL高校生国際フォーラム ・カンボジア研修オンライン参加
ACCU		・タイ教職員招へいプログラム
(株)アイエスエイ	・留学セミナー ・海外大学進学セミナー	・留学セミナー ・海外大学進学セミナー ・グローバル講演会（1年全員）

3.6.2 延世大学

延世大学とは昨年度包括的な協定を締結した。今年度は1期生1名が延世大学に合格をいただいた。2月には、延世大学アドミッションオフィスの方2名が来校され、今後の連携について協議を行った上で、以下のとおり、2年生韓国語選択者に対して、直接大学の説明をしていただく機会をもつことができた。

日 時： 令和4年2月3日（金）

対象者： 2年生韓国語選択者

内 容： アドミッションズオフィスの方による大学説明



3.6.3 国際教養大学出張講義

本校及び奈良県教育委員会と、教育に係る連携協定を締結している公立大学法人国際教養大学より、専門職大学院グローバル・コミュニケーション実践研究科教授 内田浩樹先生にお越し頂き、ご講演を行っていただいた。講義タイトルは「A Very First Step to Think Critically」で、主にクリティカルシンキングに関する内容であった。実施概要は以下の通りである。

2022年12月8日(木) 8:50~11:40

1限目(8:50~10:10)

対象:1年生全員

内容:体育館にて、クリティカルシンキングに関する講義。結論を出すためにはどんな情報やデータを知っている必要があるかを導き出す力を育成する活動を含む。生徒は割り箸の使用制限やレジ袋有料化などのトピックをペアで話し合った。

2限目(10:20~11:40)

対象:2年生全員

内容:1限目と同じ内容

講演会に参加した生徒の感想

- 自分は日常的に考えることができているのか、それは自分の本当の考えなのかそんな疑問を今日の講義を通して考えるようになりました。この学校では探究活動を行っていますが、自分の探究がただ調べているだけになっているかもしれないと思い、今後の自身の探究を見直していく必要性を感じました。考えられる大人になろうと思いました。
- 出された問いのどこに注目して考えるのか、検証すべき情報はどれなのか、浮き出た表面だけでなく足りない情報を見つけ出すことが大切だと思いました。そのうえで自分の意見を出すことが大切でこれからの探究活動に活かそうです。
- 内田教授の講義を受け、様々な物事を偏った視点からだけでは無く、あらゆる可能性、視点から捉えることの重要性を痛感しました。日々暮らす日常の中で考えることをやめ、ただ与えられた生活を送ることもでき、私自身もそのような日常を送ってきました。しかし、少しでもクリティカルシンキングをすることによって、一つ一つの物事の良し悪しが自分自身にとって、そして周りにとってどのような影響を及ぼすのかを考えられるようになるのだなと感じました。また、内容だけで無く、内田教授のプレゼンテーションの仕方にとっても衝撃を受けました。このような出張授業は、情報を大量に与えられるだけの時間という印象が今までありましたが、今回は問いかけとレスポンスの時間を十分に確保することで、実際にクリティカルシンキングを経験することを促されており、「良いプレゼンテーション」を実際に体感できるすごく有意義な講義となりました。

出張講義の様子



3.6.4 大阪公立大学

a 吉田先生講演会

グローバル探究・キャリア合同講演会

- 1 目的：探究活動を通して、高大連携の繋がる学びを知る
- 2 日時：令和4年5月20日（金）
- 3 場所：本校体育館
- 4 参加者：2年生182名 育友会役員10名
- 5 実施内容
探究活動の意義について
今大学が（社会が）求める学生（人物）について
高校での学びから大学での学びへの流れ



b 招待授業

1月18日（水）参加生徒 2年生5名、3年生2名で大阪公立大学を訪問した。高校生が大学を訪問し、大学教授や大学生との対話ができる機会となっている。高校生が自らの学びや変容を発表し、大学生から意見をいただける場である。また、教職課程を選択している大学生が、探究的な学びを進める高校や高校生の声を聞き、変化する学校現場を知ってもらう場にもなっている。高校生と大学生が互いに学びあえるよう設定していただいている。

2限目（10:45-12:00）

「吉田教授による特別講座」

2年生の生徒が吉田教授と自分自身や自分の探究の取り組みについてお話をさせていただいた。吉田教授からなぜ国際高校に入学したか、一番良かったと思うことは何か、という問いをいただいた。ほぼ全員が少人数制の英語の授業やネイティブの先生との英語授業と、志望理由が英語に関連することだったが、いちばんよかったこととして探究での人との出会いやつながり、学びなどを挙げた。吉田教授からは、探究活動での学びを自分たちはこれから進路とど



うつなげていくのかをしっかりと考えるようご指導いただいた。探究活動での悩みや進路の迷いを持っている生徒たちには、持続可能な社会を作るために自分たちは何を学び、何を身につけるために進学するのか、どの大学にどんな教授がいて、何を学びに行くのか、「目的思考型」で考えるようにと声をかけていただいた。

3限目（13:15-14:45）

「人間形成論」

2年生5名、3年生2名が参加。学校の概要や探究活動を軸として国際高校が育てたい力などについて担当教員が説明をした後、2年生はそれぞれが自分たちのグローバル探究における探究活動の取り組みを紹介について発表した。

・『いじめ』をなくすために取り組みたいこと

- ・ゴミを減らすための学校での取り組み
- ・獣害駆除されたいのちを無駄にしないために『ジビエ』を広める
- ・魚の「あら」を食べて

について、4名3組が授業のゼミにおける探究活動の発表し、1名は個人的な興味関心から取り組む探究活動について発表した。大学生からはさらに探究活動を深めるためのアイデアなどの意見をいただいたり、自身の高校時代の探究活動との違いについての感想をいただいたりした。3年生2名は探究活動の紹介と自分自身の変容、進路とどうつながったか、などについて発表した。



3.6.5 畿央大学

高校生国際会議に向けて、3年生の生徒が英語でプレゼンテーションや質疑応答をスムーズに行うために、畿央大学教育学部現代教育学科の福島玲枝先生による講義及びワークショップを2回にわたり実施いただいた。

1回目は5月18日（水）の1・2限に体育館にて行われた。テーマは、「英語で『言いたいこと』を『分かってもらう』ように伝えるために」であった。言いたいことを表現するために、いかに文章をシンプルに言い換えるかや、英語で伝えるためには、主語・動詞を明確にすることや簡単な表現にする工夫などを、生徒がワークショップで実際にやってみる機会を多く取り入れた、充実したものとなった。

2回目は、7月7日（木）2・3限に、リモートで行われた。福島先生は会議室からオンラインにて講義・ワークショップを展開されたが、ワークショップでは時々会議室から各ホームルームへ福島先生が様子を見たり、生徒に声かけをしたりしながら、生徒に直接会う機会ももちつつ実施された。

テーマは「英語で互いの考えを『理解しあう』ために」であった。グローバル探究で各自が探究している内容について英語でシンプルに伝え、ディスカッションする時間も取りながら、高校生国際会議で実際にやりとりをする場面を想定しながら行われた。

2回の講義・ワークショップを通して、生徒は英語で会議を行う心の準備を整え、また実際に発表・議論を行うためにどうすればいいのかを学ぶことができた。



3.6.6 東京都市大学

a 職員研修

東京都市大学 環境情報学研究科教授の佐藤真久先生をお招きし、2022年5月17日の午後
に職員研修を実施した。国際高校独自の教育プログラムの実施にホールスクールアプローチ
で取り組むために、全国の高校の最新の知見をご紹介いただくとともに、本校の特色を活か
し新たな学校づくりができるような基礎知識についての講義をいただいた。また、佐藤先生
には当日行ったグローバル探究の学年間交流・発表会にも参加いただき、コメント等も頂い
た。研修内容の詳細を以下に記す。

職員に対する事前課題

- ・ 自校のルーブリック、本年度方針、R4中期計画、グラウンドデザインを読み込む
- ・ 社会課題解決中マップ (<https://2020.etic.or.jp/>) に目を通し、自身の関心のある課題3つ
を選択し、その理由を準備する

研修内容（抜粋）

- これからの時代とありうる日本社会
- [ワーク①] 日本の社会課題とそのつながり（複雑性の認識、<https://2020.etic.or.jp/>
の活用によるワーク）
- 正解のない問いとともに生きる時代～学びの作戦変更
- 教育改革に見られる探究モードへの挑戦
- 求められる探究の高度化・自律化
- 多様な高校による多様な探究活動
- 「国連・ESDの10年」の経験を活かす
- SDGsの本質を捉える
- WW型問題解決モデルを活かす
- [ワーク②] 奈良国際らしい探究を考える+発表

研修会の様子



b 1年生へのプログラム導入

概要

当該学年は、1学期グローバル探究の様々な活動を経て、2学期以降では地域探究を進めた。その導入として、佐藤真久（2021）. 未来の授業 SDGsダイバーシティBOOK 宣伝会議 掲載のSDGsカードを用いて、日本が抱える社会問題とSDGsの関連性について学んだ。また、社会課題解決中MAP. <https://2020.etic.or.jp/>. (2023/2/24) を参照し、本書籍に挙げられている社会課題に現在進行形で取り組んでいる例について議論した。

目的

地域探究では地域の課題、日本の社会問題、SDGsのつながりを意識することで、社会の持続可能性について思考を深めた。地域課題のような自らの生活圏内における問題に焦点を当てることで、より大きな枠である日本の課題、さらには世界の課題を自分ごと化することを目標とした。その中で高校生として自分が社会に対して貢献できることをテーマに探究を進めた。また、本活動においても同級生と協働するなかで、コミュニケーション能力の向上も目的とした。

SDGsカードを用いた活動の様子（下記写真参照）

生徒はグループ毎にまずは、日本が抱える問題についてブレーストーミングを行い、発表した。その後、提示された日本が抱える問題について、議論を行った。グループ内では自分の興味関心に従って、問題を取り上げ、なぜその問題を選んだのか意見を出し合った。そして、それぞれの社会問題がどのSDGsに関連しているか、カードを用いて検討した。各グループで議論した後は、グループ毎に社会問題とSDGsの関連、なぜそのような配置にしたのかを教室内で共有した。

下記写真のように各グループで議論、カード配置が行われた。



3.6.7 名古屋国際中学校・高等学校

名古屋国際中学校・高等学校とは昨年12月に連携協定を結んだ。今年度は名古屋国際中学校・高等学校カンボジア研修オンライン参加会への参加、並びに互いのWWL高校生国際会議に参加した。

1. 「名古屋国際中学校・高等学校カンボジア研修オンライン参加会」

7月8日

「第1回オンライン学習会」

名古屋国際中学校・高等学校生徒のカンボジア研修へのオンライン参加に先立って、カンボジア基本情報オンライン学習会に本校生徒3名（1年生2名、2年生1名）が参加した。現地に滞在する旅行会社の方からカンボジアの基本情報や現在カンボジアが抱える問題などについて学んだ。

7月9日

「第2回オンライン学習会」

2回目は名古屋国際中学校・高等学校の生徒が実際に訪れる予定の村からカンボジア人の現地スタッフが中継で結んだ。日本側からの要望に答えながら、村の子どもたちに声をかけたり、ある家庭を訪れたりしながら、村の暮らしや生活について伝えてくれた。ちょうど小学校から帰りの子どもは裸足で学校に通っており、リュックの中から学習教材を見せてくれた。文字の練習をしているノートを見せてくれた。訪問した家庭ではあかちゃんを抱いたお母さんが台所を見せてくれるなどし、実際の様子がよくわかった。



8月18日

「カンボジアからのオンライン」

事前の打ち合わせで、名古屋国際高校の生徒さんが日本の食事をカンボジアで作って食べてもらう予定であるが、作ってきてほしいものはないか、という提案をいただき、奈良の名産である「柿の葉寿司」をリクエストした。

当日、カンボジアで生徒さんたちがカンボジアの植物の葉を使って、鯖の代わりにエビを使って柿の葉(?)寿司を作っている様子の中継してくれた。子どもたちや村の人たちが美味しそうに食べている様子も見ることができた。カンボジアの接続状況が厳しい時間帯もあったため、家庭から接続していた本校生徒は途中から見られなくなるなどのトラブルもあったが、現地からの生中継はオンラインではあったがワクワクする気持ちにつながった。

11月22日

「カンボジアの報告会」

メタバース上でカンボジアの写真を貼り付け、名古屋国際高等学校の生徒さんが報告してくれた。

2. 奈良県立国際高等学校 WWL高校生国際会議（7月29日実施）

名古屋国際高校より5名、3チームが参加。3つの会場でそれぞれプレゼンテーションを行い、ディスカッションにも参加した。

3. 名古屋国際高等学校 WWL高校生国際会議（12月27日実施）

本校から1名1組の生徒が参加した。メタバース上に作られた会場にアバターで参加、自身の探究活動の内容を発表したのち、アドバイザーからのコメントをいただいた。

以上、それぞれの学校のイベントにオンライン・対面で参加するなど、交流を続けている。名古屋と奈良はそれほど遠い距離にないので、今後、さらに対面での交流を活性化させ、学び合いの場を作りたいと両校担当者は考えている。

3.6.8 同志社女子大学

- 1 目的：同志社女子大学と締結した高大連携を図り、大学での学びを体験することで知る機会を持つため。
- 2 日時：令和5年2月20日（月）
- 3 場所：同志社女子大学（京田辺キャンパス）
- 4 参加者：1年生7名 2年生7名
- 5 実施プログラム
大学紹介
キャンパスツアー
模擬授業

6 生徒感想

- ・詳しい内容の模擬授業だったので、とても興味深かった。
- ・先生が明るく、質問をしても笑顔で答えてくださり、とても良かったです。
- ・オールイングリッシュの授業自体は本校でも実施しているような、少人数グループでの参加型だったけど、内容が難しかったです。けれど新鮮味もあって楽しかったです。
- ・オリンピックについて知らなかったことを色々知れてとても良かったです。今度は子どもや教育関係の勉強内容をもっと知れたらいいなと思いました。



3.6.9 コロラド州立大学

コロラド州立大学 境放射線保健科学学部 准教授 加藤宝光先生が、日本学術振興会アメリカ支部のJSPS Bridge Awardの助成を受け日本に一時帰国する際に、本校に立ち寄りご講演および生徒の探究活動へのアドバイスを行っていただいた。実施概要は以下の通りである。

2022年7月4日（月） 8：50～11：40

生徒探究発表会に参加していただき、生徒の探究活動に対する質問、およびアドバイスを行っていただく。

2022年7月5日（火） 8：50～11：40

1 限目（8：50～9：40）

対象：1年生全員

内容：体育館において、アメリカの文化、日本との違い、海外で学ぶことの意義などについてのご講演

2 限目（9：50～10：40）

対象：2年生全員

内容：1時間目の内容と同じ

3 限目（10：50～11：40）

対象：3年生海外大学進学希望者14名

内容：教室において、英語を用いて研究に関する専門的な内容の講義、および海外大学で学ぶことの意義などを講演。その後参加生徒からの英語による質疑応答をつける。

講演会に参加した生徒の感想

- 留学しよう！と勇気がでなかったのですが、今回講演会をしていただいて留学を試してみようと思えました。留学は良いことばかりではないけど、いつか自分の役にたつと思います。大学へ行くことできる研究に興味がわきました。
- お話を聞いていて、日本は先進国だと言われてるけどまだまだだなと痛感しました。アメリカは自分自身の独創性やリーダーシップ力がどれだけあるかがすごく関わっていて、学力だけじゃダメなんだと同時に、だからといって学力も大事だなと思いました。
- 海外に留学するという事は今まで考えたことなかったのですが、国際高校生として身近に考えないといけないという事だと改めて実感しました。自分の進路についてしっかり向き合おうと思いました。

講演会等の様子



体育館での講演会



教室での英語による質疑応答

3.6.10 タイ教職員招へいプログラム

令和4年度文部科学省委託「新時代の教育のための国際協働プログラム」初等中等教職員国際交流事業

「先生が変わる 子どもが変わる 学校が変わる 学びの場」をキーワードに実施される、未来を担う子ども達に影響力を持つ教職員を対象とした国際交流事業である。本校は今回のプログラムでのタイ教職員の受け入れ校となり、オンラインでタイ教職員を受け入れた。また、本校教職員がタイ日教職員の対話交流「わたしのESD」（全4回）の4回目のゲストスピーカーとして参加した。

11月30日（水）

タイ教職員による日本の学校訪問

- 校長による学校紹介
- 本校生徒によるグローバル探究の6つのゼミの紹介
- タイからの留学生による「日本の学校」プレゼン
- 書道部による歓迎のパフォーマンス
- 教職員交流（本校教員6名参加）



12月9日（金）

タイ教職員15名を招き（オンライン）、6つのグループに分かれ、グローバル探究のゼミで交流を行った。

各ゼミ約25～35名の生徒（高校2年生）、担当教員2名が参加、タイ教職員2～3名はオンラインで参加した。それぞれのゼミのテーマごとにタイ教職員は各国や各学校での問題点やその問題に対する取り組みなどを紹介、その後、生徒とセッションを行った。「みんなちがうからみんなで支え合う」ゼミでは、LGBTQの課題などについて生徒と対話が行われた。「いのちの輝きを未来に伝える」ゼミでは互いの学校のプラスチックゴミに対する取り組みなどの実践の紹介をしあった。



1月9日（月）

タイ日教職員の対話交流「私のESD」（ゲストスピーカー）

キーワード：自分の本気を授業にする、人・地域・世界とのつながり

タイ日教職員交流は連続して4回行われ、4回目のゲストスピーカーとして参加。ESDをライフワークと考えるようになったきっかけや、自分自身の人生を変えた出会い、授業での

実践、グローバル探究で最も大切にしている人との出会いなどについて語りながら対話交流の話題提供を行った。授業実践の仕方、ではなく、自分自身がどう生きるかを常に問いながらその姿を見てもらうこと、さまざまな問題に本気で向き合う本物のオトナと高校生達が出会うことが私自身のESDであり、仕事であると考えていることをお伝えすることができた。

1月20日（金）

リフレクション・ビジョン共有・閉会式

校長とゲストスピーカーとして参加した本校教職員が参加。

3.6.11 株式会社アイエスエイ「グローバル講演会」

WWL事業協働機関である株式会社アイエスエイには、昨年度まで、留学を希望する生徒対象の留学セミナーや海外大学進学を目指す生徒対象の海外大学進学セミナーなど、対象者を限ってのセミナーを実施していただいたが、対象者が広がらないという課題があった。そのため、本年度は、1年生全員を対象とし、株式会社アイエスエイ中谷氏、トフルゼミナール内藤氏を講師に招いて、「グローバル講演会」を実施した。

実施概要は以下の通りである。

2022年5月18日（水） 10：40～12：30

対象：1年生全員

内容：

- (1) 世界とつながるということ（校長）
- (2) グローバルマインドをもつ（株式会社アイエスエイ中谷氏）
留学や海外大学進学について
- (3) 国内でのグローバルな学び（トフルゼミナール内藤氏）
英語で授業を行う国内の大学
英語の資格取得について

実施の成果

- ・ 1年生の留学希望者が増加した。
- ・ 海外大学について、生徒が身近に感じられるようになった。
- ・ 英語の資格取得についてのモチベーションが向上した。

講演会等の様子



4 成果と課題

4.1 コンソーシアムの成果と課題

a. 成果

・ネットワークの構築

Google Workspace for Educationを活用して「ALネットワーク担当者Classroom」を作成し、適宜、高校生国際会議生徒実行委員会の進捗状況等の情報共有を行った。

・高校生国際会議

今年度の大きな成果は、奈良県初の高校生国際会議を開催できたことである。ALネットワーク運営指導委員会やALネットワーク運営委員会において、様々な助言をいただき、ALネットワーク校の連携が十分図れるよう検討してきた。高校生国際会議の実施に当たっては、何よりも、ALネットワーク校から集った生徒約40名による生徒実行委員の活躍なしには、成功しえなかったであろう。

生徒実行委員会では、学校の枠を超えて、積極的に意見を交わした。今回が県初の実施であり、何も具体的なことが決まっていないうちで、実施に向けて必要な役割や作業について、様々なアイデアを出し合った。また、あるときは、ファシリテーターと発表者の役割の違いについてディスカッションするなど、回を重ねるごとに共通理解を深めていった。

毎回、生徒自身による振り返りを行ったが、他校の生徒と意見を交わし多様な意見に触れることについて、有意義だと感じている生徒が多く、コンソーシアムとして取り組む中で生徒実行委員自身も多くのことを学んでいる。

高校生国際会議当日の発表についても、ALネットワーク校から4校が参加し、大阪府、愛知県、長崎県の高中生及びタイや台湾の高中生と、SDGs等の地球規模の課題について白熱した議論を交わした。会議をすべて英語で行うことに計画当初は躊躇していた生徒たちも、同年代の生徒たちから刺激を受け、当日は最初から最後まで必死に英語で取り組んでいた。県内でのコンソーシアムの取組が、県外、海外へと繋がりを見せている。これらの取組が、グローバル社会で活躍できる人材育成の一助となっていると実感している。

また、コンソーシアムとして、教員も連携を図っていただいている。各校担当者によるオンラインミーティングやGoogle Workspace for EducationのClassroomを活用し、適宜情報共有を行っている。また、ALネットワーク校の担当者には、生徒実行委員会において各役割のサポートを担っていただいた。生徒実行委員会では、学校の枠を超えて役割分担を行ったことから、必要に応じて、他校生徒のサポートもしていただき、教員自身も日頃の教育活動とは異なった気づきを大いに得ていただいたと感じている。

b. 課題

・スケジュールの調整及び物理的な距離

コンソーシアムを構築していく上で、スケジュールの調整や移動に係る物理的な距離が大きな課題として浮き彫りになった。すでに学校行事など、各校におけるスケジュールがかなりタイトに組まれており、オンラインによる打ち合わせの実施でさえ、日程調整が困難であった。また、学校の枠を超えて一体感を培おうとすれば、参集での話し合いが望まれるところであるが、高校生の集合場所への移動時間や引率可能な教員の調整も課題として挙げられた。

今後、オンラインの効果的な活用やコンソーシアムに係る行事の開催時期の工夫など、スムーズな連携の構築を図るとともに、本事業のさらなる活性化に向けて、検討を進めて参りたい。

4.2.1 拠点校の取組の成果と課題

a. 成果

- ・教科情報との連携

第1学年ではグローバル探究3単位のうち1単位を「情報」の時間とし、独立した時間を確保した。グローバル探究と関連性を大切にしながら実践を行ったが、全ての教科内容を網羅することはできなかった。次年度も引き続き第2学年で「情報」の時間を確保していきたい。

- ・来年度開校する中学校でのカリキュラム開発・組織体制の整備

事業1年目の課題を解消するために、本年度より校務分掌を再編成した。本事業は新設したESD部が中心となって取り組みを進めることができた。

- ・高校生国際会議の開催

生徒実行委員会が中心となって、第1回高校生国際会議を開催することができた。

- ・論文集の作成

第1期生が日本語及び英語で執筆した論文集を作成することができた。

- ・キャリアプランニング力の育成

本年度は第1期生が最終学年となり、キャリア支援部が中心となって、海外大学進学も視野に入れながら多様な進路選択をサポートすることができた。探究活動や世界の言語での学びを元に総合型選抜等で合格し、高校での学びを大学へとつなげようとする生徒も多く見られた。

- ・海外交流先の開拓

海外交流コーディネーターが中心となって、「世界の言語」の各選択言語（中国語、韓国語、フランス語、ドイツ語、スペイン語）の言語圏の学校とのオンライン交流が実現した。また、フランスのサン・テレーズ高校とは姉妹校協定を締結することができた。

- ・外部との連携の広がり

探究活動を行う中で、新たに様々な外部機関とつながることができた。また、昨年度からつながりのあった外部機関とも連携を深めることができた。

b. 課題

- ・カリキュラムの見直し

開校から3年間カリキュラム開発を行った学校設定科目「グローバル探究」「世界の言語」について、これで全学年のカリキュラムの実践を一通り終えることができた。これを機会にこの3年間の成果と課題を検証し、カリキュラムの発展に繋げていきたい。

- ・教科横断的な学びのためのカリキュラムマップの作成と活用

「グローバル探究」を中心に据えた教科横断的な学びを実践するために、年度当初にカリキュラムマップを作成しているが、活用にまでは至っていない。今後、各教科のシラバスを元に教科代表が調整を行い、教科横断的な学びが実現するようなシステムを構築していきたい。

次年度に、併設型中高一貫校として国際中学校が開校する。中学校では、「グローバル探究基礎」をカリキュラムの中に位置付けている。今後は 6年間にわたる長期的な実践に向けたカリキュラムの開発が必要となる。

- ・学校としての探究活動の方向付け

この一年間、カリキュラムアドバイザーの吉田教授をはじめ、多くの外部の方のご指導、ご支援を賜りながら、「本校らしい探究とは」という問いについて、教員で協議を進めてきた。ある一定の方向性は見つかったものの、全教職員で共有するところまでは至っていない。今後、本校が目指す探究活動について、全教職員が思いを一つに取り組んでいけるよう、力を注いでいきたい。

- ・連携校との共同の取り組み

高校生国際会議では、生徒実行委員として学校間の連携を進めることができたが、時期や各学校の事情もあり、全ての連携校の参加は実現できなかった。今後は、県教育委員会が中心となって、連携校と様々な場面でつながりを強めていくことができるように取り組んでいきたい。

- ・高大連携のシステムづくり

協定校を中心に、出前授業や大学訪問などの取組を進めることができたが、アドバンスプレイスメントの実現までには至っていない。大学側の仕組みづくりが難しいなど多くの課題もあるが、次年度に向けても大学と検討・調整の機会をもちながら、目標に向けて進めていきたい。

- ・事業終了後も持続可能な取り組みの開発

次年度は事業最終年度となる。県教育委員会の支援も受けながら、事業終了後もALネットワークが発展するよう、持続可能な取り組みについて検討を行っていきたい。

4.2.2 生徒・保護者アンケート結果

保護者・生徒向けアンケート結果

奈良県立国際高等学校

【実施概要】

・実施時期 R5年2月8日～3月4日（Google formで実施）

・回答数 生徒1年生 176件/184件(96%) 2年生157件/185件(85%) 3年生144件/158件(91%)

1年生保護者 90件/184件(49%) 2年生保護者 88件/185件(48%) 3年生保護者71件/158件(45%)

対象	項目	アンケート内容	肯定的回答 (%)		
			1年生	2年生	3年生
生徒	教育方針の共有	国際高校で「身につけたい力」について理解している。	91.5	82.8	93.1
	特色ある教育	国際高校では、特色ある教育活動が行われている。	93.2	95.5	95.8
	危機管理体制	学校では、安心して過ごすことができています。	87.5	89.8	95.1
	情報発信	学校は、classiやホームページなどで必要な情報を提供している。	77.8	72.0	81.3
	個別の生徒対応	先生方は、悩みや相談に適切に対応してくれている。	73.3	87.3	91.0
	多面的評価	先生方は、テストだけでなく様々な面から成長を評価してくれている。	80.7	85.4	91.7
	学習意欲	学校の授業は、やる気を引き出すものとなっている。	64.2	59.2	69.4
	進路保障	学校の授業は、進路希望に応じたものとなっている。	60.8	52.9	58.3
	家庭学習	家庭での学習に熱心に取り組んでいる。	47.4	57.3	68.1
	充実度	充実した学校生活を送ることができている。	89.2	87.3	85.4
	満足度	国際高校に入学してよかったと感じている。	83.5	76.4	90.3
保護者	教育方針の共有	学校は教育方針や教育内容をわかりやすく伝えている。	80.0	78.4	78.9
	特色ある教育	学校では、特色ある教育活動が行われている。	94.4	95.5	94.4
	危機管理体制	学校は、危機管理や安全対策に努めている。	81.1	76.1	84.5
	情報発信	学校は、保護者への情報発信に努めている。	72.2	65.9	74.6
	個別の生徒対応	教職員は、お子様の悩みや相談に適切に対応している。	74.4	80.7	87.3
	多面的評価	学校は、テストだけでなく様々な面からお子様の成長を評価している。	87.8	90.9	91.5
	学習意欲	学校の授業は、お子様のやる気を引き出すものとなっている。	82.2	81.8	74.6
	進路保障	学校の授業は、お子様の進路希望に応じたものとなっている。	73.3	70.5	70.4
	家庭学習	お子様は家庭での学習に熱心に取り組んでいる。	53.3	64.8	67.6
	充実度	お子様は充実した学校生活を送っている。	86.7	92.0	80.3
	満足度	お子様を本校に入学させてよかったと感じている。	88.9	92.0	88.7

生徒向け授業アンケート結果

奈良県立国際高等学校

【実施概要】

- ・実施時期 R5年2月8日～3月4日（Google formで実施）
- ・回答数 生徒1年生 160件／184件(87%) 2年生133件／185件(72%)

アンケート内容	肯定的回答（％）	
	1年	2年
おもしろい内容で興味や関心がわく授業である	76.3%	71.2%
iPadやプロジェクター等ICT機器を効果的に活用した授業である	67.7%	68.8%
生徒の活動（話す・聞く・読む・書く）を重視した授業である	78.5%	75.8%
説明が明確でわかりやすい授業である	83.4%	82.1%
あなたは、集中して授業に取り組んでいる	88.2%	87.7%
あなたは、学力が身に付いていると感じる	78.0%	72.8%

3年生向け総括アンケート結果

奈良県立国際高等学校

【実施概要】

・実施時期 R5年2月13日～3月4日 (Google formで実施)

・回答数 3年生 135件/158件 (85%)

		(%)	
英語	生徒の活動（話す・聞く・読む・書く）を重視した授業であった。	肯定的回答	92.6
	英語の力が身についたと思う。		84.4
iPad	授業では、iPadが効果的に使われていた。	肯定的回答	93.3
	iPadは自分の学習に役立った。		91.1
	iPadは学校外での学習に役立った。		91.9
	探究的な学習（自ら疑問をもち、それを解決する学習）に役立った。		94.8
グローバル探究に取り組むことでついた力について			
	あなたの「知識を活用し、課題を解決する力（探究力）」はついたと思いますか。	肯定的回答	94.1
	あなたの「協力・協働して互いに高め合う力（協働力）」はついたと思いますか。		89.6
	あなたの「試練を克服し前進する力（挑戦力）」はついたと思いますか。		90.4
	あなたの「新たなアイデアを生み出す力（創造力）」はついたと思いますか。		91.9
	グローバル探究に取り組むことで、あなたの「文化や考えの違いを大切にできる力（寛容さ）」はついたと思いますか。		94.8
	あなたの「進路に向けて行動を起こす力（キャリアデザイン力）」はついたと思いますか。		87.4
グローバル探究の中で、最も印象に残っている、学びがあったことは次のどれですか。			
	ボルネオ島の生物多様性		15.5
	ゼミでのファミリーとの活動		22.3
	スタディツアー		30
	高校生国際会議		12.7
	論文作成		18.2
	グローバル探究で学んだことは、あなたの進路希望をかなえるために役立ちましたか。	肯定的回答	60.7

世界の 言語	以下は、世界の言語を3年間選択した生徒のみ回答してください。		
	身近な内容について、話したり聞いたりすることができる。	肯定的回答	50
	身近な内容について、聞いたり読んだりすることができる。		50.8
全体を 通して	国際高校で魅力的だったことは次のどれですか。		
	グローバル探究		16.8
	英語		13.9
	世界の言語		14.9
	タブレット活用		19.5
	イングリッシュビレッジなどの課外活動		4.5
	国際交流		8.8
	在学中に海外留学できること		2.4
	留学生と学ぶこと		6.1
	部活動		7.5
	自分の将来を見据えて		5.6

3年生向け総括アンケート結果（記述回答）

【英語】英語の授業について感想を書いてください。

- ・積極的に話す力がついたように感じた。
 - ・参加型でよかった
 - ・プレゼンやディベートなど他の学校では少ない活動が沢山あったためになった。
 - ・ALT の先生が優しくて話していて楽しかった
 - ・みんなでディスカッションしたり意見交流をする授業が多く楽しめた。
 - ・実際に英語を使うスキルを伸ばせた
 - ・国内大学進学のため、単語や文法等の学習がもっと必要だと思いました。
 - ・ライティングが特に伸びたため、英語検定で役に立った。
 - ・ほかの学校とは違う学びをすることが出来た。話す力(プレゼンテーション力)が伸びた。
 - ・EAP ははるかに自分の英語力を伸ばしてくれたと感じている。海外進学を目指している私にとって英語「で」学ぶ、という環境はありがたかった。
 - ・どの授業も楽しくて入学時よりも主体的に学べるようになった。
 - ・英語のクラスが技能によって細分化されており、どの授業でどの技能を伸ばすかが明確だった。特に大きな不満もなく楽しかった。
 - ・生徒を中心に英語を使う授業だったので、とても英語力が伸びた。
- また、みんなが英語を発音よく話さない！と感じる授業だったので、私は英語の発音も伸びたと思う。
- ・話すことに力を入れているのはわかったが、もう少し文法もしてほしかった。
- ついていくのに必死だった。
- ・スピーキング、ライティング、リスニングとどれにおいてもバランスよく学習ができるような授業内容になっているため、苦手な分野を作ることなく学習できた。
 - ・オールイングリッシュの授業で、英語に毎日ふれていたのが普通の授業を受けているだけでも英語力が上がったと思う。

【グローバル探究】グローバル探究の中で、最も印象に残っている、学びがあったことについて、その理由を教えてください。

- ・自分の中で物事の捉え方がとても変わったと感じることができた活動だった。
- ・論文が結構本格的で大学へ行った時も役に立ちそうな経験だと思った。
- ・自分が探究してきたことを文字でまとめることでどのような学びがあったのか自分自身も知ることができるから。
- ・ファミリーの子と、探究活動を英語で発表するためにたくさん練習をして、自分の探究への理解もファミリーの仲も深まったと思うから

- ・簡単に解決できそうに思える問題でも、探究してその問題についてよく知っていくと複雑な問題だった、ということがよくあったので、自分が知っていること、知らない事を理解して探究に取り組むことが大事なんだと思いました。
- ・他の学校では絶対に味わうことのできないような探究がとても自分への良い経験になったと思う。WWL 事業も様々な面から探究を支えてくれたと思う。
- ・鹿の狩猟体験をした事。命の大切さを改めて知った
- ・医療機関の偏在により通院が難しい人がいて、そういった人達のために科学技術を使って医療の偏在を無くそうとしていること。
- ・人生の中で初めて、自分達で作った実験を行い、その結果から新たな発見を見つけるという挑戦ができてすごく楽しかった。
- ・自分の考えを文字に起こし相手に伝えるために、より多くの知識を得る必要があった沢山のデータを集めたから。
- ・実地取材を行うことで、より具体的に問題を考えるきっかけになった。
- ・担当の先生が最後までずっと親身に付き合ってくれたこと。
- ・1年の時に学んだボルネオ島は、私にもっと広く世界を見ることを教えてくれたと思います。知らず知らずのうちに自分が悪影響の歯車の一部になっていることに気づくことができ、行動をすることもできました。そこから、大きく世界を見てみるのが課題を解決する一歩なのだなと思いました。

【グローバル探究】あなたの進路に具体的にどのように役に立ちましたか。

- ・データサイエンスはまさに課題解決策をデータを使って導き出すものなので、課題発見力や協働力を一足先に身につけ始められました。
- ・海外進学のきっかけにもなった
- ・大学で経営学を学ぼうと思っているので、グローバル探求を学んだことで色々な問題を解決できるような事業を企画したり起業出来たらいいなという夢ができた。
- ・総合型選抜の探究型入試に役立った
- ・1年の時から学んできたボルネオ島への興味から今の興味が見つかり、大学での志望学科が決まった。
- ・卒業してからも活動を続けていきたいと思う。
- ・自分の探究テーマの内容についてさらに詳しく学べる学部学科を選べた。
- ・グロ探で得た知見はわたしの受験した大学の入試方法である小論文を書く際にとっても役に立った。多角的に物事を見たり、グラフを読み取ったりする技術はグロ探でできるようになったことだと思う。
- ・大学入学後にも使える知識や実践力が備わったと思います。大学のディスカッションなどで、大いに活用したいです。

・私がした経験は私の視野を広げ、今の世界によって知ることができたので、自分を成長させることができたと思います。そして、大学入試の「自分が高校時代にした活動」欄に書くものも多かったです。

【世界の言語】（3年生で世界の言語以外を選択した生徒対象）

世界の言語を2年間学んだ感想を自由に記述してください。

- ・三年間学びたかったと思う。
- ・英語以外も学ぶことで、視野が広がった。
- ・高校生のうちに英語以外の多言語を学べたのはとても嬉しかった。大学でも引き続き学びたいと思ったし、言語に対する興味や関心が増えた。
- ・割と身についた部分があったけれど中々実戦で使うのは難しかった。
- ・その国の文化や言語に触れることで、今まで知らなかったことが知れて異文化理解につながった。
- ・外国に行く事が難しい中で現地の先生から日本とは異なる文化や生活について聞く事やオンライン交流ができて良い機会になった。
- ・いろいろな言語を学ぶ事で英語の理解も深まった。
- ・英語以外の言語に触れることで、一から新しいことに挑戦する楽しさを知った。他文化を知ることで、互いに理解し尊重し合えらと思った。
- ・あまり実用的な段階まで学べなかった
- ・はっきりゆくと、週2時間に授業では少ない。もっと身につけたかったし、もっと授業をしたかった。でも、文化や慣習の違いを学べて貴重な体験ができたと思う。
- ・これはどの教科でも言えることですが、本当にどの先生も優しくいつも親身に寄り添って下さるのが本当に幸せでした。
- ・本当は3年間言語を学びたかったのですが、進路の関係上選ぶことができなかったのすごく残念でした。しかし、言語と文化を学ぶことでその国について深く学ぶことができることに気がついたり、言語を使って同じ年の学生と交流することができたりととても楽しかったです。
- ・日本語や英語との共通点などを見つけながら学習することができて楽しかった。

【世界の言語】世界の言語を3年間学んだ感想を自由に記述してください。

- ・他の言語との共通点や違いを知ることで文化の違いや価値観について知ることができた。
- ・話せるぐらい上達した。韓国語はこれからも続けようと思う。
- ・大学で、一個上のレベルから学ぶことができるようになった。
- ・モチベーションがあれば楽しく授業できる。ネイティブの先生も関わりやすく楽しかった。ちょっとした会話ならできるようになったのでよかったと思う。
- ・大学でも大体第二言語を学ぶけど、その先取りとしてできた感じで良かった。様々な文化に触れ、多様性もより身につく楽しい授業でした。

- ・言語を通して文化を学べたし、オンラインでの交流を通して友達もできた。
- ・高校では普通学べない第3言語をしっかりとしたレベルまで学べたため、将来のためにもなったし、なにより新しい言語を学べてとても楽しかったです。
- ・自分の進路を決定づけることになり、担当の先生方に資格勉強まで見ていただいて、本当にありがとうございました。
- ・中国語を習って、まずは難しい発音を覚え、日本とは違う漢字や英語とは違う読み方のピンインなど中国語特有のクセに苦戦したが、今では簡単な会話ができるようになっている。また、中国重慶高校や台湾嘉義高校との交流を通して向こうの文化や流行なども学べ、良い国際交流の機会となった。習うにつれてだんだん楽しくなっていたので、大学では第二外国語に中国語を選ぼうと思っている。ペアで話す練習や作文などがもっとあったら良いと思った。
- ・授業では言葉の勉強だけでなく、その国の文化についても詳しく教えてもらったのでより興味が深まった。実際に向こうで生活している生徒さんとオンラインを通して交流もできたのもっと話せるようになりたいという意欲が強くなった。

4.3 「グローバル探究」の評価分析について

学校法人 河合塾
アセスメント事業推進部
山口大輔

1. これまでの経緯と今年度の活動概要

昨年度はグローバル探究の時間において、教育理念に基づいた「育てたい6つの力」を毎時間振りかえる「セルフチェックシート」と、年数回振りかえる「成長セルフチェックシート」を作成した。2学期からの使用ではあったが、これにより生徒は6つの力を意識しながら自身の成長を実感し、一つ上のレベルにあがるためには具体的にどのような行動が必要となるのか認識できるようになった。また学校は生徒の自己評価結果を収集することでグローバル探究の効果を可視化することが可能となった。

同時に客観評価を行うために「学びみらい PASS (以下 MMP)」を導入し、MMP で測定するジェネリックスキルと6つの力の関係性を整理したことで、グローバル探究の効果を多面的に評価する仕組みを構築した。

今年度は成長セルフチェックシートの回答とMMPの結果を集計・分析することで、伸びている力はどんな力なのか？自己評価と客観評価に違いはあるのか？ゼミによる違いがあるのか？などを中心に見ていくことにした。

以下に今年度行った代表的な3つの分析結果について報告をする。

2. 【分析①】1期生の3ヶ年分析(20年度→22年度)

(1) 分析概要

20年度～22年度のMMP結果より1期生のジェネリックスキルの成長、および6つの力の成長について分析を行った。

(2) ジェネリックスキルの成長について

MMPではジェネリックスキルを「社会で活躍するために必要な汎用的な能力」と定義づけ、リテラシーとコンピテンシーの測定を行っている(図1参照)。

1期生の高1～高3の平均値をみると、特に伸びている力はリテラシーの「情報分析力」、コンピテンシーの「課題発見力」「計画立案力」となっており、具体的には「集めた情報を客観的かつ多角的に分析する力」「課題解決のために原因を追究しようとする姿勢や効果的な計画を立てる姿勢」が身についた生徒が多かったと言える(図2参照)。

なおコンピテンシーの対人系に関わる「親和力」や「協働力」が下がっているが、これは全国の傾向と同様であり特に問題視するほどの下がり具合ではない。「周囲と信頼関係を築こうとする姿勢」や「周囲と協力的に進める姿勢」というのは、日本の教育を受けていると自ずと高まるであろうし、それが高1時点であれば尚更であろう。

なおリテラシー総合は7段階、その他の力は全て5段階で測定している。

図1_MMPで測定するジェネリックスキル

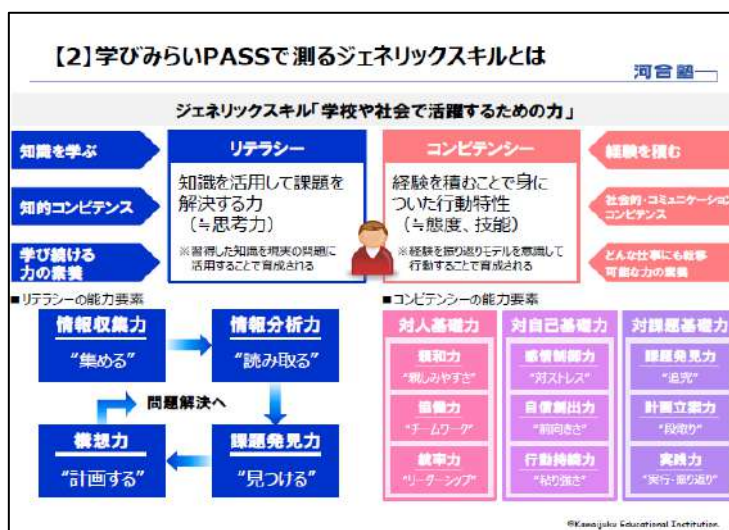
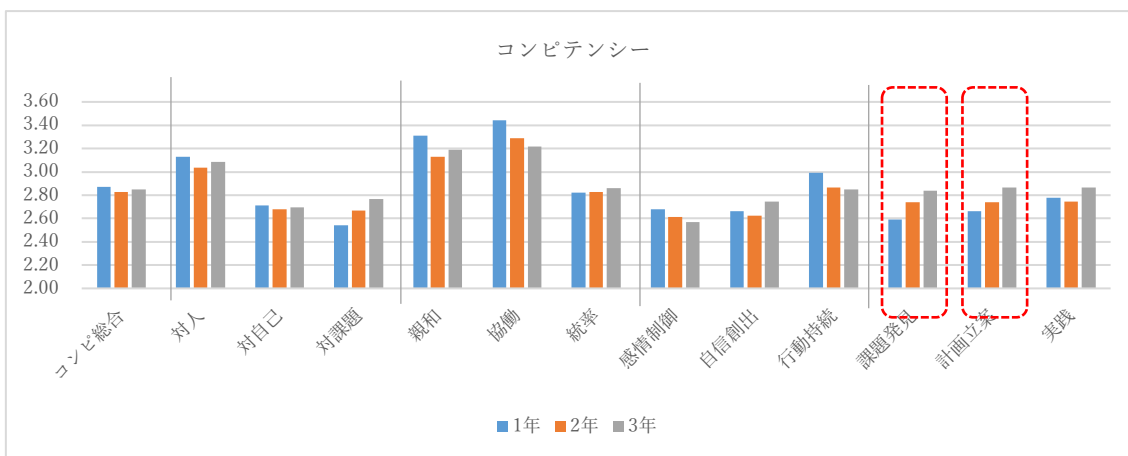
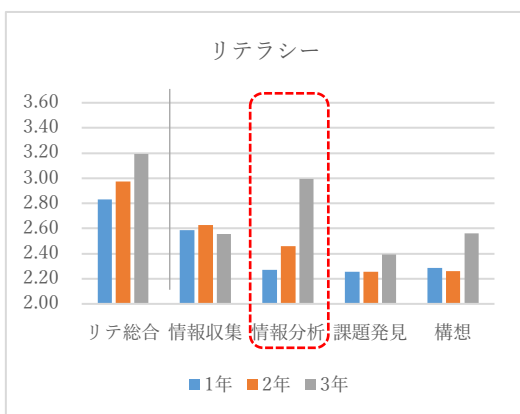


図2_ジェネリックスキル平均 (1期生の高1～高3)



(3) 6つの力の成長について

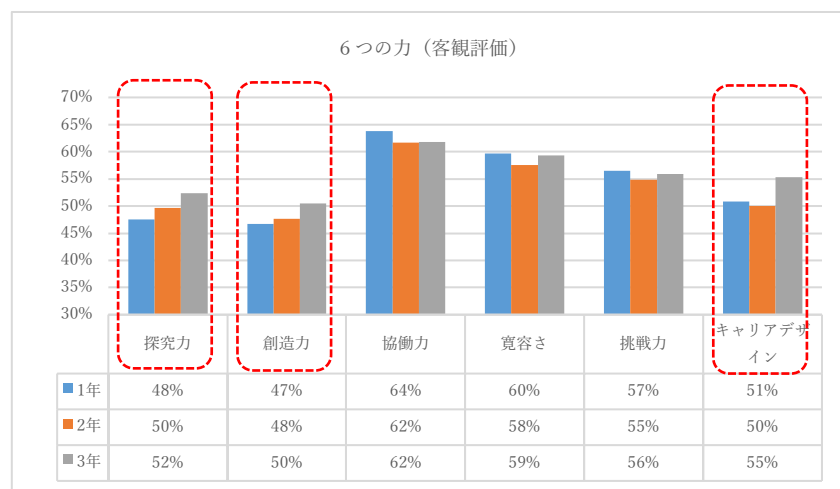
昨年度作成したジェネリックスキルと6つの力の紐づけに従って各スキルの合成変数が

ら6つの力の到達度を算出し、1期生の変化を見たところ「探究力」「創造力」「キャリアデザイン力」において特に成長が見られた（図3参照）。

勿論6つの力全てが成長したという結果が出るのが望ましいことではあるが、これらの資質能力は教科学力とは異なり、見えにくく変えにくい力である。また短期的な取り組みであげていくのが難しいという点を考慮すれば、3つだけでも成長が明らかになったのは学校の取り組みが順調に進んでいる証とも言えるだろう。

図3_「6つの力」とジェネリックスキルの紐づけ

	リテラシー総合	コンピテンシー								
		対人			対自己			対課題		
		親和力	協働力	統率力	感情制御力	自身創出力	行動持続力	課題発見力	計画立案力	実践力
探究力	●							●	●	
創造力	●									●
協働力		●	●	●						
寛容さ		●				●				
挑戦力						●	●			
キャリアデザイン力	●				●	●	●	●	●	●



3. 【分析②】 自己評価と客観評価を組み合わせた多面的な評価分析

(1) 分析概要

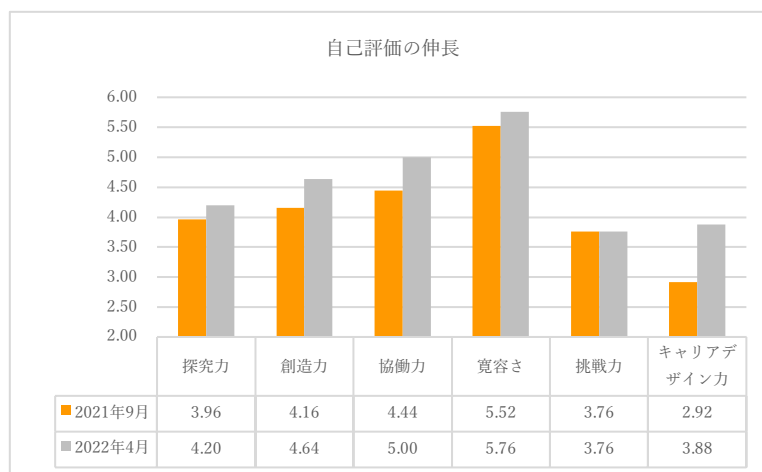
21年度下半期の「いのちの輝きゼミ」では成長セルフチェックシートの回答結果（25名分）をデータ収集していたため、高2（9月）から高3（4月）の自己評価における伸長度とともに、同じ25名の高2（4月）から高3（4月）かけてのMMPの伸長度を分析した。

(2) 成長セルフチェックシート（自己評価）の伸長について

高2（9月）と高3（4月）の6つの力における平均を比較したところ、挑戦力以外の5

つの力が全て伸びており、ゼミを通して成長を実感できた生徒が多かったことが分かる（図4参照）。特に「キャリアデザイン力」の伸長度の大きさが目立つが、その要因としては最初の自己評価が低かったこと、また高2から高3という自分の進路を真剣に考え始めるタイミングが重なったことなどが考えられる。いずれにしても探究で向き合った課題と自分の進路を重ね合わせる生徒は多かったであろう。

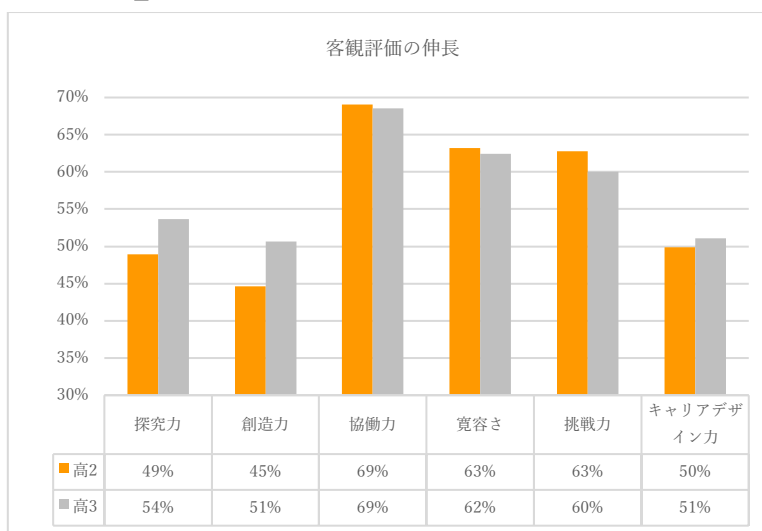
図4_成長セルフチェックシートの平均値



(3) MMP (客観評価) の伸長について

分析①の(3)と同様に各スキルの合成変数から6つの力の到達度を算出し、高2から高3にかけての変化を見たところ「探究力」と「創造力」において伸びが見られた(図5参照)。

図5_ジェネリックスキルから算出した到達度平均



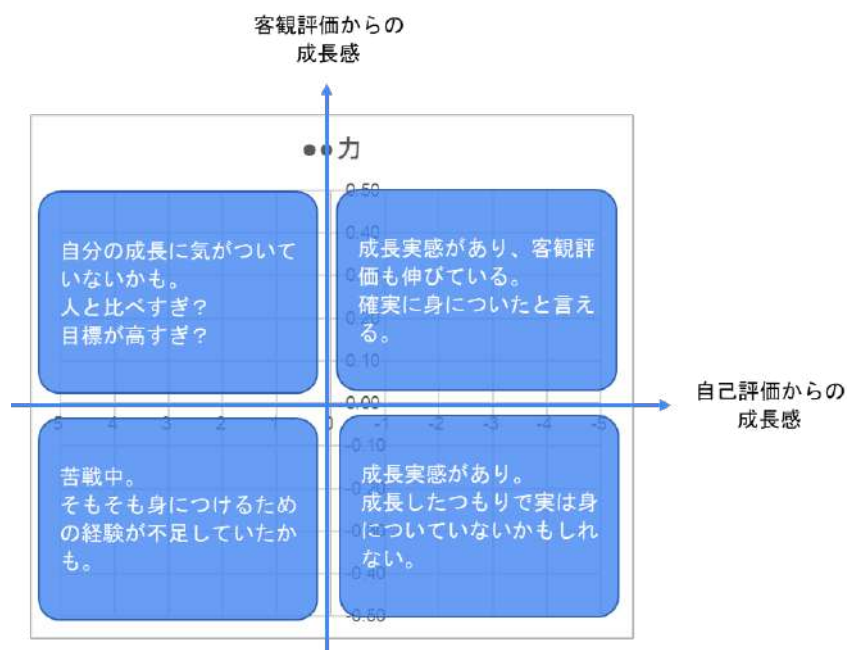
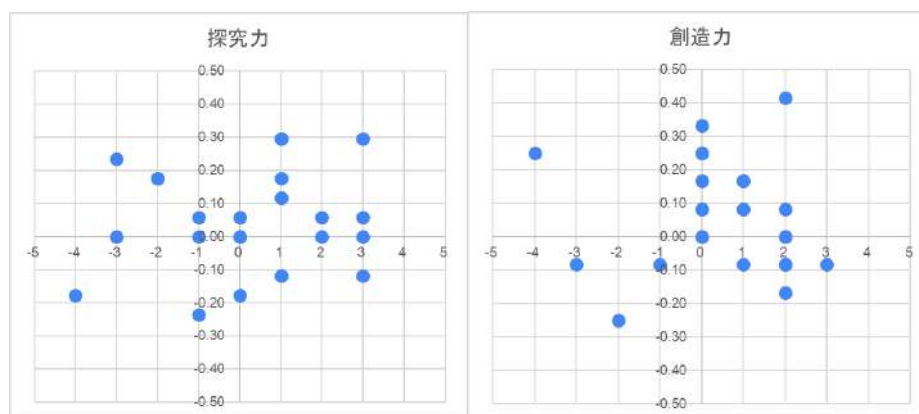
(4) 自己評価と客観評価を組み合わせた指導の可能性について

上記(2)(3)より「探究力」と「創造力」はいずれの評価でも伸びていたものの、そ

れ以外の力は異なる結果となっている。どちらの評価が正しいかということではなく、そうした違いがみられるのも、自己評価と客観評価を組み合わせた多面的な評価のメリットである、と言えるだろう。

例えば、自己評価でも客観評価でも成長が見られた「探究力」と「創造力」だが、25名の伸長を横軸に自己評価とし、縦軸に客観評価として散布図にすると当たり前のことではあるが全員が順調に成長している訳でない（図6参照）。

図6_自己評価と客観評価の伸長とその解釈例



左上のゾーンであれば「自己評価がマイナス成長だが、客観評価はプラス成長」という生徒なので、自分の成長が自覚できていない、もしくは他人と比べすぎて自分の評価を過剰に下げているのではないか、ということが考えられる。また右下のゾーンであれば「自己評価はプラス成長だが、客観評価はマイナス成長」という生徒なので、本人は成長したつもりになっているものの、実は身につけていない、ということが考えられる。このように4つのゾーンそれぞれにいる生徒を個別にチェックし、フィードバックしてあげることができれば、

グローバル探究の価値が更に高まっていくものと思われる。

4. 【分析③】22年度の成長セルフチェックシート分析（全学年）

（1）分析概要

今年度は全学年において成長セルフチェックシートの回答をデータ収集していたため、第1回（4月）から第4回（12月）の自己評価における伸長を分析した。なお「+αの力」とは、持続可能な社会をつくるために欠かせない力であり、これからの未来を生き抜くために持ち合わせてほしい力としてグローバル探究の担当教員の方々が設定した力である。

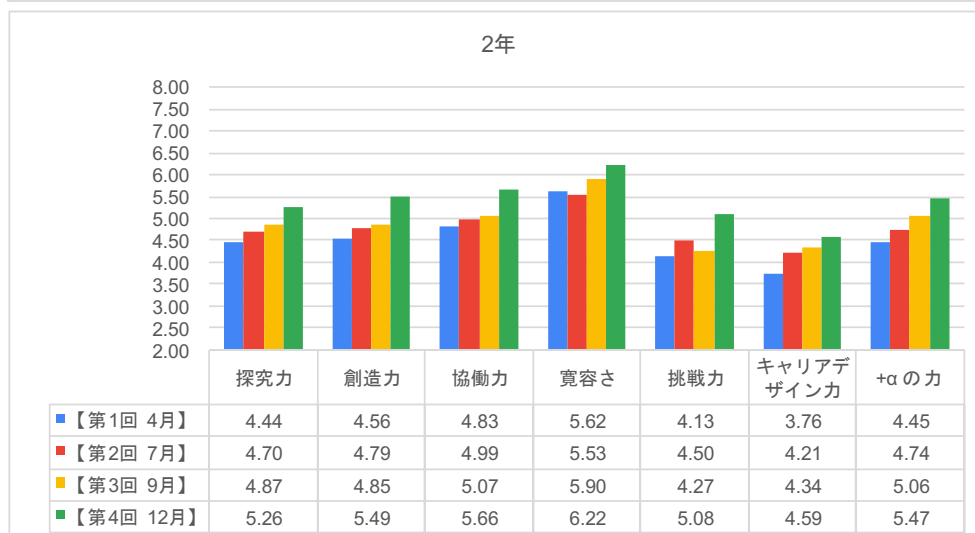
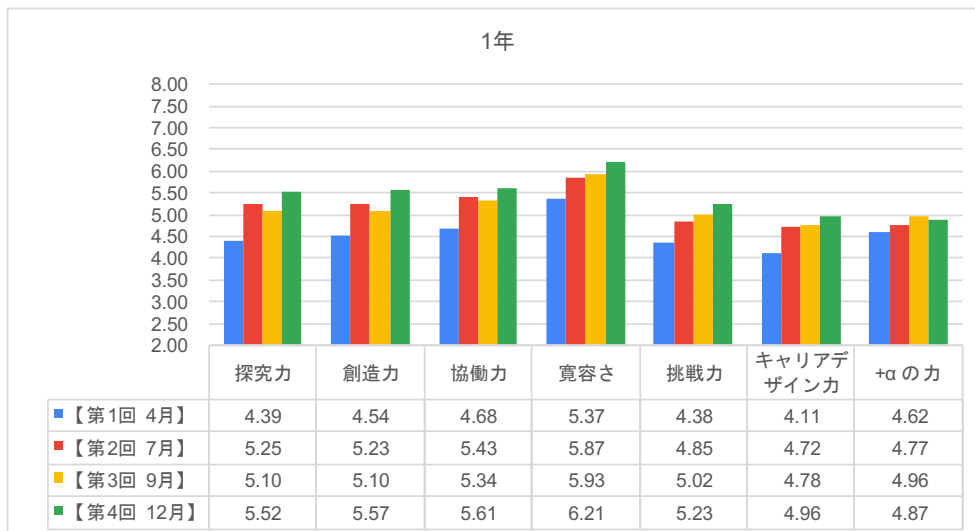
図7_22年度成長セルフチェック平均

1年（166人）	最も高い				差 (12月 - 4月)
	【第1回 4月】	【第2回 7月】	【第3回 9月】	【第4回 12月】	
探究力	4.39	5.25	5.10	5.52	1.13
創造力	4.54	5.23	5.10	5.57	1.03
協働力	4.68	5.43	5.34	5.61	0.93
寛容さ	5.37	5.87	5.93	6.21	0.84
挑戦力	4.38	4.85	5.02	5.23	0.86
キャリアデザイン力	4.11	4.72	4.78	4.96	0.85
+αの力	4.62	4.77	4.96	4.87	0.25

2年（135人）	最も高い				差 (12月 - 4月)
	【第1回 4月】	【第2回 7月】	【第3回 9月】	【第4回 12月】	
探究力	4.44	4.70	4.87	5.26	0.81
創造力	4.56	4.79	4.85	5.49	0.93
協働力	4.83	4.99	5.07	5.66	0.83
寛容さ	5.62	5.53	5.90	6.22	0.60
挑戦力	4.13	4.50	4.27	5.08	0.95
キャリアデザイン力	3.76	4.21	4.34	4.59	0.84
+αの力	4.45	4.74	5.06	5.47	1.01

3年（128人）	最も高い				差 (12月 - 4月)
	【第1回 4月】	【第2回 7月】	【第3回 9月】	【第4回 12月】	
探究力	4.61	5.06	5.34	6.02	1.41
創造力	4.63	5.16	5.46	5.81	1.18
協働力	4.81	5.21	5.55	5.96	1.15
寛容さ	5.73	6.06	6.07	6.60	0.87
挑戦力	4.26	4.92	5.38	5.80	1.54
キャリアデザイン力	4.23	4.61	4.80	5.44	1.21
+αの力	5.32	5.87	6.11	6.55	1.23

図8_図7をグラフ化



(2) 各学年の傾向について

図7図8を見ると、どの学年も平均値が上昇しており、グローバル探究の時間を通して生徒自身が成長実感を得ることができていると言えるだろう。また各回からは「寛容さ」が高く「キャリアデザイン力」が低いという傾向が見てとれる。これらが良い悪いという話ではなく、チェックシートで点検する活動内容が易しすぎないか、難しすぎないか、点検する内容に妥当性があるかなど、チェックシートの見直しを行う際に参考となるデータと言える。

各学年における成長（4月と12月の差）を見ると、高1は「探究力」、高2は「+ α の力」、高3は「挑戦力」が最も伸びており、特に全ての力において大きく伸びている高3生は高い成長実感を得られていると思われる。

これらが各学年におけるグローバル探究の狙いとどの程度噛み合っているのかは今後の分析課題としたいが、それらを考えるきっかけとしてゼミごとの傾向を次におさえておきたい。

（3）ゼミごとの傾向について

ゼミ別集計を行ったところ（高3は図9参照、高2は図10参照）、各ゼミにおいて最も成長実感が得られている力は以下のとおりであった。

- | | | |
|----------------------|--------------------|-------------------|
| 1. いのちの輝きを未来に伝える | ：高3) 挑戦力 | 高2) 挑戦力 |
| 2. グローバルが生み出す力 | ：高3) + α の力 | 高2) 創造力 |
| 3. みんなちがうから、みんなで支え合う | ：高3) + α の力 | 高2) 挑戦力 |
| 4. みんなでつくる、笑顔のコミュニティ | ：高3) + α の力 | 高2) + α の力 |
| 5. 先人の知恵を未来に届ける | ：高3) 挑戦力 | 高2) 創造力 |
| 6. 蒼い地球を未来につなぐ | ：高3) 挑戦力 | 高2) 挑戦力 |

また全体の伸びと比較したところ、高3では「3. みんなちがうから、みんなで支え合う」や「5. 先人の知恵を未来に届ける」が高く、逆に「2. グローバルが生み出す力」「4. みんなでつくる、笑顔のコミュニティ」ではやや苦戦している姿が見てとれる。ただし「2. グローバルが生み出す力」は第1回（4月）時点から既に高い数値であったために伸び代が他のゼミよりも少なかっただけであり、最終的な数値は最も高いゼミとなっていることから、単純に伸びだけでゼミを評価することはできない。また高2では「2. グローバルが生み出す力」や「5. 先人の知恵を未来に届ける」が高めであり、「6. 蒼い地球を未来につなぐ」で苦戦しているなど、学年間でのゼミの傾向もやや異なる。

今後ゼミごとの特徴を見ていくのであれば「成長度（伸長度合い）」と「到達度（最終的な数値）」の組み合わせで見つつ、扱ったテーマなどの影響も考慮し評価していきことが望ましいと思われる。

図9_22年度成長セルフチェック平均（高3_ゼミ単位）

		最も高い 最も低い					
		【第1回 4月】	【第2回 7月】	【第3回 9月】	【第4回 12月】	差 (12月 - 4月)	
3年 (128人)	探究力	4.61	5.06	5.34	6.02	1.41	
	創造力	4.63	5.16	5.46	5.81	1.18	
	協働力	4.81	5.21	5.55	5.96	1.15	
	寛容さ	5.73	6.06	6.07	6.60	0.87	
	挑戦力	4.26	4.92	5.38	5.80	1.54	
	キャリアデザイン力	4.23	4.61	4.80	5.44	1.21	
+αの力		5.32	5.87	6.11	6.55	1.23	
		【第1回 4月】	【第2回 7月】	【第3回 9月】	【第4回 12月】	差 (12月 - 4月)	3年全体との差
1.いのちの輝きを未来に伝える (22人)	探究力	4.18	4.86	5.00	5.95	1.77	0.36
	創造力	4.59	4.73	5.00	5.45	0.86	-0.32
	協働力	5.18	5.36	5.32	6.55	1.36	0.22
	寛容さ	5.50	5.91	6.09	6.68	1.18	0.31
	挑戦力	3.64	4.77	5.27	5.68	2.05	0.51
	キャリアデザイン力	4.05	4.23	4.18	5.09	1.05	-0.17
+αの力		5.32	5.59	5.64	6.23	0.91	-0.33
		【第1回 4月】	【第2回 7月】	【第3回 9月】	【第4回 12月】	差 (12月 - 4月)	3年全体との差
2.グローバルが生み出す力 (22人)	探究力	5.64	5.86	5.55	6.55	0.91	-0.50
	創造力	5.50	5.82	6.09	6.45	0.95	-0.23
	協働力	5.95	6.32	6.23	6.27	0.32	-0.83
	寛容さ	6.45	6.82	6.45	6.95	0.50	-0.37
	挑戦力	5.27	5.95	5.73	6.09	0.82	-0.72
	キャリアデザイン力	5.55	5.50	5.91	6.27	0.73	-0.48
+αの力		6.36	6.73	7.14	7.50	1.14	-0.10
		【第1回 4月】	【第2回 7月】	【第3回 9月】	【第4回 12月】	差 (12月 - 4月)	3年全体との差
3.みんなちがうから、みんなで支え合う (21人)	探究力	3.76	4.19	4.81	5.38	1.62	0.20
	創造力	3.38	4.29	5.05	5.14	1.76	0.58
	協働力	3.81	4.24	4.90	5.38	1.57	0.42
	寛容さ	4.62	5.29	5.76	5.90	1.29	0.42
	挑戦力	3.86	4.00	4.95	5.29	1.43	-0.11
	キャリアデザイン力	3.57	4.10	4.81	5.24	1.67	0.46
+αの力		4.52	5.67	6.10	6.48	1.95	0.72
		【第1回 4月】	【第2回 7月】	【第3回 9月】	【第4回 12月】	差 (12月 - 4月)	3年全体との差
4.みんなでつくる、笑顔のコミュニティ (23人)	探究力	4.48	5.30	5.17	5.52	1.04	-0.37
	創造力	4.78	5.52	5.00	5.52	0.74	-0.44
	協働力	4.57	5.13	5.30	4.96	0.39	-0.76
	寛容さ	6.00	5.91	6.04	6.43	0.43	-0.43
	挑戦力	4.30	4.83	5.13	5.22	0.91	-0.63
	キャリアデザイン力	4.17	4.57	4.30	5.09	0.91	-0.30
+αの力		4.22	4.74	4.83	5.30	1.09	-0.15
		【第1回 4月】	【第2回 7月】	【第3回 9月】	【第4回 12月】	差 (12月 - 4月)	3年全体との差
5.先人の知恵を未来に届ける (15人)	探究力	4.67	5.33	5.73	6.33	1.67	0.25
	創造力	4.53	5.47	5.73	6.13	1.60	0.42
	協働力	4.33	5.07	5.73	6.13	1.80	0.65
	寛容さ	5.73	6.00	5.67	6.53	0.80	-0.07
	挑戦力	4.27	5.73	5.67	6.47	2.20	0.66
	キャリアデザイン力	3.93	4.87	4.80	5.67	1.73	0.52
+αの力		5.33	6.13	6.40	6.40	1.07	-0.17
		【第1回 4月】	【第2回 7月】	【第3回 9月】	【第4回 12月】	差 (12月 - 4月)	3年全体との差
6.蒼い地球を未来につなぐ (25人)	探究力	4.88	4.88	5.80	6.44	1.56	0.15
	創造力	4.88	5.16	5.92	6.20	1.32	0.14
	協働力	4.84	5.08	5.80	6.48	1.64	0.49
	寛容さ	6.00	6.36	6.24	7.00	1.00	0.13
	挑戦力	4.20	4.52	5.60	6.20	2.00	0.46
	キャリアデザイン力	4.00	4.48	4.80	5.36	1.36	0.15
+αの力		6.08	6.40	6.64	7.32	1.24	0.01

図 10_22 年度成長セルフチェック平均 (高2_ゼミ単位)

		最も高い 最も低い					
		【第1回 4月】	【第2回 7月】	【第3回 9月】	【第4回 12月】	差 (12月 - 4月)	
2年 (135人)	探究力	4.44	4.70	4.87	5.26	0.81	
	創造力	4.56	4.79	4.85	5.49	0.93	
	協働力	4.83	4.99	5.07	5.66	0.83	
	寛容さ	5.62	5.53	5.90	6.22	0.60	
	挑戦力	4.13	4.50	4.27	5.08	0.95	
	キャリアデザイン力	3.76	4.21	4.34	4.59	0.84	
	+αの力	4.45	4.74	5.06	5.47	1.01	
		【第1回 4月】	【第2回 7月】	【第3回 9月】	【第4回 12月】	差 (12月 - 4月)	2年全体との差
1.いのちの輝きを未来に伝える (28人)	探究力	3.61	4.14	4.46	4.57	0.96	0.15
	創造力	3.96	4.25	4.32	4.96	1.00	0.07
	協働力	4.29	4.29	4.21	5.07	0.79	-0.04
	寛容さ	5.11	4.86	5.21	5.68	0.57	-0.03
	挑戦力	3.14	3.79	3.82	4.21	1.07	0.12
	キャリアデザイン力	3.11	3.43	3.50	3.75	0.64	-0.19
	+αの力	3.79	4.25	4.36	4.75	0.96	-0.05
		【第1回 4月】	【第2回 7月】	【第3回 9月】	【第4回 12月】	差 (12月 - 4月)	2年全体との差
2.グローバルが生み出す力 (25人)	探究力	4.24	4.44	4.96	5.72	1.48	0.67
	創造力	4.08	4.52	5.16	5.68	1.60	0.67
	協働力	4.88	5.04	5.40	6.04	1.16	0.33
	寛容さ	5.84	5.48	5.80	6.32	0.48	-0.12
	挑戦力	4.24	4.20	4.48	5.36	1.12	0.17
	キャリアデザイン力	3.60	4.28	5.12	4.80	1.20	0.36
	+αの力	6.80	6.84	7.36	8.04	1.24	0.23
		【第1回 4月】	【第2回 7月】	【第3回 9月】	【第4回 12月】	差 (12月 - 4月)	2年全体との差
3.みんなちがうから、みんなで支え合う (28人)	探究力	4.79	4.57	5.00	5.50	0.71	-0.10
	創造力	5.07	4.57	5.18	5.79	0.71	-0.22
	協働力	4.93	4.71	5.46	5.64	0.71	-0.12
	寛容さ	5.61	5.43	6.46	6.36	0.75	0.15
	挑戦力	4.57	4.79	4.39	5.39	0.82	-0.13
	キャリアデザイン力	4.04	4.07	4.43	4.79	0.75	-0.09
	+αの力	5.36	5.54	6.11	6.00	0.64	-0.37
		【第1回 4月】	【第2回 7月】	【第3回 9月】	【第4回 12月】	差 (12月 - 4月)	2年全体との差
4.みんなで作る、笑顔のコミュニティ (27人)	探究力	4.67	5.44	5.19	5.48	0.81	0.00
	創造力	4.78	5.81	5.00	5.63	0.85	-0.08
	協働力	5.41	5.93	5.41	6.11	0.70	-0.13
	寛容さ	5.67	6.33	6.07	6.63	0.96	0.36
	挑戦力	4.52	5.22	4.74	5.48	0.96	0.01
	キャリアデザイン力	4.15	5.15	4.93	5.22	1.07	0.24
	+αの力	2.15	2.78	2.85	3.63	1.48	0.47
		【第1回 4月】	【第2回 7月】	【第3回 9月】	【第4回 12月】	差 (12月 - 4月)	2年全体との差
5.先人の知恵を未来に届ける (10人)	探究力	3.90	4.50	4.40	5.00	1.10	0.29
	創造力	3.90	4.60	4.10	5.20	1.30	0.37
	協働力	3.70	4.80	4.90	5.00	1.30	0.47
	寛容さ	5.00	5.80	5.90	6.10	1.10	0.50
	挑戦力	3.50	3.90	3.90	4.30	0.80	-0.15
	キャリアデザイン力	2.80	3.80	3.50	3.70	0.90	0.06
	+αの力	4.50	4.30	5.20	5.80	1.30	0.29
		【第1回 4月】	【第2回 7月】	【第3回 9月】	【第4回 12月】	差 (12月 - 4月)	2年全体との差
6.蒼い地球を未来につなぐ (17人)	探究力	5.53	5.18	5.00	5.12	-0.41	-1.23
	創造力	5.41	4.88	4.94	5.53	0.12	-0.82
	協働力	5.24	5.12	4.94	5.76	0.53	-0.30
	寛容さ	6.47	5.41	6.00	6.18	-0.29	-0.89
	挑戦力	4.65	4.82	4.00	5.41	0.76	-0.18
	キャリアデザイン力	4.53	4.35	4.00	4.88	0.35	-0.48
	+αの力	4.24	4.53	4.53	4.71	0.47	-0.54

5. 今後の見込み

次年度は上記【分析③】に23年度実施予定のMMP結果を紐づけ、分析を行う予定である。またゼミごとの結果についても担当教員と振りかえる機会を持ちながら「グローバル探究」の授業改善に活かす取り組みを行っていきたい。

以上

4.4 本校ならではの特色のある学校づくり ―カリキュラムアドバイザーからの報告―

奈良県立国際高校 カリキュラムアドバイザー 吉田敦彦
(大阪公立大学現代システム科学域教育福祉学類 教授)

創設3年目、完成年度を迎える奈良県立国際高校のカリキュラムアドバイザーとしての活動を振り返り、そこで得た知見を報告する。報告者は、交流協定を結んだ大阪公立大学の教育学を担う教授として、開校初年度から本校のヴィジョンに共鳴し、グローバル探究の授業参観、大学の講義への生徒招待、担当教員と意見交換等を行ってきた。今年度は、グローバル探究のカリキュラム開発を中心に、いくらかのアドバイスを行ってきた。

1. 主な活動項目

- 前年度までの探究学習についての振り返りを担当教員と行ったうえで、探究活動の意義とキャリア形成に関して、2年生対象の講演会を行う。
- 定期テストを「個人探究週間」に置き換える新たな試み、特にゼミ毎に異学年が学び合う「たてにつながる探究交流会」。この意義について確認し合い、以降、回を重ねる
- 本校ならではの特色をもつ探究学習カリキュラムの方向性を明確化するため、校長・担当部長・主任との意見交換会（頻回）。
- 意見交換を踏まえた全校教員への研修会。
- WWL全国連絡協議会において、大学との教育連携について報告。
- 第一回「高校生国際会議」を参観して、コメント。
- ユネスコアジア文化センター（ACCU）主催タイ・日本教員交流の企画アドバイザーとして、タイ国の教員による本校探究ゼミでの授業実践のアレンジや、本校グローバル探究の意義に関するタイ教員へのプレゼンテーションをサポート。
- 大阪公立大学において、本校生徒へのゼミ講座、および「人間形成論」講義での生徒による探究学習発表会の実施。

以下では、とくに本校の特色ある探究学習カリキュラムの意義についてアドバイスした教員研修会の内容を振り返り、今後の方向性について記す。

2. 従来の探究学習と比した本校グローバル探究の特色ある強み

3年目を迎えた国際高校でのグローバル探究は、たしかに開発途上であるが、「2010年代の探究学習の弱点」を超えていく先進的なチャレンジとなっている。従来の探究学習においては、「データ処理やプレゼン方法などのスキル能力はアップするが、それを用いて解決しようとする課題への『当事者意識』『本気で何とかしなくちゃ』が育っていない」（WWL評価会議F高校）、あるいは「（全国の先行事例では、）課題設定→情報収集→整理・分析→まとめ・表現」のサイクルを実践することに重きがおかれすぎており、そもそも何のために行うのかという目的が欠落しているケースが多い」（河合塾）といった課題がある。だから、「浅いアクティブラーニングになっている」との反省のうえに、20年代学習指導要領の探究学習は「深い学び」が前面に出された。この点で、初年度より本校の探究学習は、「自分事にする」という当事者意識や、「そもそも何のために」という目的意識を明確にして、問題発見・解決を念頭においた深い学びの過程を正面から追求しているのが特色となっており、強みとなっている。

3. 自ら課題を発見する力と解決スキルのどちらを優先するか

とはいえ、この「自分の課題を見つける」というのが、これまで課題を与えられて学んできた生徒にとって、難しいことでもある。だから、これを後回しにしがちになる。A) (いつ使うかわからない) 解決スキルを身に付けるのが先か、B) 解決したい課題(テーマ)を発見するのが先か。このディレンマのなかで、忍耐強く時間をかけてB)を先行させたい。「外から与えられた課題」でなく「自分で落とし込んだ課題」が見つかる、その解決のための方法スキルは、適切なものを探して実践的に習得できる。スキル(How to)は、それだけを切り出して教える、と、空疎な「やらせ」になりがち。それを使って「何を」を解決するか、やりがいのある目的意識と結びつけながら教えるのが、探究学習では特に大事である。

教科学習では、「将来役に立つから」「いつか使えるから」と、何のために今学んでいるか実感を持ってないことが多い。目的が、現在の学びの中に内在していないと、テストのため、入試や進学のため、といった外にある目的のために学ぶ姿勢を育ててしまう。その結果、今ここで学んでいること自体の喜び、今自分が持っている関心への取り組みが、先送りされてきた。そのような学び方から脱却するのが、探究する学びの真骨頂である。

4. 課題発見力を育むために大切な視点

- 1) 「もやもや感」、カオス、回り道が大事： 自分自身の課題(目的・テーマ)発見は、ワークシートで直線的段階的に教えられるものではない。生徒が「もやもや」し始めるのは、避けるべき困った事態ではない。むしろ、チャンス(きちんと探究のプロセスを歩み始めている)とポジティブに受けとめて、そのプロセスに寄り添う。すぐにテーマが見つからなくて当たり前。むしろ「すぐに答えが出ない問いに向き合う力」が育つ。
- 2) 「ロールモデルと出会う」という方法： 探究プロセスは、全ての生徒が同じルートで歩むのでないから、定型的なカリキュラムにするのは難しい。仕組める一つは、「ロールモデル」との出会い。背中をみて憧れて学び(真似び)たくなるような、魅力的な大人、先輩の姿。教員自身の探究の姿も含めて。逆に言えば、自分の頭の中でグルグル考えても、同輩同士で話し合っても、なかなかテーマ・課題と出会えないことも多い。
- 3) 探究プロセスを追体験するモデルカリキュラム作り：初年次の導入においては、社会のなかで本気で取り組むべきリアルな問題について、現に自ら取り組んでいる大人の探究プロセスを、追体験するカリキュラムが適切ではないか。(担当教員自身が探究している課題があればベスト。)何のために、という目的が明確なプロセスのなかに、必要な方法スキルも導入していく。そのうえで、6つのゼミテーマを見据えながら、自分事のできる課題、自分にもできるアクションを考えながら、2年次前半にかけて自身の課題テーマを見つけることができるようにファシリテーションしていく。

以上の視点に立って、本校のグローバル探究のカリキュラムは、次第に開発が進んでいる。課題解決の追体験プログラムとしてはボルネオ生物多様性保全カリキュラムがあり、先輩のロールモデルを活用する「たてにつながる探究交流会」、校外のロールモデルになる大人に会いに行く「スタディツアー」等がそうである。個別の探究プロジェクトにおいても、先行して取り組んでいる地域の大人や行政者にインタビューしたり手伝わせてもらったりする活動が盛んである。「社会に開かれた教育課程」の内実であるとも言える。このような国際高校の探究活動の特色が、さらに展開していくことを応援したい。

表ア 令和4年度における1学年の教育課程表

奈良県立国際高等学校 全日制課程 国際科

区分	教科	科目	標準単位数	国際科		備考
				1	計	
普通教科	国語	現代の国語	2	2	4	
		言語文化	2	2		
		論理国語	4			
		文学国語	4			
		古典探究	4			
		国語探究Ⅰ	3			
		国語探究Ⅱ	4			
	地理歴史	地理総合	2		2	
		地理探究	3			
		歴史総合	2	2		
		日本史探究	3			
		世界史探究	3			
	公民	公共	2			
		政治・経済	2			
		倫理	2			
	数学	数学Ⅰ	3	3	5	
		数学Ⅱ	4			
		数学Ⅲ	3			
		数学A	2	2		
		数学B	2			
		数学C	2			
		数学探究	2			
理科	物理基礎	2	2	4		
	化学基礎	2				
	生物基礎	2	2			
	物理	4				
	化学	4				
	生物	4				
	理科探究	3				
保健体育	体育	7~8	2	3		
	保健	2	1			
芸術	音楽Ⅰ	2	2※7	2	※7より1科目選択	
	書道Ⅰ	2	2※7			
家庭	家庭基礎	2	2	2		
情報	情報Ⅰ	2			「情報Ⅰ」はグローバル探究Ⅰで代替	
普通教科・科目 小計				22	22	
専門教科	英語	総合英語Ⅰ	3~6	4	6	
		総合英語Ⅱ	4~8	2		
		総合英語Ⅲ	4~8			
		ディベート・ディスカ	2~6			
		ディベート・ディスカ	2~6			
		エッセイライティング	2~6			
		エッセイライティング	2~6			
		EAPⅠ(English for Ac	2			
		EAPⅡ(English for Ac	6			
	国際教養	世界の言語Ⅰ	2	2	5	
		世界の言語Ⅱ(中韓西	2			
		世界の言語Ⅲ(中韓西	2			
		グローバル探究Ⅰ	3	3		
		グローバル探究Ⅱ	3			
		グローバル探究Ⅲ	3			
ワールドヒストリー探		3				
イマージョン理数	3					
専門教科・科目 小計				11	11	
各教科・科目 計				33	33	
総合的な探究の時間						「総合的な探究の時間」は「グローバル探究Ⅰ~Ⅲ」で代替
各教科・科目 等 計				33	33	
特別活動	ホームルーム活動			1	1	
合 計				34	34	奈良TIMEは「グローバル探究Ⅰ」で実施
(注)						

表ア 令和4年度における2・3学年の教育課程表

奈良県立国際高等学校 全日課程 国際科

区分	教科	科目	標準単位数	国際科(理系型)			国際科(文系型)			国際科(海外進学科)			備考	
				学年			学年			学年				
				2	3	計	2	3	計	2	3	計		
普通教科	国語	国語総合	4											
		現代文B	4			3	3		3	3				
		古典A	2											
		古典B	4			2	2		2	2		10		
		国語探究I	3	3										
		国語探究II	3		4									
	地理歴史	世界史A	2	2										
		日本史A	2							3※ウ				※ウより1科目選択
		世界史B	4			3	2		7	3	2			
		日本史B	4			2			9	2				
		地理A	2											
		地理B	4	2	2									
		世界史探究	2					2※キ						※キより1科目選択
		現代社会	2						0					
	公民	政治・経済	2					2※イ	2	2	2※イ	2		※イより1科目選択
		倫理	2					2※キ	4		2※オ	4		※オより1科目選択
		数学I	3											
	数学	数学II α	4	4										
		数学II β	4			4	3							
		数学II γ	4								4			
		数学III	5	1	5									
		数学A	2											
		数学B	2	2				2			2			
		数学探究	2		2				2			2		
	理科	物理基礎	2											
		化学基礎	2	2				2			2			
生物基礎		2												
物理		4	2※イ	4※カ									※イより1科目選択 ※カより1科目選択(但し、第2学年で履修した科目を継続履修)	
化学		4	2	3										
保健体育	体育	7~8	2	3			2	3	6	2	3	6		
	保健	2	1				1			1				
芸術	音楽I	2												
	書道I	2												
家庭	家庭基礎	2												
	社会と情報	2											「社会と情報」はグローバル探究I(2単位)で代替	
普通教科・科目 小計				23	23	46	23	17 19	40 42	21	12・ 14 15・ 16 17・ 19	33・ 35 36・ 37 38・ 40		
専門教科	英語	総合英語	8~14	3	3		3	3		3	3			
		異文化理解	2											「異文化理解」はグローバル探究II(2単位)で代替
		ディベート・ディスカ	2	2				2			2			
		ディベート・ディスカ	2		2			2			2			
		エッセイライティング	2		2			2			2			
		EAP I (English for Ac)	2								2			
	国際教養	EAP II (English for Ac)	4									4		
		世界の言語I	2											
		世界の言語II(中韓西)	2	2				2			2			
		世界の言語III(中韓西)	2					2※イ			2※イ			
		グローバル探究I	3											
		グローバル探究II	3	3				3		12	3			
		グローバル探究III	3		3			3		14		3		
		ワールドヒストリー探	2									2※オ		
サイエンス探究	4						4							
イマージョン理数	3									3※ウ				
専門教科・科目 小計				10	10	20	10	14 16	24 26	12	17・ 18 19	29・ 30 31		
各教科・科目 計				33	33	66	33	33	66	33	33	66		
合 計				34	34	68	34	34	68	34	34	68	奈良TIMEは「グローバル探究I」で実施	
(注)														